

---

# 吉田良恵の魔法

Yoshi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

吉田良恵の魔法

### 【Nコード】

N2841BJ

### 【作者名】

Yoshi

### 【あらすじ】

魔法が日常に存在している、もうひとつの日本。

姉を亡くした少女は、姉の亡くなった理由を知ろうと同じ学校へ進学した。

少女は姉の想いに近づこうとし、同時に自らの歩むべき道を探し始める。

魔法モノ企画「The Magical Book」参加作品。

## 序章 『魔法』（前書き）

本作品はフィクションです。実際の、地球とは関係ありません。そのため、一部に史実と異なる事実が含まれております。

## 序章 『魔法』

『吉田良恵と魔法』

1945年 第二次世界大戦終結

1946年 日本国憲法公布

1950年 朝鮮戦争勃発、警察予備隊発足

1951年 サンフランシスコ講和条約・旧日米安全保障条約締結

1966年 日本国政府内に魔法省設立

無限にある平行世界の、とある可能性のひとつ。

かつて、世界にはなかったそれを、人は魔法と名づけた。

\* \* \* \*

風が吹いていた。塩分を含んだそれが、白いフード服に纏わりつく。四月を目前にしても、甲板はまだ寒い。少し厚めに着てきたのは正解だった。

東京湾を出てどのくらい経ったのだろう。二時間にはなるまい。あえて、時計は見なかった。見ると、これから先の気が遠くなる船旅を乗り越える自信がない。私は広い水の絨毯の上にいた。東京も遠くなれば、海はまだ見るに耐える。青い海に、白い飛沫がはじける。魔法を使わない時代遅れの檻褸船が走ると、そこは白線が通った。

はくせん、と口にしてみる。脳裏に真先に過ぎった漢字が「白癩」であることに気づき、私は笑った。ああやはり、医者の子はどこまで行っても医者の子なのだ。

実家で分かれてきた誰かに噂されているような気がして、くしゃみが出た。寒さのせい。そう言い聞かせて、フードのポケットに手を入れた。固い艶やかな表紙が手に触れた。

姉さま。潮の臭いは、やっぱり臭いです。それでも貴方もそこで学び、そこで何かを感じたのですか。

潮風が目染みだ。一瞬の、黙祷だった。静けさが、寒さを助長する。春は、まだ遠いのだ。

\* \* \* \*

制服は思いのほか、可愛かった。

私の通うことになった学校では、制服に原則制限はない。しかし、推奨するものは男女ともに二パターンずつ規定のものが用意されていた。女子はブレザーとセーラー服、男子もブレザーと学ラン。また、派手すぎなければ、学生服に近い形態のものであれば許されるらしい。

私は目立つのがイヤなので、僅差で着ている人が多いかなと予想したブレザーを選んだ。

赤いチェックのスカートにブレザー、これが思いのほかかわいい。女子の好みをよくわかっているな、と思う。私はあてがわれた部屋の中で姿見鏡を眺め、くるりと一回転してみた。スカートの裾が翻る。少し短い、と恥ずかしくなった。最近はこのものだと聞く。孤立した世界であり目立つと、更に孤立してしまう。そうなら目も当てられないから、と、上級生のファッションを真似してみたのだった。

けれど、それでもまあ、これは十五歳にはまだ早すぎる。シヨートヘアの黒髪の、たいして化粧気もない自分の顔を見て、ため息をついた。もっと大人っぽかったら似合うかもしれないのに、と誰も居ない部屋で、ひとり顔を赤くした。

蓮華の花の校章を胸元につけ、廊下に出ると、同じくして扉を出ようとしていた人と目が合った。隣の部屋の住人である。

「あ、おはようさん。昨日、来たコちゃんなあ？」

人懐っこい笑顔で話しかけてきた。

「私、中井な、中井 仁美。よろしくな」

独特のイントネーションが彼女が関西人であると教えていた。けれども、関西といっても広い。一口に大阪人とみなすのはちよっと違う気がした。

「私は、吉田 良恵です。東京に住んでいました」

「東京モンか。私は大阪人やけど、東京モン相手でも許したるわ。

あははは」

何が面白いのか、一人で笑っている仁美を見た。

笑う度に前髪が揺れた。短くカットされた髪は、少し茶色く染めていて活発な性格をより印象づけた。

「ま、私は京都も混ざつとるから雑種なんやけどな」

「あ、私もです。生まれは、長野ですから」

「そうなんやー！ めっちゃええやん。雪とかキレイやし、ボードできるし最高やん」

否が応でも雪の話題になる。その度、私は凍えるような冬を思い出す。昔、北海道生まれの人気アーティストが歌っていたフレーズが頭に浮かんだ。

いつか二人で行きたいよ。雪が積もる頃に。

いやいや、それは拷問以外の何物でもない、と思つて、言う。

「そんないいものじゃないですよ。雪が積もりすぎたらドア開かなくなる時もありますし、凍死者も毎年出ますしね」

まあ、北海道のアーティストが感じていた寒さに比べれば、甘えと言つべきかもしれない。けれども、私は長野の冬が嫌い、たまらなかった。何より私は、実家の古臭い慣習に捉われた、淀んだ空気がどうしようもなく嫌いだったのだ。

「あ、急がんと。入学式はじまるで！ 行こう」  
と、私の手をとった。その温もりが、今の私には辛かった。それでも私は、この暖かさに慣れていかないといけない。だって私は、生きているのだから。姉さまとは違って。

『第二十三回 蓮華魔法技術専門学校入学式』

そう書かれた垂れ幕の下で、頭の頂を寒そうにした年配の男性が演説している。

内容は一応は聞いていたが、同じことの繰り返しが多いような気がした。偉い人というのは、得てしてそういうものであるらしかつた。

蓮華<sup>れんげ</sup> 典久<sup>のりひさ</sup>。ここの学校長であり、そうは見えないが魔法を扱う名門の家の出である。

「諸君らはまだ若い。それと同様に魔法という文化も若いのである。魔法が我々の前に現れたのは、第二次世界大戦が終った後の高度成長期の最中であつた。魔法を扱える人間、扱えない人間。そういう格差が生まれ始めたのもこの頃である。魔法を扱えない人々は科学を追及し、魔法に匹敵する利便性を手にした。だが、我々であるところの魔法人は、その科学も扱えてしまう。格差は自然と生まれてしまうものである。しかし、我々のこの力は自身のために用いるものではなく、日本という国ひいては世界の更なる発展のために用いるべきであり」

「長かつた。ここのくだりを聞いたのも、聞いている限り三回目である。」

周囲を見渡すと、私と同じ服装を着た女子やセーラー服を着た女子、それから、紫紺のブレザーや学ランを着た男子たちが暇そうな顔で学校長の話に耳を傾けていた。厳密には、傾けているふりをしてに過ぎないといったところか。

立ちくらみを起こしそうだった。それこそ、『魔法』を使って、楽になりたかつた。しかし、入学式中は人が一箇所に集中するから

危険であるという理由で書物の類は一時徴収されていた。私たちに  
とって、書籍はただの紙ではない。魔法を具現化するための、一種  
のツールなのである。

先ほどから、学校長は再三繰り返していた。

「時に強すぎる力は誤れば身を滅ぼす。それが自分だけならまだし  
も他者まで巻き込んでしまつてはそれはもう、人災である。現に法  
律でも、業務上過失致死に問われる。故に、我々のような魔法人は  
正しく扱う術を用いなければならぬ」

だからこそ、蓮華魔法技術専門学校を始めとする、多くの魔法技  
術専門学校は街から離れた海上や山奥にひっそりと建てられている。  
これは、未熟な私たちが魔法事故を起こすのを防ぐためである。

「魔法というものはお酒と同じで、自分の限界量を知つて付き合つ  
ていかないといけない。過ぎたるは、身を滅ぼす。学校生活で、諸  
君らは自らの限界をまずは覚えて欲しい。我々も細心の注意を払う  
つもりではある。しかし、時に亡くなった生徒を私は何人も見てき  
た。だが、ちゃんと真面目にしていればそれは大丈夫だろう。であ  
るから、諸君らは真面目に学業に励むように。以上！」

以上、を合図に講堂はざわめき始めた。

以後は、一年間のプログラム内容が発表され、クラス分けが発表  
された。クラスが決まったので、生徒は分散する。講堂の出口で、  
クラスと名前を告げ、本を返してもらつた。医薬品集、とそこには  
書かれていた。私の、大切な一冊だ。

抱きかかえるようにして、講堂を後にする。クラスに馴染めるか  
不安だった。一旦、外に出て屋根つきのテラスを抜け、学舎に向か  
つた。具体的な教室の位置はざっくり地図で確認したが、実は私は  
目の前の女の子の後を追いかけていた。

さつき、私と同じクラスボードを見ていたのをすっかり覚えてい  
る。黒のロングがよく似合う、大人しそうな綺麗な子だった。服装  
はブレザーで、丈はやや他の子よりも長めにはいていた。性格は、



私とよく合うかもしれないな、と少し期待した。

考え事をしながら歩いていると、階段に差し掛かっていた前の子が一段踏み損ねて体勢を崩した。慌てて私は走ったが距離と体力の双方を考慮しても絶対に間に合わない。それでも走った。万が一こそ、私のこの力は役に立つ。

「大丈夫!？」

転んだ女の子に、慌てて駆け寄る。一瞬驚いた表情を見せたが、「大丈夫ですわ」と微笑んでみせた。安堵し、身体を観察する。

「どこ打ったの？」

「お尻、ですわ……。でも、足が……」  
「待ってて」

頭部外傷なし、お尻は大丈夫だろうから、異常は足のみ。骨折の疑いなし。靭帯損傷の可能性なし。捻挫、である。

挫いている様子であった。私は手に持った医薬品集をめくり始める。最も簡単なところ。鎮痛緩和。間違いない。この名称、この詠唱で。でもどれがいいのかわからない。

この子にはこれがいいよ、と声が聞こえた。本に腰掛けるようにして羽の生えた精霊がひとり。白く透き通るような体毛に覆われた、見目麗しい女性の姿をかたどる、私の相方だった。

「力を貸して。メイ」

私が魔法を扱う為に必要な、私と契約を結んだ『守護者』。小さな守り手は、慈愛に満ちた表情を見せ、本に溶け込むように消えていった。そうして、私は唱える。

『フェルナビオン!』

解熱鎮痛。捻挫には最適であると思った。

見る見るうちに緩和されていく患部を見て、黒髪の少女は目を丸くした。誰も他者の魔法の内容なんて知るはずもないのだから。

お互いにしばし、言葉を失う。

先に手の内を見せてしまうのはもしかして良くなかったかも、と

私はちよつと不安になった。

「あ、ありがとうございます。驚いてしまい、御礼が遅れましたわ」  
「驚いた？」

「ええ、医療系魔法の使い手。身近な方に一人いたものですから。貴方でお会いしたのは二人目ですわ」

けれど、彼女は微笑んでくれた。

「申し遅れました。私の名前は、麗奈。神宮寺 麗奈と申します。以後よろしくお見知りおきを」

「あ……わ、私は吉田良恵です。よろしく」

あまりに素敵な名前を聞いて、名乗るのが恥ずかしくなった。今時こんな名前もないだろうに。

「すてきな名前……」

「え」

けれども、彼女は言ってくれた。

「その能力も素敵。だれかを癒すことができるなんて、良恵さんはきっと心優しい人なのでしょう」

そうとも、彼女は言ってくれた。

「あら、もう歩けますわ。またお会いしましょうね」

麗奈は小走りに階段を駆け上っていった。また転ぶよ、と言葉をかけることもできなかつた。

私は何とか笑顔を返すのでいっぱいだった。麗奈に悪気なんて、あるはずもないのだ。それくらい、子供だってわかる。けれども、心がついていかない。胸が張り裂けそうになる。

私の癒しの魔法は、本当に癒したいものを癒せない。本当に癒したい人はもう、この世界には居ないのだから当然だ。

姉さま。貴方はなぜ、死んでしまったのでしょうか。

手にした本に問いかけても答えはなかった。本の中のメデイもそれはわからないと言っていた。

かつて、姉さまが手にした本を持って、姉さまが通っていた学校

までやってきた。そうすれば、また姉に会えるような気がしたから。ちよつとでも、姉さまの気持ちを理解することができる気がしたから。

吉田義美 享年、十八歳。卒業を目前にした、あまりに早すぎる死だった。

\* \* \* \*

一年二組、と書いてあるのを確認して、まだそんなに古くは無い扉を開いた。漫画ならここで扉に挟まれた黒板消しなどが落ちてくるところだろうけれど、悲しいかな。私たちはもう十五なのだ。そんな幼稚な悪戯をして喜んでいられるほど、幸せは間近にはない。大人でもなく、子どもでもない微妙な成長期の少年少女。それが、私たちだった。

しかし、現実には時に予想の斜めをいくのだということ、私はこの瞬間初めて体験した。

頭の上に軽い衝撃が走り、目の前を白塵が舞う。チョークの匂いを認識したところで笑い声に遮られた。

「あはははは、よっしゃ……って、あ、あれ？」

男の子の声だった。

「せ、先生じゃない？」

男の子は私を見て、驚愕の声をあげた。

クラス中が笑い声に包まれる。頬が火照っているのがわかった。悪戯好きな男の子のトラップに引っかかったという、自分の置かれている状況を理解すると悔しいのと惨めなのと双方の気持ちが溢れてきて、気づけば、涙を浮かべていた。

「う、ごうごめん！ 先生にちよつと悪戯しようとして あ！」  
駆け出した私は最後まで聞かなかった。

教室を出たところで大人の男の人とぶつかりそうになり、それを

身をよじってかわす。顔は見なかった。

「きみ！」

背後から声がかかったが、聞いてなんかいらなかった。タイル張りの廊下を走り、足は自然と上の階へ向かっていた。

屋上の扉を開け、青々とした空が視界に飛び込んできて、私は初めて足を止めた。

何で初日からこんな目に合わなければいけないのだろう。魔法を学ぶという崇高な場において、真面目に学ぶ気のない人間が来たことへの仕打ちだろうか。

テレビに出ていた、魔法省の2005年の『M・Japan構想』を思い出す。

平たく言えば、今から三十年以内に魔法のあり方を確立させるという考え。今はまだ魔法を扱える人間は一握りである。優れた魔法人となれば、砂粒ほど。優れた魔法人を多く育成することで、教育できる者を増やし、徐々に使用価値のある魔法を扱える人間を増やしていこうという計画である。今はまだ埋もれていても、潜在的に魔法を扱える人間も多い。そういったものを掘り起こし、全国民が直接的または間接的に魔法のメリットを享受できる社会を実現し、それによって産業分野での国際競争力の強化や経済構造の改革、国民生活の利便化などを成功させることを目的に、国家が中心となって魔法技術の普及に取り組んでいこうとする構想である。

とりわけ、なぜ魔法は日本の文化である。上手く活用することで世界最先端の国家となることを目標としており、そのためには魔法インフラの整備や国家制度の確立などを謳っている。

国は、望んでいるのだ。そして、「魔法を使える人間は、それにより優れたものに昇華させる義務がある」と謳っている。「義務」とは言うものの、努力義務であり個人の裁量に委ねられているのが現実であるが、社会は、大人は、これからどんどん成長する可能性のある子どもたちに魔法の将来を託し、勝手な期待を押し付けてい

るのだ。勝手な、期待を。

「勝手な、期待……」

唇を割って出た言葉は、青空の向こうへ消えていった。

屋上からは、学校の周囲が展望できた。学校の門から大通りが港まで伸びており、それを木の幹のようにして、末端へ道が伸びている。施設はおおむね大通りに面して建てられているようだ。見る限り、カラオケ、ゲームセンターなど娯楽施設も多々ある。屋上から眺めてみると、それはれっきとした一つの街であった。小さな家々も、街のいたるところにあり、場所によっては血縁のものなら入居できる家族寮のようなものもあるらしい。民間の業者もこういった人口島を隙間産業として入り込んでいると聞く。もう、それは街であると思えた。

さすがに、賭博などの違法施設はないと聞くが、これだけの規模なら何があってもおかしくはないような気がした。

「姉さまは、この町ではどこが好きだったのかな」

独り言ではない。けれど、それに気づかなかったのか反応がなかった。私は彼女の名前を呼ぶ。

「ねえ、メデイ」

肩掛けにした鞆から本を取り出し、適当なページを開く。

白い体毛に覆われた小さな妖精が背中の中を羽根を器用に操作しながら、私の肩へ飛び乗った。

【義美は、あのあたりの小さな喫茶店がお気に入りだったわ。近くに本屋があつて、あの子はそこで買った小説を読んでいたの】

メデイが小さくかわいらしい指で示してくれたが、ミニチュアになった街の一面なんてここから判別のしようもなかった。

それでも。姉さまは、あそこにおいて、呼吸をしていた。そう思うと、少し涙がこぼれた。姉さまのことを考えると、あまりに胸が痛む。最初は姉さまと同じ部屋に寮を取ろうとしたけれど、それは止めたほうがいいと思った。きっと、私は平静ではいられないだろうし、メデイにしてもそれはきっと辛いことだろうから。

私は姉さまと三つ離れている。私がいま使っている寮は、姉さまの代が使っていた寮だった。だから、姉さまと同じ部屋を希望することもできた。けれど、それはやめなさい、と心の中の私自身が言った。私と姉さまは、絶対的に違う存在なのだから。

医者である両親は、私たち姉妹にも同じ道を歩むことを強いた。姉さまは賢く、何をやらせても一流だった。私は落ちこぼれで、唯一できることといえば、料理。私は栄養士になりたかった。それでも、両親はそれを許そうとしなかった。

好きでもないことを学ぶ上に、落ちこぼれの私。当然、両親の期待に添えそうもないことはわかっていた。だが、姉さまは違う。生きていれば彼女はきつと医者になれた。そして、たくさんの人たちを救うことができたはずなのに。

それなのに、彼女は自らの命を絶ってしまったのだ。

メイにもわからない、という。両親は魔法を使えない古い人間だったから、メイのことは見えない。両親が直接、この小さな愛すべき隣人を責めることはなかったが、かわりに私が責められた。死ぬのはお前の方がよかった、そこまで言われた。

だけ。。。

「いまはちがう。私は、ここにいます」

両親は受け入れた。姉のいない世界を。

末期がん患者の精神状態と似ているかもしれない。何かの間違いだという「否定」から入り、なぜあの子がという「怒り」へと変わる。そして、死んだのが妹の方だったらと「取引」と呼ばれるステップを経て、何もしたくないという無言の「抑うつ」状態へと変わる。そうして最後に、彼女の死を「受容」し、妹である私にすべてを託した。即ち、魔法の力を借りた医学という新しい分野を期待したのだ。

だけど、私は両親の言うことに従ったふりをして、その実、違うことを考えている。姉さまと同じ学校に行けば、姉さまがどうして死にたいと考えたのかわかると思ったから、ただそれだけの動機で

ここにやって来た。だって。そうしないと、私が先へ進めない気がしたから。私はまだ、がんのステップの「否定」、「怒り」、「抑うつ」、「取引」、「受容」の最後まで辿りつけていないのである。あるいは、やはり私は両親の言いなりなのかもしれない。なんだかんだ言っても、逆らうのが怖くて、いまだ自分の胸のうちを伝えたこともない。結局、私は敷かれたレールの上を走り続けているに過ぎない。

「ねえ、メデイ。姉さまは、あなたとどんな話をしたの？」

メデイは答えなかった。彼女もまた、私と同じ暗い闇の底にいるのかもしれない。

私の気持ちとは反対に、青い空はどこまでも明るく、全てを受け入れるように広がっていた。

「どうしたのかな」

空を見上げていると、背中に声がかかった。渋い、大人の男の人の声。

「まあ、どうしたもこうしたもなく、僕にはすべて事情がわかっているのだけだね。クラスの子に聞いたから」

振り向くと、眼鏡をかけた青年が立っていた。青年である。生徒にしては年が高く、先生にしては若い。浅黒い肌に、彫りの深い顔立ちをしていた。そこに、インテリ眼鏡をかけており、それが一種のアクセントとなっていた。

「君の担任の、大城おおしろ慶太けいただ。一年二組を預かる。おっと、僕の自己紹介よりも今は……ほら」

そう言うと、ひとりの男の子を私の前に立たせた。男の子はばつ悪そうな顔で、唇を尖らせている。

「ほら、謝りたいんだろ。僕がいると謝りにくいなら、ここを離れるから。落ち着いたら、二人とも教室に戻ってくるんだよ」

言い残して、大城先生は階下への扉を開いた。扉の金属音がして、静寂があたりを支配する。聴こえるのは、学校を囲む木々の声だけ

だった。

これは何というか、気まずい。黒板消しのことなんてすっかり忘れていたのだ。私の中ではすでに頭の隅っこに追いやっていた、すでに過去のことである。それを今更こう改まされると、気恥ずかしさの方が勝る。

ずっと立ったままだった、男の子が近づいてくる。一瞬どきつとした。

「うわー、すごい綺麗な景色だなー」

そう思ったのも束の間のこと。男の子は単に、屋上からの景色に感動して、それを眺めに来ただけだった。

「……なんてね。ごめんね。謝るタイミングわからなかったんだ。さっきはあんなこととしてごめんなさい。担任の先生をネタにして、クラスのぎくしゃくした空気を緩和したいな、ってそう思ったんだけど……まさかまだ来ていない子がいたなんて思わなくて。本当にごめんなさい」

男の子は振り返り、頭を垂れた。色素の薄い、少し茶色がかった髪が揺れる。染めているわけではなさそうだ。

印象は、悪くなかった。心の中のもやもやが全て消えていく、そんな感覚さえあった。

「あ、こちらこそ、びっくりして逃げたりしてごめんなさい。私は吉田良恵。あなたは？」

「あ、ごめん。僕は服部 槍真はっとり せんま。三重県から来たよ」

三重県。そして、はっとり。私はそこから、一つの単語を導き出した。

「え、忍者？」

「え、え、ええええええ！？ そ、そそそんなことないよ！？ これっぽっちもないよ！」

槍真は何故か異様に驚いて、ざざざざざざという擬音を出しそうな勢いで私から離れた。

「な、なにその反応？」



「いやいやいや！ なんでもない！ なんでもないでござる！」

そうして、さらに後ずさり、胸ポケットから何かが転げ出た。地面に落ちた円筒状のそれは、ころころと転がり私の足元まで来た。私の足に当たった衝撃で紐が解け中身があらわになる。素材は古く、なにやら読めないくらい達筆の字で何かびっしりと書かれていた。

「これ……」

拾おうとすると、瞬時にして私の手元からそれを引ったくる。

「ならんでござる……」

いつの間にか？

先ほどまで私と数メートルは離れた位置に立っていたはずの彼が、今目前にいる。

「……ご、ごじわる？」

それよりも何よりも語尾が気にかかって仕方がなかった。

「え、いや、あははは。いやだなあ、そんな忍者だなんて、これっぽっちもそんなことないよ。あはははは」

「いや、私もそもそも、そんなことは全く信じていないけど……」  
この二十一世紀のご時世に、忍者だなんて。時代劇しかお目にかかる機会がないのに、信じる方が馬鹿げている。冗談で名乗るにしても、小学生でも恥ずかしがるだろう。何なら、私は「松尾芭蕉は実は忍者だった」という説も信じていない。それに、昔のアニメの「科学忍者隊ガッチャマン」にしてもそうだ。再放送を一度だけ観たことがあるけれど、私はあいつらも忍者だとは信じられない。「科学忍法火の鳥だ！」と言った直後にやったことが単なる体当たりだったのだから、信じようがない。

「そ、そそそうだよ、信じるやつなんていないよね、あは、あはははは！」

しかし、私はその巻物を見てしまった。

巻物から出ている、守護者と思しきそれは、まさしく忍者そのものであった。

目元だけを残し、あとは頭のとっぺんから足の先までを黒い衣装

に身を包んでおり、手には何故かいつでも私に撃てるように手裏剣を構えている。これじゃ疑うことなく、紛れもなく本物の

「……忍者？」

口にすると同時に、槍真が叫んだ。

「ち、違うつて言つてんじやん！ もう、先に教室帰つてるね！

またね！ どんでござる！」

どろんでござる、というよくわからない台詞と共に、白い煙が巻き上がる。それが消えた後に残っていたのは、私だけであった。

その後、教室へ戻り、大城先生に改めてみんなに紹介された。もちろん、服部槍真はすでに席に戻っていた。

「そんなわけで、吉田良恵ちゃんだ。どこぞの馬鹿のお陰で、辛い思いをしたみたいだから、みんな励ましてやってくれよ！」

大城先生の冗談で皆が笑い、口々に槍真を罵った。

「女の子にあんなことするなんて、最低！、信じられない！」

「ほんとほんと！」

みんな、机の上に本を置いていた。人それぞれ、色んなものを持ってきている。

しかし、槍真だけはそれを大事そうに懐に忍ばせ、誰にも見せないようにしているらしかった。とはいえ、巻物は結構大きいので丸見えに近い形であるので、それが一層、槍真の馬鹿っぽさに拍車をかけていた。

「ていうか、名前が服部つて、お前は忍者かよって感じね」

その言葉に槍真が身を振るわせ、脂汗のようなものが頬を伝い落ちていくのがわかった。きつと、彼には彼なりの事情があるというものだろう。いよいよ可愛そうだと感じた私は、見かねてフオローをしようとしたが、大城先生の言葉の方が効果的だった。

「さて。みんなは今日からこの島で生活することになる。寮は大きなものがあり、あとは団地やアパートなど、みんな色々なところに住んでいると思うが、ここにはこのルールがあるんだ。それを

まずは説明させてもらいたい」

男子も女子も口々に、ルールがあることについて文句を言っていたが、大城先生の「これが終わったら今日は解散だ」という言葉を聞いて、騒然とした空気は一瞬にして静まった。

「まず、ここは東京の都心から遙か離れた小笠原諸島に位置していることは皆も知るとおりだけど、この距離というのは問題でね。いざという緊急事態には本土からの救援も時間がかかる。なので、緊急時のマニュアルは部屋に帰ってからでいい。熟読しておくように特に、大規模火災があったときなど、避難場所に注意しないと、下手したら死ぬからね。一応は港だが、無理な場合は校庭でもいいので、避難すること」

そう言つて、大城先生は早口で緊急時の対応マニュアルを述べたが、頭がついていかなかったので、後でいただいた冊子に目を通そうと思った。

「あと、必ず知っておかないといけないことは、医療について。ここは離島だけど、魔法技術専門学校があるということで、学校前に病院がある。病床も一応ある、れっきとした病院なんだ。しかし、みんなも知っているように近年は医師不足もあり、こんな辺鄙なところに来ようという医師は少なく、また専門の科もない。重病のときは本土へ戻って入院、という形になる。その場合、緊急性によっては、ドクターヘリが学校内の校庭へ下りる。そのときはサイレンで呼びかけるので、必ず校庭を空けるように」

そのあと、皆は口々に「すごい、コードブルーじゃん」と、知ったドラマの名前を挙げていた。

「魔法に付随する症例は、僕たち教師は心得ているつもりだ。学内にも医務室はある。なので、まあそこまで不安がって日々を送ることはないね。そして、最後に！」

一々やかましく騒ぐ生徒に、めりはりをつけるように大城先生は声を大きくした。

「胸元につけている校章、それは絶対に無くさずささないこと。」

私服のときはまあ、義務付けないけれど学校で魔法の訓練をするときは必須だ」

そうして、大城先生は説明し始めたら長くなるものを、なるべく簡素化して述べてくれた。

校章のシステム。これは単なるバッジではない。

「この校章は、つけている人が魔法を一定以上使用すると警告音を鳴らしてくれる。生徒のバイオリズムを読み取って、身体に一定以上の疲労が見受けられると反応する機能だよ。警告音が鳴ったら先生らが駆け付けられるようになってるから気をつけてね」

自宅ではつけなくていい、というのは、お風呂のときなどもあるからだろうし、魔法を日常では使いすぎることもないからかもしれない。

私たちは何だかんだ、本土でも魔法と隣り合わせで生きてきた。日常生活での線引き程度はできるといふもので、そのあたりは先生たちも信頼はしてくれているらしい。

「一応は以上で、何か質問ある？ どうせ、ないよね。百聞は一見にしかず、見たほうが早いしね。あ、薬とか日用品とか、要り用のものはたいてい、商店街で手に入るので心配ないと思う。一応、今わたした冊子に主要施設は書いてあるので、これも読んでみてね。今日、早く終わるのは、一日で島のことを知ってもらいたいというのが学校側の思いだ。離島というのは、みんなが今まで生活してきたものとはだいぶ違う。少しずつ慣れていってほしい」

まあ慣れる頃にみんなは卒業していくのだけだね、と先生は少し哀しそうに微笑んだ。

そうして、その日のホームルームはお開きとなった。

大城先生が出て行って、冊子と睨めっこしていると、槍真がやって来た。

「良恵ちゃん。今からひとりで周るの？」

「え、うん。まあ……」

「どこから行くの？」

「えっと、ドラッグストアかな？」

「そっかー、確かにクスリは大事だもんなー」

まず、ドラッグストアは行っておきたい。化粧品や医薬品、それらを見ておきたい。私は何でもかんでも魔法で治せる、というわけではない。とりわけ、自分への魔法はかけられるものと、かけられないものがある。そのあたりの区切りは、まだ私もしっかり全てを理解しているわけではない。いざというときのために、医薬品の品揃えは見て、家にも置いておきたかった。

それから何より、

「あと、女の子は生理用品か」

かっ顔が赤くなるのがわかった。どこまでデリカシーがない男なのだろう。この服部槍真という男は。

憤りのあまり口を開こうとしたら、それを遮るようにひとりの女性が現れた。

「いくらなんでも、女性に対する口の聞き方が成ってないんじゃないんですか？ 服部槍真君」

神宮寺麗奈。あの、足を挫いた子だ。

「あ、そうか！ そうだった、かたじけないでござる！」

槍真はそう言つと、両手を合わせた。それを見た麗奈は「ござるって……」とちょっと引き気味の様子だった。

「え、いや、これはその……ござるとか、僕、忍者だなんてこと、ぜんぜんないから、これっぽっちもないから！ほんと、そんなじゃないしー！」

「な、何です？ その焦った様子は……逆に怪しいですよ」

「いやいや、ほんと！ 怪しくない、怪しくないから！ おっと、日々の自己鍛錬の時間でござった！ 拙者これにて、失敬！」

言うや否や、槍真は「シユタタタ！」などと言いながら、奇妙な横走りをして去っていった。それも、異様なくらいの速さで。

「なん……だったのかしら」

「なんなんだろうね」

呆氣にとられる麗奈に私は合わせておいた。人が秘密にしようとしていることを、わざわざ明かすこともない。

「まあ、それより改めて。神宮寺麗奈です。麗奈と呼んでくださいまし。まさか、同じクラスだとはね、良恵さん。仲良くしてくださいね」

「こちらこそ、よろしくね。タメで話してくれていいよ」

言つと、麗奈は神妙な顔つきをして、悩みこんだ。

「ですが……癖みたいなもの、ですの」

「あ、そうなんだ？ じゃあ、そのまま」

「ありがとうございます。助かりますわ」

麗奈は嬉しそうに微笑んだ。

「良恵さん。これからお友達として仲良くしてくださいまし。今日一緒に、町を回リませんか？ 私、実はこの島の出身ですの」  
私は二つ返事で頷いた。地元の子もいるとは思っていたが、人口数から考えて確率的にはかなり低いはず。私はそんな奇跡に喜んだ。何より、島に来て初めての友だちができたことが嬉しかった。

\* \* \* \*

学校の門を潜り、学外に出ると、大通りがずっと目に見えなくなるまで伸びていた。

私たちはまず、大城先生に言われた病院を見に行ってみた。「蓮華病院」と書かれている。法人名は書かれてはいないが、おそらくは学校と経営者は一緒だろう。受付もちらっと見た。患者数は離島のため、あまり居ないようだがらんとしていた。でも、それがいいのだ。病院に来る人でいっぱいになるような世の中じゃ、困る。みんな、健康の方がいいに決まっている。

「この病院は院長先生がびっくりするような人なのよ」

と、麗奈は笑っていた。詳しくは聞けないまま、麗奈は次々と案

内してくれる。

ちよつと引き返して、総合ショッピング施設、そしてドラッグストアを見た。ドラッグストアではコスメ関連も充実していたが、学校は化粧していくと怒られるだろうから、休日用だなと思った。私は化粧はしないのだけど、噂によると、この年でももう皆すぐくメイクが上手であるようだった。私も休みの日くらいはやってみたいと、皆から置いていかれるかもという不安があったが、麗奈がそれを見て眉をひそめていた。

「私たちくらいの年の子は、ナチュラルが一番なのよ。こういう、流行に左右されるような一部の安っぽい人間にはなりたくないわ」それを聞いて安心した。やっぱり、そういう子が大半なんだな、と自分の無知を恥じた。

ドラッグストアを出て、大通りを歩く。小さな店が色々あった。文房具、定食屋などは昔からあるような、親しみやすい雰囲気をもし出していた。図書館。カラオケにゲームセンター。色々ある。さすがに、未成年が主流のため、飲み屋やバーみたいなものは表立ってはないが、島には大人も存在する。もともと、この島は小さな漁村だったのだ。海の男と酒は隣り合わせと聞くと、そういった界限も島には存在するらしかった。

「おしゃれな喫茶店があるのよ。良恵さん。ちよつと寄っていいかない？」

商店街から一本それた筋に、そのアンティークな基調の喫茶店があった。

店の名前は『night a star』と書かれていた。直訳すると「夜空の星」か、喫茶店なのに面白い名前だなと思った。

扉を開けると、カラncaranという心地よい音が響く。店内は少し薄暗いが、店の外観と同様に、落ち着いた良い感じを醸し出していた。

「いらつしゃいませ。あいている席にどうぞ」

顔も上げずにカップを磨いている。寡黙そうなマスターだった。

二十代後半か三十代前半の、大人の男性。細身で、タキシードを着込んでおり、整えられた髪がより一層、大人の渋さを醸し出していた。一言で表すと、かっこいい。槍真とはまったく違うタイプだった。

「良恵さん。コーヒーは大丈夫？」

「え、あ、はい」

マスターに少し見とれており、麗奈さんに思わず敬語で返してしまふ。

「この店の一番のおすすめをふたつくださいな」

麗奈はそんな頼み方をした。

承知しました、とマスターは顔を上げ、そして、私の顔を見て動きを止めた。

「義美、ちゃん……？」

姉を知る最初の人だった。屋上からメイドが教えてくれた喫茶店と、ここが結びつく。そうか、あれはここだったんだ。

「姉さまを知ってるんですか？」

男はさつと顔を背けてしまい、そのままただコーヒーを準備する音だけが店内に響いていた。麗奈は何やら察したらしく、黙っている。食器がカチャカチャと音を立てる。湯気がのぼり、香ばしい匂いがした。

「どうぞ」

男がカウンタに差し出したのは、けれども、カフェオレだった。

「……あれ、ここは、そういうお店でしたか？」

言いたいことはよくわかる。きっと、麗奈も本格コーヒーを期待していたのだろう。

麗奈は眉をひそめていたが、私は、待つて、と制した。

「……姉さまはコーヒーが飲めなくて、でもカフェオレが好きで好きで。よく、ミズドでも飲んでいました。これは、姉さまにとっての“一番”でした」

カフェオレを一口いただく。麗奈も黙ってそれに倣ってくれた。



もちろん、ミスドなんかのそれとは違って、格段に良いものだった。けど私には、小さな頃に姉さまと一緒に飲んだミスドのカフェオレと重なって、涙が止まらなくなっただけ。

カフェオレをソーサーに置いて、手で目を覆う。そうしないと、どこまでも零れ続けそうだった。涙を流し続けて死ぬ人間なんて居ないけれど、今の私だと死んでしまいかもしれない。

「姉さま……」

呟く。

私の鞆の隙間から、メデイが飛び出す。そうして、店内を飛び回り、最後に私の肩にそっと乗った。私はその温もりに触れ、少し落ち着きを取り戻したことを自覚したけれど、それでもまだ足りない。姉さまを思い出すと、世界が悲しみしかないような、そんな絶望にさえ囚われる。

私はしばしすすり泣いた。麗奈が無言でそっと抱きしめてくれる。「悲しいときは、泣いていいのです」

事情も深く飲み込めていないだろうに、きっと会って初日で迷惑だろうに、それでも彼女は優しく私を抱きしめた。

そのぬくもりが、ひどくあたたかい。私は麗奈に抱きつき、いよいよもって大泣きした。東京では、長野では、両親の前では見せられなかった、涙だった。

幾分か経ち、落ち着いた頃にはカフェオレは冷めてしまっていた。

「すみませんでした……」

私は麗奈と、そしてマスターに謝る。

「いや、いいんだ。そうか、妹さんか……よく、似ている」

マスターは目を細める。目尻や鼻筋の整った、綺麗な顔立ちの男性だった。

「はい、吉田良恵といます」

「私は神宮寺麗奈と申します。何度かここに来たことがありますわ。良恵さんのお友達です」

「神宮寺さんは知っているよ。鳥じゃ名家で有名だからな。けど、ちゃんと話したことはなかったな。俺は、内藤義康。見てのとおり、喫茶店のマスターをしている。義美ちゃんは……その、ここの常連だったんだ」

内藤さんは言葉を詰まらせてそう言くと、少し遠くを見つめるような目をした。その目に、寂しげな感情が浮かんでいる。姉さまのこと、想ってくれているんだ。

「……まあ、今日のところはあまり話さないほうがいい。メデイも、ほら。辛そうだ」

メデイ、と内藤さんは私の守護者のことを知っていた。いや、内藤さんが知っているのは、姉さまの守護者としてのメデイということになる。

「落ち着いたらまた来るといい。また、あたたかい飲みものでも出すよ」

このままだと、メデイが消えてしまいそうなくらい苦しそうだったので、私は席を立った。麗奈も一緒に立ち上がる。

「あ、麗奈……ごめん」

いいのよ、と彼女は微笑んだ。

私たち二人は内藤さんにお礼を言って、店を後にした。扉が閉まる瞬間、コーヒーの豆の匂いが、ふわっと香った。

\* \* \* \* \*

その後、商店街を色々と歩いて回った。麗奈は、あえて私の姉さまの件には触れなかった。

「主要施設は確認できましたわね。あとは、アミューズメント施設でも見ていきましょうか」

聞かない、優しさ。触れない、優しさ。それが、思いやりなのだと思う。

「ゲームセンター、があるんですよ。私たちが小さかった頃にはも

うちよつと規模は小さかったのですけどね。本当にこの島は少年少女に飽きがこないよう考えられて、めまぐるしくその姿を変えていきますわ」

お嬢様然としている麗奈であるが、今日一日いっしょに周っている時に聞いた限りでは、やはりお嬢様だった。

この島の旧家の跡取りであり、一人娘であるとか。詳しくは突っ込んで聞けなかった。私は自分のこともそんなに話せていないのだから、こちらから根掘り葉掘り質問するのもフェアではないだろう。

「良いことを思いつきましたわ。プリクラでも撮りませんか？」  
思い切ったように、麗奈は意気込む。

彼女はお嬢様らしいと思いきや、妙に世間慣れしている様子もあり、親からあまり自由を許されなかった私の方がよほど世間に疎かった。

「良恵さんとの、出会いの記念に。いいでしょう？」  
微笑む麗奈を見て、私も笑顔で頷いた。

私たちは仲良く通りを歩いた。揃いの制服が、なんだか嬉しかった。

ゲームセンターは大通りに面していて、遠くからでもその外観からすぐわかった。中に入ると、ゲームセンターというレベルのものではなく、ボウリングや卓球、カラオケといった、様々なアミューズメントの複合施設であるようだった。店内は相当広く、また遊び場も少ないせいか、学生で溢れかえっていた。

その中をすいすいと人混みを縫うように歩いていく、麗奈。私はいつしか彼女に遅れを取り始め、やがて完全に見失ってしまった。慌てて、彼女が消えていった先を指さそうとして、男とぶつかった。

「っっ痛えな……」

目つきの悪い、髪を金髪に染めた男だった。かなり、強面である。

「す、すみません！ 急いでいたもので……」

私は慌てて謝るが、男は私の手首を掴む。

「お、見ない顔じゃん。新入生？ 俺らが町の中、案内してやるよ」  
金髪はリーダー格だったらしく、テレビゲーム機のような箱型の機械のコーナーからぞろぞろと三人、別の男が出て来た。

「お、なかなかイケてるじゃん。どっから来たの？」

「肌白いねえー」

三人が何人とも、「不良」というレッテルを自ら好んで貼り付けているような外見をしていた。

確かに、蓮魔（蓮華魔法技術専門学校の略称）では、外見に関する身だしなみの規制はない。制服さえ着ていけば、個人の裁量に任されている現状である。しかし、男達は制服を着ていなかった。

つまり、今日は入学式なので、それに参加しない学生。二年か三年かはわからないが、上級生であるらしかった。

「とりあえず、まあここじゃ何だから来いよ。へっへっへ」

男はそう言うと、強引に私の手を引っ張り、裏口から外へと向かう。

助けを求めようと店内を見るが、誰も目を合わせようとしてくれない。ゲームの電子音や大きな音で流れるビージーエムのせいで誰も気づいてくれないのかもしれないのかもしれない。

「は、離してください！」

裏口から裏通りへ連れて行かれ、私はようやく掴んでいた手を振り解くことに成功した。単に逃げ場が無い袋小路だから手を外してくれた、というだけの話かもしれない。

男達は無言でにやにやと卑た笑みを浮かべている。不気味だった。怖い、と心から思った。

私は本をすぐ取り出せるように構えてはいるが、今のところ、私とメイには戦う術が無い。対する男達は、手に一応、何らかの本を持っている。四対一。どう足掻いても、叶うはずがないと知り、絶望にかられる。

「さあて。新入生ちゃんには、いろいろと教えてやんなきゃなあ？  
へへへ」

鼻ピアスにニット帽の男が、手を伸ばしてくる。

やめて、と叫びたいのに、恐怖で声が出ない。そんな私を見て、  
男達はまたゲラゲラ嘲笑う。

誰か通りかかって欲しい。けれども、こんな裏路地に誰かが現れるはずも無い。そう考えた瞬間だった。

「おいオイ、お前ら。オレを差し置いて何楽しんでんだよ、あん？」  
男達はその声を聞いて、動きを一斉に止めた。その表情には驚きと恐怖が入り混じっていた。

「大体、オレのシマで何勝手なことやってんの？ お前らシタツパが無許可で勝手こいてんじゃねえぞオイコラ」

私は声の主を仰ぎ見た。

黒いスーツのような服を着崩した、一見ホスト崩れのようなファッションに身を固めた、長身の男。髪は手入れしているわけではなく、無造作に放置しているようで、しきりに手で掻き毟っていた。

「さ、里見さん……自分ら、勝手なマネして、その、あの……」

「そのあのじゃあ、わかんねエんだよ。何が言いたいのかはつきりしろボケ」

里見と呼ばれた男はそう言うつと、背中から何かを一閃した。木刀だった。

ピアス男は顔面を殴打され、派手に吹き飛んだ。その一撃だけでそれは、魔法の力ではないようだった。男は本を手に持つてはいなかった。ただ、木刀だけを振るった。

「あとそれからお前。初日で絡まれんなよ、ややこしい」  
木刀の先を私に突きつけて、静かに言う。

「あ、え、その……」

「え、その、じゃあ、わかんねエんだよボケ。フン……まあ、吉田だから仕方ねエな、吉田じゃな」

里見はそう言うつと、肩を震わせ笑った。

「おう、雑魚ども。忠告しとつけど、このシマでやっていいこととダメなことがある。まず、この里見様に楯突くことは許さねエ。それから、里見様の知らないところで何かやられんのも許さねエ。理由は面白くないからだ。わかったかボケ」

私を囲むチンピラどもに、鋭い眼光を叩きつける。

チンピラは必死に顎をかくかくと縦に振り、全速力でその場を逃げ去った。

あとに残ったのは、私と里見。

「おう吉田。お前もとつと消えな」

里見はなぜか、私の名前を知っている。疑問に感じた私が、それを聞こうとすると

「キエエー!!」

奇声とともに、空から誰かが降ってきた。

「忍法・着地の術!」

叫び、着地したのは、服部槍真。

「あ? 何が忍法だアホ。単に飛び降りてきただけだろ」

里見が見下したように槍真を見下ろす。槍真は、着地の衝撃で足が少し痺れているらしく、無言で何か痛みを堪えている。里見の言うように、アホだった。

「うるさいうるさいうるさい!!」

槍真が叫び、懐からなにやら取り出す。手裏剣だった。

それを目にも留まらない速さで投げたのだろ。里見が木刀ですべて、はじき落す。一連の動きが、私にはまったく見えなかった。

結果として認識できたのは、地面に落ちた手裏剣の存在のみである。

「なかなか、やるな。この不良め……」

槍真は言つと、地面を蹴る。

一瞬で間合いを詰め、腰から小刀のようなものを取り出し、里見に切りつける。同時に、その左手が巻物を掴んでいることに私は気づいた。

『火遁の術』

火柱が槍真の左手から上がり、それが里見を襲う。が、里見はこれも木刀を振るうだけで消してみせた。風圧だけで、である。

「へえー、なかなか面白いじゃん、お前」

里見が目尻を下げ、しかし冷たく言い放つ。

「だが生意気だ。オレに楯突くやつは面白くねエ」

槍真が次の術を編もうとしているうちに、里見は槍真の腹部に蹴りを入れ、お腹を抱えてうずくまった背中に木刀を叩き込んだ。

そして、更に蹴りを一発。地面に転がる槍真から巻物を奪い取り、遠くに放り投げる。そして、蹴りを繰り返す。あまりに一方的に、過ぎた。

「やめて！」

「あ？ やめねえよ。こいつから仕掛けてきたんだろが」

「だって、あなたは私を助けてくれたでしょ？ 槍真は友達なの、だからお願い」

里見は一瞬、私の顔を見て思索し、ばつの悪そうな顔をした。気まずさをかき消そうとしたのか、「やつぱやめねエ」と今度は木刀を槍真の頭部に目掛けて叩き込もうとするそぶりを見せた。

木刀が槍真の頭部に向かっていくのが、いやにゆっくりに感じる。こんな風にスローモーションで流れるのはドラマかアニメの中だけだと思っていた。

槍真も先ほどのダメージが大きいのだろう、身動きが取れないまま、木刀の軌跡をただ見つめていた。

その時だった。

『 “あなたがたがさばくそのさばきで、自分もさばかれ、あなたがたの量るそのはかりで、自分にも量り与えられるであろう”』  
早口の詠唱が聴こえた。今日一日で聞き慣れた、新しき友の声。

路地裏に姿を現した声の主は、見間違うこと無い、神宮寺麗奈であった。手には古びた革製の書物を持っている。それが、彼女の“本”なのだろう。

『 “マタイによる福音書、第七章二節”』

言い終わると同時に、彼女の本から眩いばかりの光と、天使が飛び出した。

光は、雷だった。

「なるほどねエ」

里見は一瞥して鼻を鳴らした。余裕である。しかし、足元の怪我をしている者にはそれを回避することは難しいかもしれない。槍真にも当たってしまう、と不安を感じ目をやると、槍真はすでにそこには居なかった。里見の足元に転がっているのは、なぜか丸太である。変わり身の術、というやつかもしれない。槍真はいつの間にか、距離を置いたところで巻物を手にしていた。

そして、裁きの雷が落ちた　　里見の数メートルの先に。

「今のはわざと外したのです。次はありませんよ」

麗奈は鋭く里見を睨みつける。

「おそらくこれは不幸な誤解でしょう。良恵さんは、あなたを悪く思っているような感じは無いのですから。ここはお互いが水に流し、引く……それではいけませんか？　ねえ、里見さん」

どういう経緯か、麗奈は里見を知っているらしかった。

槍真はその目にまだ闘争心を燃やしていたが、今の言葉を聞いて、「え？　そうなの？」と呆気にとられていた。里見の方は、面白く無さそうな顔をしていたが、渋々と木刀を背中の中鞘に戻した。木刀に鞘、と疑問に思ったが、どうやらあまり観察していなかったのは私の方であるらしく、それは竹光のようなものであるらしかった。

「チツ、拍子抜けした。女相手にゃ本気は出せねエしな。お前ら、すぐ泣くしよ」

言いながら、槍真を睨みつける。

「命拾いしたな、ガキ。あとそれから、神宮寺だっけ？　あんま覚えてねエけどよ。お前の魔法は噂に聞くぜエ、めちやくちや威力でかすぎるっつーじゃん。やっぱ神のご加護ってやつ？　ヒヤハハ、



まじパねエ、ひやははは！」

ひとしきり笑った後、私の顔に視線を移した。そうして、近づいてくる。凶悪そうな顔が目前に迫り、私はぎゅっと目を閉じた。

「オレの名は里見守さとみまもる。このへんで下手な騒動起こすと、今度こそ殺すからな。覚えとけボケ」

言い残して去っていった。

結局、どういう男なのか、姉さまを知っているのか、聞けず終いだった。ただ、見た目どおりの悪い人では無さそうな、そういう雰囲気があった。

「ほんと、粗暴な殿方……」

麗奈はその行方をずっと睨みつけていた。

騒動の元が去って、「ふう、疲れたあ」と槍真が地面に座り込む。路地裏の地面は煙草や痰など、汚らしいものであったがそんなことを気にする余裕もないくらい、槍真の傷は酷かった。

「傷……」

私が駆け寄ろうとすると、メデイが本から飛び出て、槍真の周囲を飛び回る。

「この子は……？」

「メデイ。私の守護者なの」

メデイは一通りバイタルチェックすると、私の元へ戻ってきて報告してくれた。

骨折が認められるので、私の魔法では治癒できない範囲だと。悲しいけれど、そうなってしまつと医者の出番である。現状、ここから学校前の病院まで移動してもたかだか知れている。下手に私が介入するよりも、医療のプロに全て診せた方が良く、そう判断する。

「病院に行きましょう」

私と麗奈は、槍真に肩を貸す。

「男なのにかっこわるいなあ、あははは」

もともと、誤解からこうなったこと自体そもそも間抜けではあるが、助けてくれようとした好意が嬉しかった。私はあえて何も突っ

込まず、ありがとう、とだけ伝えた。

槍真は頬を火照らせ、少し複雑そうな表情を見せ、すぐに痛みを顔をしかめた。

「いたたた」

立ち上がった拍子に患部に衝撃が走ったのだらう。

気遣おうとする私よりも早く、麗奈が叱咤した。

「男の子が何ですか。情けない。恥を知ることですよ」

「は、はい……すみません」

なぜか敬語で謝る槍真を無理矢理に歩かせ、病院へと足を進める。しかし、と思いつ返す。麗奈の「聖書」を利用した魔法は確かに強力だと思ふ。なのに、あの里見という男は全く驚いた様子もなく、かなり、戦い慣れている印象があった。何より、あの場において、槍真と麗奈を相手に、里見は一度も魔法を使おうとしなかった。本すら見せていない。もしかしたら、継承者かもしれない。

何よりも、私の顔を見たときに目の奥に過ぎた感情。あれは、“知っている”目だった。きっと、彼もまた、姉を知る人間に違いないけれど、少なくとも、あまり関わり合いにはなりたくない人種であった。

考え始めればきりがないけれど、今はひとまず槍真を安静な場所へ運んであげよう。

思考を完結させ、私たちは病院へと向かった。蓮華病院へと。

\* \* \* \*

院内は、薄緑を基調とした色で揃えられていた。

壁紙は、白を下地に新緑を思わせる緑のストライプが入っており、床は春の蓬を彷彿させる優しい色をしている。すべて、院長の拘りである、と受付の事務員の女性は笑った。人好きのする、いい笑顔だった。

私と麗奈は、待合室で、檜真の処置が終わるのを待っていた。この病院は、二人の常勤医師で回っているとのこと、現在処置に当たっているのが今日が当番日だという院長である。どんな人なのか、顔はまだ見ていないのでわからないけれども、離島の医師を好んで引き受けるような人だから腕は確かであるらしい。

もともと、この蓮華島には病院はなかった。

小さな、ご高齢のおじいちゃん先生がひとりで行っている診療所があるだけだったと麗奈は言っていた。その方は今はお亡くなりになられたが、この病院の初代院長として奮闘なさったことだろう。

蓮華魔法技術専門学校の設立がなされたのが一九八一年。学校の設置と同時に島の住人が真先に求めたのが、「医療の確保」。今まで小さかった診療所の規模を拡大すべく、病床を備えた病院の設立を求めたのである。様々な思惑と、時代の流れの狭間で、何とかそれでも、蓮華島は病院を得た。それは、蓮華島だけではなく、近隣の島々すべての患者を一挙を担う受け皿として、何よりも求められていたものだった。

「二人、しかないのね……」

「何がですか？」

思わず呟いた言葉を、麗奈は聞き逃さず、質問してくる。

「え、いや、お医者さん。このへんの島すべての患者さんを受け入れてるのに、常勤が二人しかないんだって」

私の視線の先に気づいた麗奈は、壁にかかった、病院の沿革に視線を送った。

「優秀なですよ。とりわけアメリカからやってこられた、院長先生がね」

麗奈は院長先生、と強調した。それほどまでに優秀な人なのだろう。

「あと、そこに携わるほかの医療従事者もですわ。だからやっているのですわ。この病院は、島みんなの希望ですわ」

そう言って微笑む。麗奈がああ言うのだから、腕は間違いないだろう。地元の人に愛される人ほど、確かなものはいない。きつと、院長先生は、素敵なお方だろうと思った。

さつき、麗奈はアメリカと口にした。欧米などで最先端の医療を学んできたのかもしれない。ふと、私は、病院沿革の隣に、病院概要の掲示物もあるのに気づいた。そこには、病床数などの病院の基本データが書かれていて、管理者の欄に院長の名もあった。そこだけは自筆なのか、手書きでサインがなされている。達筆な、英字で「サラ、ヤマモト……？」

それは、女性の名前だった。

「ええ、女医さんですの。私たちが診てもらうときに気兼ねせずに済みますわ」

麗奈はそう言って微笑む。そのとき、扉の開く音が聴こえた。槍真の処置が終わったのだろう。

私はそちらに視線を向け、揃って固まった。麗奈は笑顔のままである。麗奈は私の反応を楽しんでいる様子でもある。しかし、私が驚いたところで、誰もそれを責められないだろう。

「まあ、大事をとって入院ですね。お若いですからすぐ治るでしょう。しかし、この島に来てから色々経験してきましたけども、入学初日で入院した子は初めてですよ」

その人は、槍真を諭すように言う。

「子、って……」

思わず、言ってしまう。たぶん、この世界の誰もがそれは感じることだろう。

「サラ・ヤマモト。蓮華病院の院長です。よろしくお願いします」  
頭を下げた金髪の女性は、むしろ、少女と言うべきかもしれないかった。

「あ、言いたいことはわかりますけど、一応、成年ですよ。医師法第二章第三条に、未成年者、成年被後見人又は被保佐人には、免許を与えない、とあります。サラはちゃんといちと医師免許も持ってい

ますから」

そう言って、「年齢は秘密です」と微笑む。そのあどけない笑顔はどう見ても、私たちと同年代のそれだった。名前からしてハーフだろうから、海外の医学部に居たのか。けれども、海外の医学部は通常の大学を出た後にしか入れないというシステムになっている。加えて、日本に来た際に予備試験を受け、研修を経なければ医者にはなれない。通常の経路でいくと、どう考えても日本で医師免許を取るよりも時間がかかってしまう。

ましてや、槍真の症例を診れたことから、彼女は単なる新卒の医師ではない。外科系の知識を有する、専門医だ。専門医になるには更に年がかさむ。

「サラは、飛び級ですから」

あっけらかんと返すが、外見は十八歳程度である。人種の差なども考慮しても、二十代前半というのが妥当なところだと思う。

「いくつなのかは私にもわかりませんわ」

こういった年齢の推測のしようがない麗奈には私以上に想像もつかないだろう。

医学部を進路に見据えている いや、させられている私でも、ちよつと俄かに信じ難い快拳を、目の前の先生は幾つも成し遂げてきたことになる。先生と呼ぶには、あまりに若すぎる気はしたが、それでも立派な医師なのだ。

「ふふふ。よく若く見られるんですよ。サラの自慢です」

「そ、それはそれは……や、ヤマモト先生は日本語がお上手で……」  
もはや、私は自分が何を言っているのか理解できていなかった。

前後の流れがめちゃくちゃだ。

「サラのことは、サラって呼んでください。ファーストネームの方がしっくりきますので」

そう言って、につこりと眩しい笑顔を見せた。かわいらしい、お人形のような笑顔だった。

一人称が自分自身のサラなのも幼さに拍車をかけているのだろう。

「そんなわけで、僕、入院しますんでよろしく！」

処置室の中から声が聞こえたので室内を覗いてみると、足をギブスで固定された槍真が鼻息を露に親指を立てている。

「いやあ、入学早々残念だなっ。サラ先生にもご迷惑おかけしちゃうなっ。いやいや、まいったなこりゃっ。あっはっはっは！」

なぜか異様に嬉しそうだった。

「まあ、主治医は私じゃないですけどね」

「え、それって男？」

「はい。腕は確かな頼れるドクターですから、安心して下さいね」  
「え……」

「ちよつと、厳しくて怖い人ですけど、患者様のことを思えばこそですから」

「え、ええ……」

槍真は頂垂れ、わかりやすいほど落ち込んでいた。

「さて、じゃあ、連絡先ですが、保護者様は？」

「えつと、父子家庭です」

「お父様は今どちらに？」

「刑務所です」

その場の雰囲気凍りつかせるのには十分なほど、いきなりへびな発言だった。サラ先生も聞いてはいけないことを聞いてしまった、と思っただのだろう。その人形のように整った口をぽかんと開けたまま、啞然としていた。

「えつと、親戚の方なんかは……」

なんとか、調子を取り戻したサラ先生が尋ねる。

「みんな同じ職場なのですが、日本各地に飛んでいるのでなかなか連絡が取れなくて」

「ご多忙な方々なんですネ」

「いや、最近は仕事がなくなってきたんですよー。戦国時代から江戸時代にかけてなんかはね、たくさんあったみたいなんですけどねー。忍者なんて言っても、今は観光で出し物して食べていくくらい

しか……あ！」

しまった、みたいな顔で槍真は両手で口を押さえ、左右に大きく首を振った。

「あ、えっと、親戚はあれです。えっと、何だろ、えーと、ちよつと陰気なフリーター？　みたいな、そういう感じの人たちです」

サラ先生は怪訝な顔をする。

「でもさつき、忍者とか言って……」

「わー、わー！」

「ちよつと、服部君？　……あら？　呼んでみて気づいたけど、あはは。そんなタイトルの日本の漫画がありましたよね。えっと、忍者はつと……」

「あー、あー！」

ばたばた暴れる槍真を見て、ひとまず元気そうだと判断した私と麗奈は、大城先生に報告しに学校に戻ることにした。詳しくはまた後日にでも経過を聞くことにしよう。

\* \* \*

学校に戻って、経過を報告していたら、すっかり夜遅くになってしまった。

麗奈は実家が街外れにあるため、学校で分かれた。

「女子寮だと規則もうるさいから、これを持っていくといいよ」

帰り際に大城先生がくれたのは、学校に夜間まで用事があつて居残りをしていたことの証明書だった。魔法が日常の学校なので、訓練の時に破けたりしないように少し厚く作られている。これが免罪符となり、女子寮に帰ったときに寮母さんに怒られないで済むとのことだった。

女子寮は学校の敷地内でも一番奥の安全区域にある。さほど危険はないが、麗奈に関しては、今日のこともあったので、大城先生が自宅まで送り届けることになった。初日から災難に巻き込んでしま

って、非常に申し訳なく思う。明日また謝らないといけないな、と思う。

学舎から女子寮までは近い。あつという間に到着し、当然のごとく扉も施錠されていたので呼び鈴を鳴らすと寮母さんが出て来た。

少しふくよか体系から温厚そうな雰囲気だったが、黒縁の老眼鏡に少しきつい印象を受けた。大城先生の心配そうな顔とあわさって、思わず身構えた。

「ああ、吉田さんですね。私は寮監をやっている佐中です。大城先生から連絡を受けています」

連絡までしてくれていたらしい。結局、居残り証明書は使わずに済んでしまったので、ポケットの奥に突っ込んでおいた。

二階へあがり、自分の部屋へと向かい、部屋のカギを開ける。その音で気づいた隣の部屋の住人が顔を出した。中井仁美である。

「あ、やつほー。遅くまでお疲れさん、どないしたん？」

底抜けに明るいその声を聞いて、私は今日一日で張り詰めていた気持ちが一気に緩み、なぜか思わずぼろぼろと涙を溢してしまった。

「ちょ、泣くなや！ あー、もう、ひとまずこっちおいで！」  
手を引つ張られ、仁美の部屋に入る。

室内はまだ整理がついていない状態でダンボール箱がいくつも積んだままになっていた。それでも、寝られるように布団だけはベッドに敷いてある。

「すまんな、汚い部屋で」

「ううん、私の部屋も同じ状態だし」

「来て早々、入学式やったもんない、学校長の話は長いしなあ」  
そんな、日常的な会話がなぜか心に染みだ。

私はクラスのことや、街であったこと。色々と話した。仁美も同じように、今日一日のことを話してくれた。

「私のクラスはなあ、変なんおつてな。自分の持つとる本の名前もわからへんとか言うとんねんで。あほやる？ あとなあ、本すら持つてへんヤツとかなあ。まあ、私も人のこと言えたクチやないねん



けど……」

仁美は色々と言ってくれた。

話を聞いていると、どうやら、彼女は“本格派”の方の魔法であるらしかった。本という媒体を単なる守護者の宿と捉えず、それすら崇高な魔法具へと昇華させる。本という道具を極限までその利便性や機能性を追及し、守護者の能力を最大限に発揮できる環境を構築させる。それはまさしく、魔法のプロだった。

魔法を使うという一点のみを目指す彼女達と違って、私は医療という分野があつて、そこに魔法があれば便利だろうなという程度の、そのレベルの魔法使いである。

どうやらこれは、入学して初めて知ったことだが、クラスを分ける基準となつているらしかった。入学前に聞き取りシートというものを書かされたが、あれはそのためのものだったのか。そんなことを考えていると、ふと、頭に槍真の顔がよぎる。彼は一体なにを書いたのだろう。必死に忍者ではないことをアピールしている槍真が思い浮かんで、うっかり笑みを溢してしまう。

「なんやの？」

「え、いや、その。本って。色々あるんだね」

「そうやねんなー！ あんたの本は？ どんなん？」

私は、肩掛けカバンの中の医薬品集を取り出した。

それを見て、仁美は大袈裟に感心した。

「話には聞いているけど、市販のでもいけるんやなあ」

「うん、私は魔法を医療に役立てないといけないから」

そういう道が、私の生きていく先には伸びている。ずっと、ずっと遠くまで。

「やっぱ、魔法って奥深いなあー」

「仁美のは？」

「私のはな」不適に微笑み、「じゃじゃーん」

盛大に口で効果音を言ってみせながら取り出したのは、革張りの本だった。どこか古びていて、飴色の表紙がアンティークさを醸し

出している。なぜか、昼間に行った喫茶店のことが頭に浮かんだ。こういう、敵かな、落ち着いた雰囲ネクロノミコン気があそこにはあった。

「これはなあ、『死者の掟の象徴』やで！」

「れ、れとろ、ろりこん？」

「ちやうわ！ それやと単なるヘンタイ親父やんけっ」

「ね、ねくる、ふあみこん？」

「ネクロノミコンや！」

私たちは顔を見合わせ、くすくす、と笑いあった。

「しかし、ハットリ君やつけ？ 入学早々、入院するなんてホンマ伝説やなあ」

「ほんとほんと」

「名前からして、なんやマンガみたいな感じやし面白いやつちな。忍者ハットリくんって、お前は忍者かつちゅーねん」

「あははは。ほんとに変なの！」

私たちは笑いあった。そこはかたなく関西の風を感じさせながら、仁美は優しく接してくれた。

私がつっかり泣いてしまったのは、この、暖かさのせいだったのかもしれない。今まで、実家や親戚からこんな扱いを受けたこともなければ、小学校や中学校では魔法が使える少数派だったために自然と浮いてしまっていた。

一緒の境遇だった姉さまは死んでしまった。ただ死んだのではない。姉さまは自分の手で終わらせてしまったのだ。

以来、一人でいることが心地よいのだと自分自身に信じ込ませようとしていたのかもしれない。まだ気持ちは晴れないけれど、それでもこの島にいれば何かが変わるような気がしてくる。

その夜、消灯時間が来るまで、私たちはずっと語り合った。

桜も舞わない、梅雨もない。そんな島で、私は確かに再び息を吹き返したのだった。

## 第一章『生き方』

誇りとか、驕りとか。生きていくのに、どうしても重たいね。

\* \* \* \*

初日の波乱を除けば、学生生活は至って普通だった。

ただ、中学校までの義務教育と比べれば、それは全く異なるものではあったのだけど。それは魔法という異端な力を、日常と受け入れるかどうかという問題もあった。

「……とまあ、こんな感じで、魔法というものを知るには、自分の契約した守護者がどういうものかを知ることと同意義となってくる。とりわけ、このクラスは、本に左右されない性質の守護者を持つものばかりを集めているので、そのことはすでに理解できていると思う。」

大城先生は黒板にチョークを滑らかに走らせていた。私は教壇に立つ大城先生が魔法を扱っているところを見たことがない。しかし、それは「能ある鷹は爪を隠す」ということかもしれないし、あるいは、「無駄なところで魔法を使うな」という、無言の教示かもしれない。なかった。

魔法を使えない人々は、魔法人を良く思っていないことも多い。時に、妬み。時に、恐れ。様々なマイナスイメージでもって、差別する。そんな人は多くはないが、それでもやはり、魔法によって優劣の差が生じるのであれば、そこに差異が生まれても仕方が無いことだった。

それは逆も然りである。

「昨日さー。テレビ見てたら、マジシャンのニュースやっててさ、見た？」

授業中にひそひそ話している、前の席の田中さんと佐藤くん。

「知ってる知ってる！ あれでしょー。魔法使う人に対する妬みだよね！ 私らのほうが優れてるのにさー」

田中さんは、得意気に鼻を鳴らした。

私も、女子寮の談話室に置いてある新聞の一面で見たが、妬みだとは思わなかった。

『マジシャンのポギー四郎が手品と称して、魔法を利用したマジックを披露し、観客から不正に観覧料を徴収していたことが判明した。調べに対してポギー四郎氏は、魔法も英語だとマジックだから良いと思った。今は反省している等と発言しており、警察ではポギー四郎氏の弟子も同様の関与がなされているのではないかとみて、余罪を調査する方針である。』

そんな感じの文面だったかな、と記憶を辿る。細部で微妙に間違っているかもしれないが、おおむねそんな感じだった。

これはどう考えても、ポギー四郎が悪い。何せ、人を騙しているのだから。どう考えても、魔法の能力の有無に対する妬みは介入する余地はないように思えた。

と、まあ、そんなことを席が後ろの槍真に小声で言ってみた。

「え、まあ、そうだよな」

槍真は半分寝ていたのか、気の無い返事をしてくる。

入学初日で入院した槍真は、五月になってようやく復帰してきた。勉強は遅れていたが、病院で特別に宿題という形である程度の教育はなされたため、これが出席日数に響くわけではないだろう。

「槍真も思うよね。魔法じゃないものを、魔法って言い張って使ってたなら、それは詐欺になるし、どっちもどっちなんだよ。きつと」  
言った瞬間、少し槍真が気まずそうな顔をする。

「そ、そうだよな」

「こら、そこー！」

大城先生が気づき、声をあげる。

前の席の田中さんと佐藤くんは瞬時に黙り込み、私と槍真だけが目についてしまう。

「授業中の私語はダメだろう。服部君は特に遅れているんだから自覚を持たないと。君はまだ実技もあまりできないのだから」

槍真は黙り込む。私は彼がすごい魔法の使い手であるを知っていたから、先生に抗議しようとしたが、槍真が止めたので、何も言わないでおこうと思った。

そして、このことはうやむやになったまま、チャイムが鳴り、授業は終りとなった。

休み時間、麗奈が私たちの席のところへやって来る。

「服部君。魔法のこと、先生に自信持っておっしゃったらよろしいのに」

「い、いや……」

「そうよ。槍真、あの不良と互角にやりあってたじゃない。最初の骨折がなかったら勝てたくらいでしょう」

麗奈と私は口々に、槍真の功労を褒めたが、槍真は気の無い返事をするばかりだった。

まあ確かにその通りだろう。何せ、骨折の理由が理由である。

サラ院長先生は言っていた。

「骨折の原因は高所から飛び降りたことによる衝撃でしょう。喧嘩が原因ではないと思います」

つまり、あの里見という不良のせいではないのだ。そのこともあり、このことは暴力事件としては届けないことにした。大城先生はそれでも一応は、と食い下がったが、槍真の「問題を起こして、父親に迷惑をかけたくない」の一言で、その場は収まった。

要するに、槍真はかつこつけて高所から飛び降りたせいで入院することになったのだった。

「入院したきつかけはださかったけど、槍真はすごいと思うよ」

と、私は感謝の気持ちも織り交ぜ、褒めたのに、やはり槍真は少

し複雑そうな表情を見せていた。

「あれは、魔法の力だけじゃないんだよ……」  
意を決したように、槍真は顔をあげた。

「それじゃ、あれは忍法か何かだっけ言うのかしら？」

槍真の魔法は、巻物を用いたもので、そこに宿る守護者も忍者のような格好をしていた。麗奈がそう思うのも無理はなかった。けれど、槍真にとつては心外であつたらしく、ひどく狼狽し、派手な音を立てて椅子をこかした。

「ば、ばばばばかだな！ この科学か魔法の世かっていう平成の時代に、ににに忍法なんてあるわけないじゃん！ ほ、ほんとどうかしているでござるよ！ あ、拙者、今日は外来診察があるので放課後は暇じゃないのでこれにて失敬！」

どろんでござる、と言い残し、煙とともに消えた。

周囲のクラスメイトの視線が、やたらと痛い。私にはもう、どこからどう見ても忍者にしか見えなかった。

\* \* \* \*

今日は、麗奈と放課後、喫茶店『night a star』でおしゃべりを楽しんでいた。

初日以来、久々の利用だった。今日はあえて、姉さまの話は出さないように心がけた。また泣き出してしまったら、きっと麗奈にもマスターの内藤さんにも迷惑がかかる。

内藤さんも気遣つてか、もともとの性格か一言も話さず、静かにグラスを磨いていた。

この店は、夜はバーにもなるのだという。その準備かもしれない。しかし、喫茶店とバーの両方の心得があるとは、内藤さんも器用な人だと思う。

「ところで良恵さん。知っていらして？ 最近の校内の噂」  
噂って何だろう。

噂ならいくつも耳に挟んだので、どのことを言っているのかわからなかった。記憶に新しいのでは、この学校の生徒会長がグラウンドで魔法の制御に失敗したとか、そういうレベルのものだったが「鬼、が出るそうですよ」

「お、鬼!？」

あまりに唐突な単語に、私は飲んでいたオレンジジュースを吹き出した。

「おや、良恵ちゃん。知らなかったのか。蓮華島は、そういう怪奇の類の噂は多いんだよ」

内藤さんがグラスから視線をあげ、ニヒルな笑みを浮かべる。

私は正直言つて、この手の話題は苦手なのだ。この島に来る時に船から、島に墓場が並んでいる風景を見たときはちょっと不気味で、この先やっていけるのかと心配になった。

けどまあ、あれは、角度からそう見えただけで、実際のところ町とは離れていた。この島が新規開拓されて埋立地が追加されるより以前の、島本来の住人の先祖代々の墓場であるらしいが、近寄りたくないのに誰にも詳しくは聞いていない。遠目に古ぼけた寺院も見えたが、荒れ果てた様子から人が住んでいるとは思えなかった。

「それに、この蓮華島は墓場島とも呼ばれていますものね」

麗奈もその話題に乗る。

「まあ、船の進行方向が悪いよな。港があの方角にあつたら、そりゃあ墓場が真先に目につくだろう。墓場を見晴らしよい丘に立てること自体は何も変じゃない」

そういえば、と内藤さんは話題を変えた。なんとか、オカルトな話題から反れそうで、助かった。今夜寝れなくなって、隣の部屋の仁美のところにお泊りしないといけなくなるところだった……。

「そういえば、あの墓守、じゃなかった。神社のところの里見守。あいつ、魔物退治なんだって、この前、木刀振り回して山ん中に入ってたけど、あいつがそんなこと言うくらいだから、今回の噂は相当目撃者が多いようだな」

里見 守。あのホストっぽい格好をした、不良だ。

「ああ、あの人ですか……彼が興味持ったことは、よっぽどだったんでしょね」

「まあ、里見はおおかた暇つぶしだろう。この科学と魔法の発達した現代で、鬼なんかいるはずはないさ。里見もそれをわかっているから、びびっている子分連中に態度で示そうってわけだろう」

もう、里見の話も、鬼の話も聞きたくなかった。

私のそんな様子を察してか、二人は話題を変えてくれた。この島の周囲でとれる海の幸とか、麗奈が小さかった頃はこの島がどんな様子だったかとか。どれも楽しい話題だったけど、私はどうしても、鬼の噂が頭の隅から離れないで上の空で話を聞いていた。

そして、かなり話しこんで、私は門限の近くを思い出し、ついでに内藤さんは夜のバーの準備があるからということ帰ることにした。

「こっつて、どうやってたらバーになるんですか？」

私はずっと疑問に思っていたことをたずねる。

「ああ、気になるか。扉の外から見な」

そう言うと、内藤さんは私たちを店の外に出した。

しばらくの後、建物が軋むような音がして、一分ほど止んだ。

「入ってみな」

内藤さんに案内されて、室内へ入ると、さっきのアンティーク調のカフェとは違って、シックな感じのバーへと様変わりしていた。

「科学の力ってやつだな。まあ、建築技術のほうがこの場合は気合入ってるけどな」

喫茶店『night a star』は半円形の構造をしている。建物の中が半分で区切られていて、スイッチを押すと半回転し、裏側のバーが表に出てくるという仕組みであるらしかった。

「俺は魔法が使えないけど、こっやって工夫こらして何とかやってるんだ」

と、彼は微笑んだ。



魔法を扱える人。扱えない人。そこには、そんな大きな差はないのかもしれない。

私と麗奈は喫茶店を後にし、それから分かれた。私は蓮魔の寮へと急ぐ。暗くなっている。まだ門限には間に合うけれど、鬼の話が怖かった。

大通りを抜けて、学校内に入り、薄暗い学内を通って、最奥の女子寮を目指し、急ぎ足で歩く。女子寮の建物が見えてきたと思ったその瞬間だった。

目前に空から黒い影が降ってきた。どしゃり、と砂を踏む音が、夜の空気を割く。

月明かりに照らされた“それ”は、私の方を見て不気味な笑顔を浮かべた。それは、まぎれもなく、“鬼”であった。鬼は瞬時に地を蹴り、人にあるまじき跳躍を見せ、視界から消えた。私は恐怖のあまり声すら出なかった。鬼がどこに行ったかなんて、どうでもよかった。

慌てて女子寮に帰り、仁美の部屋をノックし、部屋に転がり込む。その晩は半ベソかいて、仁美のお布団と一緒に眠りについた。後でずっと仁美にからかわれることになるのだけど、それすらどうでもいいほど、あの時は怖かったのだ。

\*

翌朝、授業の始まる前に、麗奈にその話をしてみた。案の定、笑っていた。

「……そもそも、みんなの持っている本に宿っている存在が魔法の源と言われているが、なぜかわかるか？」

大城先生が教卓から問いかけるが誰も答えない。

大城先生も回答を期待していたわけではないようで、気にした様

子もなく続けた。

「本に宿っている存在を、我々は“守護者”と呼んでいる。その名の通り、本の持ち主を守る存在だ。何から守るか？ 未熟な君たちが魔法の力に浸食されてその生命を落さないように守ってくれてくれるんだよ」

大城先生は微笑む。

「みんなの守護者を、出してごらん。このクラスにいる人は、社会生活に魔法を役立てる、日常と魔法の同和を目指しているから、守護者を出す程度わけではないはずだ」

各々、自分のお気に入りの本に宿した守護者に呼びかけ、机の上に召喚する。

私も医薬品集の中に宿るメデイに呼びかけ、出て来てもらう。メデイは少し眠そうな顔をしていたが、その透き通るような肌を外気に触れさせ、寒そうに少し身震いさせ、目を開いた。

メデイ 姉さまの守護者でもあった。それが、次の宿主に私を選んだのはどういう意図だったのだろう。教卓に立つ大城先生が私たちに授業で問いかけても誰も答えないのとは違って、問えば、答えてくれるのかもしれない。けれど、それをすると、何か壊れてしまいそうな気がして、姉さまの死んだ意味が実は本当に些細な、嘔気を催すようなしような理由だったりしたら、そんな胃液を撒き散らしたくなるような気持ち悪い理由で姉さまが死んだりしないといけないのだったら、私はあるいは立ち直れないかもしれない。

「色んな姿をされていて、いつ見ても楽しいな。先生の守護者のことも思い出すなあ」

大城先生は感慨深そうに言う。

守護者とは、私たち「本」との“契約者”を魔法という強大すぎる力から守るもの。私たちが魔法をひれ伏せ、自身のものとして取り込んでしまえばその役目を終える。ちょっと違うか。守護者に認められることで、守護者はその最後の一滴まですべての能力を、契

約者に受け渡す。そうして、役目は終わったと言わんばかりに消えてしまうのだ。

「先生の守護者はどんなのだったのですか？」

最前列に座っていた、委員長の斉藤さんが手を上げた。

大城先生はちょっと遠い目をして、微笑んだ。

「外人さん、かな。名前はイヴっていつてね……すごくきれいな人魚だった」

「はいはいはい！ それは先生とどういう関係だった人ですか！」  
すかさず、調子乗りなクラスメイトのひとりが茶化す。

そうなのだ。守護者は、かつての日本では「守護霊」と呼ばれていたという説がある。実際、魔法における「守護者」も、契約者と所縁のある存在であることが多い。その人のご先祖様だったとか、近いところでいえば、家族だったりとか友達だったりとか。生前とは姿は変わってしまうこともあったりするけれど、何かしら必ずどこかで関係あるものが守護者となるのが常だった。

そうでなくても、それは深く所縁を辿れないだけで、必ず契約者とどこかで繋がるといわれている。私にとってのメデイも、私とどういう関係があるのかはわからなかったが、以前、姉さまは「遠いご先祖」と言っていたから、私にとっても「ご先祖様」なのだろうと思う。

「どんな関係だっていいじゃないか。もう、イヴはいないのだから少し寂しそくに大城先生は目を伏せた。大城先生は、イヴという守護者から魔法の能力すべてを受け継ぎ、今ここで教鞭を振るっている。この目で見たことはないけれど、大城先生は本を利用せずに魔法を扱える「継承者」のはずだ。

「でもね」

と大城先生は力強く言う。

「契約者と守護者はいつか別れる運命かもしれない。でもね。それは、親から子にその血筋が引き継がれていくのと同じことで、魔法という宝物を、次の代へと繋いでいく尊いことなんだよ。だから、

その日が来るのを悲しんだりして、前に進まないんじゃないかと、君たちが一人前になることで、守護者をはやくあるべき世界へ還してあげないといけない。そうやって、世界は回っていく」

ちよつと抽象的な言葉だった。

契約者と守護者。私とメデイ。いつかは必ず、別れる運命にある。そのことを思うと、少し切なくなつた。

守護者から契約者に受け継がれていく「魔法」。それはあるいは、ばば抜きにおけるジョーカーの渡し合いなのかもしれない。誰かが常にその力を持っていなければならない。

もし、私が死した後は、私が誰か所縁ある者の守護者となる日が来る。それは一種の呪いだという人もいるが、私にはそれは、大城先生の言うとおり、とても尊いことのように思えた。

みんな熱心に耳を傾けている中、私は、前の席の槍真が守護者を出していないことに気づいた。

「ちよつと、槍真」

小声で呼びかける。

「な、なんだよ」

「あなたの守護者も出しなさいよ」

「え、守護者なんて持ってないよ」

「うそ。私、見たことあるもん」

「ねえよ」

「ある！」

「あるある、あ、アルミ缶の上にあるミカン！」

意味のわからない、しかも若干使いどころの間違っている上につまらない親父ギャグをかまして、槍真はなぜか得意気な顔をしていた。俗に言う、どや顔というやつである。

「こら、その二人。何をこそこそしゃべっているんだ！ ……あれ、服部君？」

大城先生は、そこで槍真が守護者を出していないことに気づいた

のだろう。

「え、い、いや、あの、別に守護者がいないわけじゃないんです！  
ないんですけど、その、人に見せたくないっていうか、えっと、  
そういうあれでござる……」

槍真は必死に何か弁解していた。私は何となくどうせまた忍者絡みだなー、と黙っていたが、これで事情を読み取れる人間は少ないだろう。

しかし、先生は厳しい表情を崩し、メガネの奥にふっと優しい色を見せた。

「わかるよ。守護者を人に見せたくない気持ち。僕もそんなときがあつたなあ。わかった。この場では出さなくていいよ」

槍真は安堵のため息を漏らす。大城先生は続ける。

「ただし、放課後は居残りだ。先生とマンツーマンで守護者について語ろう」

「い、居残り!?!」

「当たり前だろう。みんなはちゃんとやっているんだから。みんなの前でできなくても、さすがにここは学校なんだから、先生にはちゃんと見せてもらうぞ」

「そ、そんなあ……」

槍真が大袈裟に机に突っ伏すと、クラス中がどつと笑いで溢れた。このパターンはもう、私たち二組ではお決まりだった。

こうして、亜熱帯の蓮華島の五月も流れていく。

あいかかわらず、鬼の噂は絶えなかった。

\* \* \* \* \*

蓮魔での一日のカリキュラムは、クラスや学年によって異なる。

しかし、一時間後と授業のコマ割りは概ね一般の高校と変わらない。ただ、その授業内容だけが著しく異なるのである。

特に際立って珍しいのが、魔法の実技。水をコップに貯めてその質量を増やしたり、酸素の入っていないビンの中でマツチに着火させたり、今は基礎なので細々したことをやっていく。もちろん、クラスの中にはそのくらい簡単に行なえる者もいる。私もそうだ。けれども、この授業は「できるかできないか」をみるのではなく、魔法の行使者の素質を計っているのだという。

その他にも、ちよつと物を浮かせたり、変則的に動かしたり、簡単なことから授業は入っていく。これは「守護者から力を上手く借りる為の練習」と大城先生は、わかりやすく噛み砕いて説明してくれた。

魔法と言うと、本来、「何でもできる」と思われがちだけど、実際はそうではないと言う。この現代社会において、一つの技術として認められている以上、それは超能力やオカルトの類であってはいけないというのだが、私にはちよつと意味がわからない。ただ、理解できたのは、魔法にも一定の法則があつて、その範囲内の事象しか引き起こせないのだということ。また、使い手の素養や質と、宿る守護者との相性によつて、その幅は大きくぶれる。大城先生はそれを、「マジカルリスク」と教えてくれたけど、聞きなれない単語のため今ひとつ耳に馴染まなかった。

実技は楽しいけれど、それ以外の座学に関してはみんな眠いように、前の席の田中さんなんかは熟睡していた。

そんな田中さんの頭を学級目簿ではたいて、大城先生は説明を続ける。

「魔法による犯罪、というのは刑法上でも非常に重く罰せられる。先日の新聞で、マジシャンのポギー四郎氏が逮捕されたな？ あれが一般人ならば、詐欺罪が適用される。刑法二百四十六条だな。手品を見せるといつて、手品じゃないものを見せたのだから、しかも故意にだ。不法領得の意思をもって他人の占有する財物を取得するというんだが」

大城先生の説明を聞いて、ポギー四郎のニュースを思い出す。

懲役三十年と、出ていた。おおよそ、種類によつて分かれるらしいのだけど、魔法を用いた犯罪は、懲役三十年か無期懲役となるそつだつた。

「通常の詐欺罪が十年以下のところ、魔法を用いたポギー氏の場合は三十年と判決が出た。このように、通常の人よりも遙かに重く見られる。魔法を用いた犯罪は、他に採用例が少ない死刑さえ容易く適用されると聞く。なぜ、こんな違いが出るかわかるか。山田？」

「ええー、それつてえ差別でしょ？ うちに嫉妬してんのよ」

田中さんは今時のギャルっぽく、語尾を延ばしながら言った。

「違う。魔法というのは、不可能を可能にすら変えてしまうからだよ。戦後、高度経済を迎えた日本では他国からの技術を発展させて様々な機械を作ってきた。今となつては、先進国だ。その日本の技術の粋を駆使しても、優れた魔法には百パーセント対応することはできない。だからこそ、魔法を扱う者は道德心を大事にしなきゃいけないんだよ」

さもなければ、我々は迫害されるだろうと大城先生は、一冊の本を取り出した。魔女狩り、とタイトルには冠してあつた。

「これは時代も違うし、そもそも我々のような魔法とは違うが……過去の歴史だ。魔女と認定されたものは、その力を恐れられ、命を奪われた。危険の排除だ。この歴史は、政治犯を裁く為だつたなど諸説はあるが、我々にも同じことは起きないとは言えない」

そこから長く説明してくれていたが、要約すると、「悪いことはしてはいけない」ということだつた。

魔法を用いたストーリーカー犯罪なども後を絶たない。とりわけ、魔法は性犯罪によく使われる。弱い女性を相手に行なわれる暴行。ただでさえ、女性が男性に腕力で対抗できないというのに、魔法を用いられたらもうどうしようもない。それら性犯罪だけではない。様々な犯罪から治安を守るため、今ようやく国内で魔法を用いた警備隊の設置も進められていると聞く。

「……そういうわけで、罪を犯せば、それが自分へ返ってくるんだ。犯罪は、決して起こしてはならない」

月並な言葉であったが、先生が用意した魔女狩りの本や、その他の様々な書籍は、みんなの心に何かしら訴えかけることに成功したようで、みんなは真剣に耳を傾けていた。あのちゃらけた田中さんまでも。

これが、魔法技術専門学校の重要な教育のひとつである。魔法を扱う者は、清らかな心を持たなければならないのだ。

授業が終った後、私と麗奈は槍真の外来通院に付き合った。

「ねえ、槍真君。今日で一応、レン先生のスパルタ式の治療最後なんでしょう？」

スパルタ式、という表現は非常によくわからないけれども、主治医のレン先生というのもどっぴり漢字を当てるのかわからなかった。どういう人なのだろう。サラ先生も元々は外国籍だったというから、案外、日本人でもないのかもしれない。あまり、深くは考えないことにした。

「ふふ、もっと厳しく痛めつけられたら良いですね。残念ですね」

「うん……」

「なに。この前まで、レン先生と顔合わせるのが嫌で、ようやく解放されるって喜んでいらしたでしょう。急に寂しくでもなったのかしら？」

「いや、それは嬉しいんだけど……」

私は事情がちょっとわかったような気がして、麗奈の脇を軽く肘でこづいた。

麗奈も鈍い子ではない。私の合図に気づき、それ以上、会話を続けるのは止めた。

しばらく無言で歩き続け、蓮華総合病院に槍真は入っていった。

私たちはいつものようにそこまで見届けると、『night a



star』に向かおうとして ふと、気がついた。

「あれ……」

それは、繁華街から反れた一本の路地の先に居た。

「良恵さん、どうしたの」

そこで麗奈も口をつぐんだ。

私は目が飛びぬけて良い方ではないのでわからないが、それは妙な外見をしていた。全身が見えているわけではない。電信柱から、顔だけをこちらに見せて、じっと見つめ続けているのだ。私たちと目が合い、「それ」は慌てて顔を引っ込めた。

「麗奈、今のは」

「……鬼ね」

麗奈は短く言い切り、決意を秘めた目で私を見つめた。

「良恵さんは、いつものカフェで待っていてくださいませ」

「え、麗奈は……」

「野暮用が済みましたら、貴方の元へ向かいますわ」

言うや、麗奈は駆け出した。

私は慌ててその背中を追いかけて走り出すが、これっぽっちも追いつけない。二人の距離はどんどん広がるばかりだ。

麗奈は身長が高く、足もすらりと長い。細く引き締まった身体をしており、体育の授業でも常に良い成績を出している。対して、私はチビでどん臭く、どンドン置いていかれる。

「麗奈、麗奈……！」

荒い呼吸に親友の名を織り交ぜるが、その声はむなしく虚空へと消えた。

それはまるで、幼い頃に、姉さまと二人で遊びに行ったときに、私だけ置いてけぼりを食ったときに似ていた。姉さまは気づかなかつたと、後で謝ってくれて、それは仕方が無いことだと私も納得はしたのだけど。

あの孤独だけは、いつまでも胸に焼きつく。

私は麗奈の消えた先を見つめ、誰も居ない路地裏でひとり座り込

んでしまった。

\* \* \* \*

「おいコラ邪魔だ」

そんな私に声をかけたのは、あの不良だった。

顔をあげると、険悪な目つきで私を睨んでいる。しかし、何を思ったのか少し視線を逸らし、

「何してんだ？」

腰をかがめて、地面についた私の右手を引っ張る。手首を掴まれる形になって、少し痛かったが、私を立たせると里見は手を離れた。「いや、あの……」

嘆息し、里見は呆れたような視線を投げつける。

「いや、あの、じゃあわかんねエって前も言っただろ。吉田の悪いとこだぜ。だがまあ、ひとりで見るところを見ると、おおかた想像はつく。神宮寺麗奈だろ？」

どうしてそれを、と聞くまでもなく里見は続けた。

「お前ら入学以来コンビみたいになってっからな。神宮寺がお前を置いて行ったとなると……俺の狙ってるエモノと一緒にかもしれねえな」

里見は、路地の先を睨み、「墓地のほうに行きやがったか。たく、不法侵入もたいがいにしるよな」とぶつぶつと呟いた。

「とにかく、お前はもう寮へ帰れ。明日には片がつく」

「ま、まっってください。私も一緒に……」

「来るなっつってんのがわかんねえの？ お前がいると邪魔なの」  
もうその場を去ろうとする里見の脚に縋りつき、それ以上、歩を進めないようにと必死に頼み込む。

「おねがい、お願いします！」

麗奈が墓地の方へ向かったのだとしても、その先、土地勘のない私にはどこを探せば良いのか見当もつかない。麗奈は島の人間だ。

そして、この男も同じく。

「もう、もう置いていかれたくないんです！ 姉さまみたいに、居なくなつてほしくないんです！ 姉さまは私を置いて、何気ないそぶりを出かけてしまった。私もまた会えると信じて疑わなかった。何も無い、いつもの別れこそ、二度と会えない別れに繋がっちゃう。だから、ここで離れたら、私と麗奈は……！」

支離滅裂だった。だけど、私は必死に訴え続けた。途中から何が何かわからなくなつて。どう言えいいかわからなくなつて。

「わーっ。わーっ。時間が無駄だから、勝手に後ろついて来い。ただし、遅れたら置いていく。それでいいか？」

里見の表情を盗み見る。

怒っているようにも見えないが、そこには何か別の感情が隠れているような気がした。しかし、私と目が合うと、里見は視線を逸らし、背中を向けた。

「行くぞ」

私は、しつかりした声音で応じる。

そして、その大きな背中を追いかける。もう二度と、置いていかれるものか。そう強く念じる。

しかし、男の足と女の足はぜんぜん違う。年齢差も考慮したら、二人の距離は広がるばかりだった。それでも私は走つた。必死に、足を進めた。自然と、息が荒くなる。里見の背中が小さくなり、また追いつき。そればかりを繰り返して、里見の背中が小さくなる度、私は泣きそうになった。けれども、泣くものか。泣いている暇があったら、今は走らなければ。

里見の背中から、時折り視線をはずし、周囲を流れる景色に目をやる。

商店街を抜けた路地の先、舗装されていない道に出ると、道の両脇には民家が立ち並んでいる。どれもそんなに新しくはない。この島に来て、初めて目にする景色だった。ここは蓮華島が再開発される前の、元々の島民の生活圏なのだろう。私たちのような“新参者

”が、易々と入るにはためらわれる世界。

「おい」

「え」

「え、じゃねえよ。ぼけつと景色見ながら走る暇あったら、置いていくぞ」

「う、ごめんなさい！」

言いかけて、気づいた。ここが終着点らしいと。

土煉瓦で作られた古い住居群を抜けた私たちの視界には、不気味な墓地在飛び込んでくる。その脇に、お寺らしき建物もあるが、相当古いようでその概観から廃棄されたものだとは判断できた。

「へえ、おもしれエ。勝手にあがり込んでやがる」

里見は寺の門構えを見て、口角をあげた。そして、そのまま足を進める。寺の敷地内と思われる一画に踏み込んだばかりか、さらに奥の間まで土足で上がりこんでいく。いくら廃寺とは言え、不法侵入だ。

「ちょ、ちょっと！」

「かまわねえんだよ。オレの家の土地なの。ここはもう、ほとんど親族の誰も使っていないからこんなだけだな、別の場所に新築移転した寺と墓地がある」

「え、あなたの家？ だって、ここお寺でしょう？」

「お寺が家だったら悪いかよコラ」

短く舌打ちすると、今はもう使われていないという寺の中を里見は見渡した。私もその視線の先を追いかけるが、いかんせん暗くて見えない。もうしばらくしたら、目も暗闇に慣れてくるのかもしれないが、今の私には、すべてを飲み込んでしまう漆黒の闇に見えた。「気配がするな……ひとつ、か。さっきのやつか？ 出て来いボケ」

里見は挑発するように、暗闇に問いかける。

「出て来ねエなら、こっちから行くぞ」

屋内へ足を進める。

瞬間、物音が生じ、風の動く気配がした。里見が動き、“それ”

に蹴りを食らわせる。

私は完全にその動きに目がついていつていない。ただ、結果だけを見て、何があったか判断するしかなかった。

「なにそれ、般若？」

里見の足元には、般若の面を被った男が倒れていた。

「ややこしいことすんじゃねえよタコ！」

里見が木刀を男に叩き込もうとした瞬間、男は地面に倒れたまま、器用に転がりそれを避ける。そのままの勢いで、般若の男は両足を回転させ、ハンドスプリングの要領で起き上がり、里見に何かを投げつけた。

里見は木刀を振るう。木製の刀身にぶつかった瞬間、それは爆ぜた。

「ばくだんか？」

里見は少し焦げた木刀と、般若の男を交互に見て、怪訝そうな表情を浮かべる。

私はどちらかというところ、里見の木刀が少し焦げた程度だったことに驚きを隠せない。結構、大きな音もしていたのに。あるいは、魔法の類で身を守っているのかもしれない。

「科学忍法」

般若の男が、跳んだ。

「火の鳥！」

瞬間、男の周囲に爆炎が巻き上がり、里見と私の方へと飛び込んでくる。が、里見は男をローキックで吹き飛ばした。炎は里見のスーツの裾に燃え移ったが、里見は事も無げにそれを消した。炎を恐れないのは魔法の恩恵か。

二人のあまりの激しい攻防に、私は自分の魔法の才の無さを実感した。

「……魔法じゃねえぞ」

内心を見透かして、ぼつりと里見はつぶやく。

「え？」

「俺もこの男も、魔法は使ってねえ。元々、この世界に存在している物理法則に倣っているだけだ。俺のは力押しで、この男の何かテクニクでもあんだろ」

般若の男は里見の声を聞き、お面の下からくぐもった笑い声をこぼす。

「よくぞ見抜いたでござる……若造よ」

「見抜いたも何も、一発でわかるっての。だいたい何？ 科学忍法って、ガツチャマン？ そもそも、魔法じゃなくて自分でもう科学って言っちゃってんじゃない」

「く……魔法など……」

般若の男は少し悔しそうな声を漏らし、「どろんでござる！」と街の方角目掛けて走り始めた。

「おい吉田。あのお面忍者野郎、ちよつとばかり雰囲気似たヤツに心あたりあんだろ。様子見てこいよ」

「え、あなたもわかつてるなら一緒に……」

「俺はなんだ、ケガさせて入院させちまった側だからな」

「気まずそうに言うと、里見は男とは反対の方向へ歩き始めた。

「ちよつと、どこに……」

「野暮用」

本当にマイペースな人だった。

しかし、私はあの般若の不審者を放っておけない気持ちになっていた。あのまま街に行くと、駐在のお巡りさんに捕まるか、ヤンキーに絡まれるか。よくない結果が見えていた。

何より、彼に似ていてどこか放っておけないのだ。忍者バカ、槍真に。

「待ってください！」

私はそう言うと、里見ではなく、般若を追いかけて始めていた。

足だけは無駄に速く、もうだいたい般若は小さくなっていた。このまま行けば置いていかれるのは目に見えている。私は肩掛けのバッグに潜ませている“本”を取り出し、中に居るメデイに声をかける。

「メデイ、お願い」

走りながら、私はページをめくり、最適な手段を頭の中で検索する。

残念ながら、医薬品集に自分の能力を向上させられそうなものはない。そうなれば、相手にかけられる何か別のものを探すべきである。少々の眠気を与えればいいのかもしれない、そう考えて、ひとつチョイスした。

『ミンザイン！』

通常なら、効かない人もいるかもしれない。けれど、そこにこの世ならざる力が乗せられると、一定の理を外れて、その効果は現実のものとして生じる。

般若の男はよろめき、そして倒れた。

私は息切れしながら、男の倒れているところに必死に駆け寄った。

「ごめんなさい、魔法なんてかけたりして……あれ？」

男だと思っていたものは、丸太が男の服を着ているだけであった。これはまるで、槍真がよく使う“忍法・身代わりの術”である。いや、当たり前か。なにせ、般若の男は槍真の父親なのだから。

私は周囲を見渡して、何も動くものがないことを確認し、嘆息した。

里見はどこかに行ってしまうし、もうこれだけ時間が過ぎたら麗奈とも合流できないだろう。また、槍真の父親もどこかに消えてしまった。

こうなってしまったら、ここに居る意味もない。私は寮に戻ることにした。

寮に戻ってからは疲れたのもあって、すぐに寝てしまった。

翌日の朝起きるのが少し億劫だったが、気合を入れてベッドから飛び出た。

魔法を扱うというのは、使えない人が思っている以上に、体力や気力を必要とする。大きなものを扱えば扱うほど、疲れる。これは、

魔法を扱う人の使い方や、受け皿であるその人の元々の素質に左右されるけれど、魔法を、本の中の住人からしつかり受け継いだ人であれば、そのあたりを上手いことコントロールして使っていけるようになる。

つまり、大城先生や里見のような継承者である。

「つまり、お酒と上手に付き合えるようになる感覚に似ている……とよく言われるが、みんなはまだ未成年だからな。飲んじゃいけないぞ」

前半の小ネタは入学式の蓮華学校長のモノマネだ。時にこんな小ネタを挟みながら、大城先生は退屈な座学をうまいこと進めてくれる。

それでも寝ている馬鹿もいるわけだ。槍真は小さく寝息を立てて眠っていた。案の定、大城先生に叩かれて慌てて教科書を開いていた。

いつもの授業のワンシーンも終わり、休み時間、こっそり麗奈に「昨日のあれ、槍真のお父さんだったみたい」と説明する。麗奈は一瞬なんのことか探るような顔をしてみせたが、すぐに思い当たったみたいで、「ああ、里見が遭遇したっていう般若の仮面の方ですわね」と微笑んだ。

「そう、それ」

「それでしたら、引き続き情報もありますわよ。放課後、その方のいらっしやる場所に一緒に行きましょう。もちろん、服部君も」

大城先生に叩かれたところをずっとさすっていた槍真は、「え」と声をあげたが、私と麗奈の顔を交互に見比べて更に不思議そうに首を傾げた。

「何で僕？」

その反応を見て、もしかして槍真のお父さんは槍真に内緒でここに来ているのではないかと思った。

「じゃあ、放課後ね」

麗奈もそれ以上は何も言わなかったので、私もそれに倣った。



放課後。

私たち三人は、商店街の外れにある喫茶『night a star』に来ていた。

「ここにいらっしやいますわ」

そう言うと、麗奈は扉を開けた。

からんからん、と軽快な鐘の音が鳴り、マスターに來客を告げる。店内は、いつものカフェと様子が違っていた。これは、マスターの内藤さんの言っていた、『night a star』の夜の顔であるバーの形態である。

「ごめんね。昨晚からその方がまだ帰ってくれなくてね」

指差した先には、カウンターがあり、グラスを片手に突っ伏した男が居る。カウンターのの上には、般若の面が置かれていた。それを見た槍真は、啞然とした顔で「と、父さん……」と声を漏らした。

「ん……」

その声に反応して、男が顔をあげる。

親子と言われたら確かに似たようなポイントは多い。顔立ち、目元なんかはそっくりだった。

「そ、そそ槍真！？　なんで、ここに!？」

男はガタン、と椅子を引っくり返して立ち上がった。

「父さんこそ、何でここに居るんだよ!?　捕まってたんじゃないの!？」

そういえば、槍真はそんなことを言っていたな……と、病院の入院時にサラ先生が保護者を確認した際のことを思い出す。

「いや、お前が入院したって聞いて居ても立ってもいられなくて……」

「いや、そういう問題じゃないよ!　どうやって、牢から出てきたのさ?　いや、それもだけど、島にどうやってきたの?」

そこで、槍真のお父さんは明後日の方角を見て、ため息をひとつ。「まあ、色々ありましたな。ちよっとばかり牢屋から出て、こっそ

り船に忍び込んでるばるやって来たのでござるよ」

「脱獄!？」

「牢屋から出ただけだよ」

「ていうか、こっそり船に忍び込んだって、それ密航じゃん!」

そこで、父親の威厳を見せるべく、男は一喝した。

「細けえこたあいいんだよ! そんなことよか、傷は大丈夫なのか、ああん!？」

もう、なんかどうでも良くなってきた。

麗奈も同じ様子だったらしく、しばらく二人で騒がせておくことにして、私と麗奈は内藤さんにメニューを注文した。もちろん、このバーの内装通りのものではなく、昼のカフェの「いつもの」だった。

内藤さんのカフェオレをすすりながら、隣の親子喧嘩に聞き耳を立てる。

「だから俺は、魔法の学校なんて止めとけつつあったんだ」

「そんなこと言っても、父さんみたいな人生。僕は嫌だよ」

ふたりはこっそり会話しているつもりらしいが、どうにも丸聞こえである。

それにしても、槍真の口調が普通すぎて、話の内容よりもそつちのほうに気にかかって仕方がない。ござる、とか全然言っていない。

「忍者は立派な職業だぞ」

「父さんみたいになるくらいなら、忍者になんてなりたくない」

「先祖代々継がれてきた職だぞ……! 父さんはこの仕事に誇りを持っていて。槍真はまだ若いからわからないんだ。魔法なんかにつつを抜かして……」

「魔法だって、今の日本では重要な技術じゃないか! 科学と並んでさ」

「魔法なんて、くそくらえだ! 科学もな! お前も魔法を生かした仕事をしたって言うけど、忍者という古い生き様から逃げたいだけじゃないのか? まともに考える!」

「僕だって、考えてるさ！ 何だよ、忍者だ、任務だとか言つて、他人の家に忍び込んでセコムに捕まるのが誇り？ そんな誇り、こちらからゴメンだよ！ それにさ、親戚に大蔵おじさんみたいに、忍者だ何だ言つたつて、観光客相手に手裏剣の投げ方おしえてるだけなんてのもゴメンだ！ そんな苦労までして、そこまでしがみつく誇りって何なのさ？」

槍真は一気にまくしたてたと思うと、急にその周囲を煙が包んだ。どろん、というよくわからない効果音が鳴ったと思うと、もうあとには槍真の姿はなかった。

残されたのは、槍真のお父さんだった。うつむいて、ただ黙り込んでいる。

なんとも居心地の悪い状況に、私たちはどうしたものかと互いの顔を見合わせた。麗奈が首を振るので、仕方が無く、私は槍真のお父さんの隣に座り、声をかけようとする。

「あの、槍真君は……忍者のこと、悪く思っていないですよ。彼なりに、今の時代に即した忍者を模索しているんだと思います。学校でも不自然なくらい、忍法にこだわるし、魔法を使っていると思いきや、忍法だったり……たぶん、忍法と魔法をミックスさせたものを目指しているんだと思います」

私の言葉を聞き、槍真のお父さんは小さく頷く。

「わかつておる。わかつておるさ……我々の世代のやり方では、この時代に即さないということもな。なあ、お嬢さん方。私がどうして、ここにいろかわかるかね？ 脱走したのではない。政府の上のほうからの通達で恩赦が出たのじゃよ。特例中の特例でな。なぜか？ 槍真がここを出た将来、国の自衛官になるという契約を交わしたからなんじゃ。魔法を扱う自衛官にな」

それは、『M・JAPAN構想』の中でも目指されている。「国を守る為に、魔法を扱うことは大義」と謳われているのだ。これが日本でなければあるいは、軍事に投入されていたかもしれない。だ

が、複雑に制限のかかった日本国憲法の中だからこそ、世界の軍事バランスを崩すことなく、魔法を導入することが可能になっているのか、そのあたりの複雑な経緯はまだ私にはわからない。

「てつきり、魔法の腕前だけを磨いているのかと思っていいたら……あやっ……」

そう言っつて、カウンターの上に視線を落す。

そこには、国のどこか偉い名前の機関とのやりとりを交わした記録であるところの契約書が置かれていた。「魔法を扱う自衛官」と書面に書かれているところに、手書きで書き足し、「魔法と忍法を扱う自衛官」と訂正されていた。

「先ほどのもなかなか、見事な“隠形の術”だったではないか」  
そう言っつて、涙を一滴こぼした。

\* \* \* \* \*

それから、お父さんは内藤さんに代金と幾許かの迷惑料と言っつて、断る内藤さんに無理矢理にお金を渡し、帰って行った。

「もういいんじゃないかって？」

麗奈は部屋の片隅に向かっつて、投げかけた。

「さつきから、鼻をすする音がうっとうしくつてよ」

言われると、槍真が天井からすとん、と落ちてきた。

「なんで、お父さんにご挨拶しないのですか？」

麗奈が聞くと、槍真は「まだ、一人前じゃないから」と答えた。

そして、袖で鼻を拭くと、力強く宣言する。

「僕は……魔法と忍法の融合を目指し、日本の平和を守る忍者になる」

それは、男の顔だった。いつもの情けない、へらへらした顔ではなく。

「父さんの生き様だつて、みんなの生き様だつて。本当はひとつのカタチだつてわかっている。けれど、僕は僕のやりたい方法で、忍

者を続けていく。時代が変わっても、心の中の忍者の誇りだけは変わらない」

力強く言う。やけに、かっこよく見えた。

私にはやりたいことが何かあっただろうか。親に強いられた、医療のレールを歩み続けるだけなのだろうか。漠然と頭の中にあることはある。自分が好きなもの。けれど、それは果たして夢に結びつくのだろうか。

「僕は、生まれてから死ぬまで忍者だ」

槍真はそう言って、しまった、と言わんばかりに口をあけた。

「い、今の冗談だから、いやほんとまじで。忍者なんかこんな科学の発達した時代にいるわけないじゃん！ いたとしても、セコムに捕まるのが関の山でござるよ！ あは、あはははは！」

一気にまくしたて、「どろんでござる！」と姿を消してしまった。

煙幕が立ちこめ、それが消えるまでの間、私と麗奈と内藤さんは啞然とその様子を眺めていた。

「まだあんなこと言ってますわね」

麗奈が呆れたように呟く。

しかし、私にはそれが、槍真の照れ隠しであるように感じた。そうして、ふと思いつき、私は内藤さんをお願いをしてみる。

「内藤さん。日中、私をここでアルバイトとして雇っていただけないでしょうか」

「え？」

「お給料はいらなくらいです。そのかわり、お料理を教えてくださいませんか」

この『night a star』はカフェとバーの双方を営んでいるだけあって、内藤さんの作る料理のレパートリーはかなり広がった。私はそれを、教えて欲しいと思ったのだ。それが、漠然とある、私の好きなものだったから。

内藤さんは狐につままれたような顔で私を眺め、「お姉さんと同じことを言っただね」と微笑んだ。

「え……」

「お姉さんも、ここで一年生の頃からアルバイトしていたんだよ。料理が好きだって」

姉の姿を思い浮かべる。

医療一筋と想っていた姉さまに、そんな側面があったなんて思ってもいなかった。

「最初会ったときに言おうか悩んだんだけど、辛いこと思い出させるかなと思って、あえて言わなかったんだ」

「そう、だったんですか……」

そう答えるのでいっぱいだった。

高校一年生の私は、高校一年生の姉さまとどれくらい離れているのだろうか。ちょっとでも近づけるのだろうか。

姉さま。あと何年経ったら、貴方の気持ちを理解できるのでしょうか。

姉さま。私はまだ、すべてを知るのが怖いくせに、それでも貴方を追いかけています。

肩掛けカバンの中でメデイが震える。メデイはすべてを知っている。だけど、何も語らない。それは、私が成長して、すべてを受け入れられるのを待っているからだわかってる。本当は、メデイも伝えたいのだと思う。

私も、槍真みたいに強くならなきゃ。自分で自分に言い聞かせ、明日から働くことになる『night a star』を後にした。

## 第二章『家』

誰だって、そうだ。だって、生きているのだから。

\* \* \* \*

漆黒の空に、白煙が上っていく。白煙というには、薄く儂い。要するに、ただの湯気だ。私たちは今、女子寮に隣接した、大浴場の露天スペースに浸かっていた。

「ずるい」

思わず、口を割って出た言葉は、麗奈に向けてのものだった。

「何がですか？ 良恵さん」

「いや、まあ……」

私は麗奈の胸は見ないようにして、言葉を濁す。高校二年生。まだまだ、可能性はあると信じたい。

「変な、良恵さん」

そう返すと、温水を白い肌に塗りこむようにして撫でた。

ここ、蓮華島は火山の関係で、部分的に温泉が沸いている。それを引つ張ってきたのが、この大浴場であり、男子寮と女子寮にそれぞれ大浴場が設置されている。部屋にシャワーもあるが、やはり広いお風呂を使う生徒が大半で、だいたいは浴場は混み合っているのが常だった。

しかし、ここ最近はそのようではなかった。

「麗奈は来ると思う？」

わかりません、と麗奈は夜空の月を見上げた。

「でも、私はその“怪奇”を探るためにここにいますから」

「うーん……本当に鬼なのかなあ？ 去年の槍真のお父さんみたいに、何かお面被っているだけとか、そんなんじゃないの？」

「それでしたら、ただの変態さんということになります。捕まえて

さしあげれば良いだけのことですわね」

そう言うのは、名門・神宮寺家の跡取り娘。旧い家柄あつてか、合気道などの武術も叩き込まれていたというのを知ったのは、彼女と知り合つて一年後だった。お互い、知らないこともまだ多い。

「でも、こつやつて露天でのんびり湯浴みというのも、いいものですわね」

引き締まったプロポーションの良い裸体が月明かりに映える。対して、私は幼児体系。温泉で溺れ死にたい。

「あら、良恵さんは、入学時からちよつとずつですけども成長していますわよ。一年生と二年生でこんなにも違いますわ。私なんて、変わらないままですもの」

そんな様子の私に気づいた麗奈は微笑み、フォローしてくれた。

「そうかなあ……」

「そうですね。魔法の素質だつて、料理の素質だつてピカイチです。良い栄養士さんになれますわ」

ああ、体系のことじゃなかった……と、思わずガクリと来る。

けれども、この一年間で確かに伸びたと思う。そうして、漠然とひとつの夢が固まつてきている。

入学当初はさほど大きな夢もなく、ただ親の敷いた「医療」の道突き進んでいた。けれども、今は違つている。好きだった「料理」を活かせる道を歩みたい。

「本とメデイがいなくても、部分的に魔法を使えるようになったけど……この時期の一年間つて、すごいんだなつて自分でも思う」

「私たち“本”の契約者は、守護者から力を引き継いで、それを自分のモノにする……そうして、それを日本の未来のために使う。悪しき方向へ利用してはならないことを学ぶためにも、貴重な学校生活ですわね」

この一年間で、色々なことを覚えた。そして、知つた。

魔法の技術で言えば、座学と実技。それから、魔法を有効活用した将来の進路。私の場合で言えば、やはり病院という場がいいだろ



うということ。それは、サラ院長先生にも言われた。

友達のことやこの島のことと言えば、麗奈や里見のこと……。

「まあ、何よりも……こうやって、良恵さんと一緒にできるなんて、それはそれで楽しいですわ」

麗奈は実家に住んでいるので、普通はこの寮の中までは入れない。しかし、今回は特例でここに来ている。麗奈が、神宮寺家の正当な跡継ぎであるからである。

神宮寺家と、里見家。この二つの家は、蓮華島の由来ともなっている、蓮華家と並んで旧くから存在する名家である。が、蓮華家と違うのは、どちらかというところ、宗教的な側面を持った家柄であるということだった。

里見家は仏教の系統であり、神宮寺家はキリスト教の方面であるということだが、どこまでを包括しているのかはわからない。こういう離島のことだから、仏教と一括りにして、いろんな宗派を含んでいるかもしれないし、神宮寺家にしても、カトリックやプロテスタント関係なく受け入れているのかもしれない。何にしても、小難しい話で私にはそのあたりはよくわからなかった。

近年に入って、里見家や神宮寺家のあり方は変わってきた。蓮華家が学園の設立を目指したのと同時に、里見家は警官などの方面に多くの人材を輩出し、神宮寺家は島の役場に多くの人材を輩出した。苗字は変わっていても、遠縁だったり、多くの身内で構成されており、本土ならば許されないことである。

「けど、麗奈がそんな雑用任されるのも、お父さんのお仕事でしょう？ 何か変」

「役場によせられた苦情処理……それならば神宮寺家の仕事といったところですね。私も家に縛られる身ですもの」

苦情処理が、実際に現場に乗り込むなんて話は聞いたことが無いが、若い女性で学園に由縁のある者が麗奈しかいなかったという理由で、期間限定ではあるが麗奈は寮に暮らすこととなった。しかも、私とルームシェアである。

私はすごくうれいし、楽しんでる。麗奈も同じようだった。麗奈も家の雑用でも、そういった点で譲歩しているのかなと思う。「けど、今日で何泊目かわかりませんが……やっぱり出ませんかねえ」

麗奈はそう言って、「まあ、このまま何もなければ一ヶ月でお家に帰りますわ」と微笑んだ。それまでは、ちょっとした修学旅行気分を味わおうということだろう。

私たちは、雲ひとつ無い月明かりの中、温泉を堪能しようとしたところであった。

「来てしまいましたわね。楽しみを邪魔されましたわ」

立ち上がり、麗奈はタオルを巻いた裸体を外気にさらす。

私も慌ててそれに倣う。引っかかる場所がないためか、巻き方が悪いのか、タオルがずれそうになり私は慌ててそれを直した。

麗奈が濡れないようにビニール袋に入れた聖書を取り出し、残る一冊、愛用の医薬品集を私に投げてくれる。

「すべて求める者は得、捜す者は見だし、門をたたく者はあけてもらえるからである」

湯水で滑りやすくなっているタイルの上を、麗奈は器用に翔けて、露天風呂の進入防止用の竹柵へと詠唱の矛先を向ける。麗奈の守護者が、その姿を現す。天使だ。

「マタイによる福音書第七章八節！」

何もしていないのに竹の柵が左右に開く。まるで、門を開くかのようだった。

同時に、中を覗いていた人影が浴場内へ転がり込む。転がった勢いで頭を打ったのか、はたまた麗奈の魔法にそこまでの効果があったのか、男は起き上がろうとしなかった。

「あらら、呆気なかったですわね」

「お、おに……？」

それは鬼の仮面を被っているように見えたが違っていた。

鬼のような形相、という言葉があるけど、それをそのまま当て嵌

めたらこうなるだろうなというような顔。それは表情の変化だけではなく、表皮も薄桃色に変色していた。たとえるなら、アルコールの多分に入った酔っ払いの顔を酷くしたような感じだけれど、飲酒の気配はどこにもない。

ただ、やけに野性くさい臭いが鼻についた。

「これは、肌が硬化してるのですわ。それに、奇形が生じています。耳、目、口」

麗奈に言われ、気絶している男の顔をよく観察した。

耳はお伽話の中に出て来るエルフのように尖っており、目は黄色く濁っており、およそ黒目にあたるものが存在していなかった。また、口は従来の私たちのそれよりは大きく裂けているように見えた。口腔がいやに赤黒い。何か、動物でもそのまま食べたかのような感じがして、私はようやくこの鼻につく臭いが、男の口臭であると気づいた。

「これは、魔法の弊害。きちんと、魔法を己の物にできなかった者の末路ですわ」

私が“鬼”と呼んでいたもの。麗奈が“怪奇”と呼んでいたもの。その正体は私たちと同じ　人間だった。

\* \* \* \*

蓮魔の二年生。この島に来て、二度目の秋が来た。そうは言っても、亜熱帯の気候である。

本土のような四季の変化を感じることはできない。

「なあー、良恵。なあって」

呼ばれて私は我に返った。休日の、女子寮談話室である。

「なに深刻な顔してんねん」

顔をあげると、仁美が心配そうな顔で覗きこんでいた。

「魔法でも失敗したか？ 私は失敗ばっかやで」

整った鼻に、少々やんちゃそうな目元が可愛い。ふと、魔法を失

敗して啞然としている仁美のイメージが過ぎる。瞬間、それは先日の鬼のような形相をした男のそれと被った。

私は慌ててそれを振り払った。

「うん、魔法は順調かな。麗奈ほどじゃないけど」

「ああ、神宮寺さんか。私の“本格派”クラスにも、噂は聞こえてるで。相当な使い手らしいやん」

本格派と呼ばれる仁美のクラスには相当な使い手が集まる。

皆この道の頂点を目指す者だ。しかし、私にはわからない。力を磨き続け、技を学び、知識を得て、その先に果たして何があるのだろうか。魔法の道を歩み続けたら、どこに行き着くのだろう。

「仁美は、魔法を学んでその先に何を求めるの？」

一瞬きよとんとし、首を傾げる。

「うーん。わからなくなってというのが、正直なところ。だいたい魔法ってちゅうもんがな、ふわっとしすぎとるねん。私のクラスに我統つてのがおるんよ。本人に自覚はないけど、魔力の才能の塊みたいなやつちゃで。ああいう奴らはなんか、生きる意味っていうんか？ 何かそういう大きなものを探しとる……上手く言えへんけど、そんな気がするわ。良恵んとこのクラスみたいに、それを将来に生かそうとかそういう方面のことまで頭が回らんのよ、きつと」

仁美はそう言つと、うんうん、と強く頷く。それは、自分で自分を納得させるかのようだった。

「私もきつと、そう。生きるのていっばいっばい何やるね。きつと、そういう人が魔法に毒されてしまふんやるな。そういう人が誰かを殺したり、自分を傷つけたりしてまう……」

そう言つて、談話室の机の上に誰かが広げたまま放置していた校内新聞を指さした。

そこには魔法の力に身を蝕まれた者の末路が掲載されていた。先日、私と麗奈が捕まえた男のことだ。

この学園内でいくつも暴行を働いてきているらしい。また、自分で自分の身体の部位を食していたとも掲載されている。しかしその

部位は直ぐに再生しているというから、もはや人知を越えている。死者が出なかったのが幸いであった。

けれども、不思議なことに、大きな問題であるようなその事件は、一般の新聞では全く報道されていなかった。取り上げるほどのことでもないというのだろうか。いや、あれはそんな次元の存在ではなかったように思う。

「その事件な、私もびっくりしたけどな……どこにでも転がった話なんや思うで。ただ、それを表ざたにしてしまうと、“魔法を使えない”人たちが、より私らのことを避けるようになる。怖がるようになる。せやから……国が、その方面の人が動いとるんちゃうかな……都市部では、警察絡みの組織が。学園では、国から要請された職員が。事実を揉み消すって言うたら感じ悪いけど、そないな動きはあると思うな、私は」

仁美は腕組みをしながら、真実を暴く探偵のように得意気に鼻を鳴らした。

「仁美は、この蓮華島にもそれはあると？」

「あるやるな。少なくとも、この規模やったら、学校側、医療機関、それから警察方面に役所方面」

指折り数える。

学校側はおそらく、多数存在しているだろう。医療機関側は、外からの要請があると断れないような雰囲気もあった。あそこは島の医療機関というよりは、蓮魔が設立されたのに併せて設置されたことから、どちらかという和学校側の施設とみなす方が正しいように思う。

警察方面と、役所方面　里見家と、神宮寺家。私が確かめるべきことではないのかもしれないけれど、知った名前に繋がり、思わず身震いする。

「ま、今のところ、私らにできるのは勉学に励むことやな。必要悪やる？　別に悪いことやないし、結果的に私らを守ってくれてんのよ」  
仁美はそう言うのと呑気に笑った。

「確かにその通りだけど、同じ魔法を扱う者としてあまりに悲しいよ……。あの男の人は望んであなかったの？ 望まずあなかったの？ 望んでないよね。誰も、あんな末路は望まないはずだよ。だから……」

だから、悲しい。

けれど、そんな言葉を吐くと、実家の両親は叱咤するだろう。両親は厳しかった。

「それとも、こう思うこと自体が弱いのかな。だめなのかな……」  
「良恵。わかるで、あんたの思ってること。でもな、魔法ってのはまだ出てきて数十年かそのらの未知の存在や。危険が常に隣り合わせにあるねん。だからこそ、分析して研究して、より安全なように生かす必要が出てくる。そして、これらの研究ができるのは魔法の道を進み続けた者だけや。特定の、力量と頭脳を持った、天才だけや。そういうのは、本格派の天才に任しとき。できひんヤツにはできひんりの生き方があるねん」

それって何だろう、と顔をあげたとき、良恵はもう立ち上がっていた。

「その生き方が、そのまま役目になるんよ。世の中、そんな風上手いこと成り立つとる。さ、私はちよつとクラスの子と買物物の約束しとるから行って来るわ。最近編入してきた子がおるねん。あんと同じ医療系やで。また紹介するわ！」

仁美は一方的に言うのと、るんるんと歌いながら去って行った。あえて明るく立ち去った。それは優しさだったのかもしれない。

家のことが頭を過ぎると、逃げたくなる。泣きたくなる。姉さまはどうだったのだろう。いつも毅然と両親と向かい合っていたように思う。姉さまの死について、両親は私に何も語らなかった。ただ、姉さまが死んだことだけを悔やんでいた。

休日のため、誰もいなくなった談話室で私はひとり嗚咽をこぼした。

『良恵……泣力ナイ』

馴染みのある声がする。カバンから顔を覗かせたのは、守護者のメデイである。

「ねえ、メデイ。姉さまは、怖くなかったのかな」

メデイは黙して、少しばかりそっぽを向いて。

『ソナナコト、ナイヨ……ダッテ、生キテイタンダカラ』

そう、呟いてカバンの中に潜り込んだ。

そうだ。誰だって、そうだ。だって、生きているのだから。

私は涙を拭いて、ごめんね、とカバンを優しく撫でた。そして、席を立つ。誰だって怖い。でも、それを乗り越えて、先へ進めるんだ。

行くべき場所は、決まっていた。

### 蓮華病院。

島の救急医療を担うこの病院は、休日であつても開いていたが、普段の診療は受け付けておらず、休診となっていた。あくまでも、時間外の緊急の患者のみ受け付けている形だ。

受付に向かおうとして、事務員が席をはずしていると気づいた。トイレか何か別の用件かどちらにせよ待つしかないと思つて、席に腰を下ろそうとしたところ、診察室のドアが開いた。

顔を覗かせたのは、白衣を着た二十代後半くらいの男性だった。

「ん、あ。キミはあのときの……」

蓮華病院に二人いるという常勤ドクターのうちの一人である。帰国子女の男性ドクターで、専門は脳神経外科とうわさに聞いている。私と麗奈が、例の異形となった男を引き渡した相手であつた。また、昨年の槍真の主治医でもある。治療に関しては厳しかったと槍真は愚痴をこぼしていたが、私には気さくそうな良い人に見えた。

「どうしたの、今日は？」

「あの……例の、鬼の一件。どうなったのかなつて思つて……」

男は、ああ、と少し表情を変える。

「それは、あなたたちが関与するところではないのではありません

か。個人情報もあります」

「しかし、引渡したのは私たちです。その後、彼がどうなったのか知る権利くらいあるはずです」

言っ、校内新聞を男に突きつける。

男は目を細め、観念したように頷いた。

「わかった。ここじゃ何ですから、奥へ。説明しましょう」

通された先は電気を消した廊下の先である。歩いてきた廊下を振り返ると、入り口が小さく見えている。暗い分、正面玄関のガラス扉から差し込む日差しが目立った。

「休日なので、使わないフロアは節電してね」

そう言っ、扉を開く。

プレートには、「資料室」とだけ書いてあつたが、室内は資料を置いておるような雰囲気はなく、むしろこれは、留置人の面会室に似ていた。

今、扉をくぐつたスペースは院内と同じ様式で作られて、デスクが二つほど置かれており、パソコンが設置されている。何かの記録用のものだろう。そして、そこをガラスで区切つて、妙な金属製の椅子や毛布も何も用意されていないベッドが置かれていた。今は、誰も入つていない。

こつん、とガラスに指を当ててみる。強化ガラスだろうか。指先の感覚だけではわからなかつた。

「ちょうど、本土への引渡しが終わった後だね。ご覧の通り、からっぽだ」

言っ、向き直る。声の静かさと、口調の変化が不気味さを増していた。これはきつと、何かがある。

インテリ眼鏡がとても似合う、細身の男性。クラスの女子なんかが見たら、「めがね男子！」とでも喜ぶのかもしれないが、今はそんな気分にもなれない。

「さて、改めて自己紹介しよう。私の名前はレンと言っ」

それは、苗字だろうか。それとも下の名だろうか。耳で音を聞い



ただけでは判断ができなかった。

私の疑問を見越して、名刺を渡してくる。

「ああ、帰国子女の悪い癖が出たな。名は廉<sup>れん</sup>、氏は蓮華<sup>れんげ</sup>。蓮華家の末っ子だ」

まあすぐに忘れる名前だがな、と廉と名乗った男は不敵に微笑み、瞬間、私は身の危険を感じて後ろへ飛びのいた。

「蓮華家の……人？」

「そんなに警戒しないでくれていい。手荒にはしないし、一度は真実を教えてから、そのことに関する記憶だけごっそり抜いてしまおうっていただけなのだから、“今”のきみの要望は叶えられるだろう？ それを未来へ持ち越すことはできないが、未来のきみはそのことで悩むわけではないのだから、誰も損をしない。困らない。話だけでも聞いてみたらどうかね」

そう言つて、廉は後ろ手に扉を施錠した。廉の背後の扉が外界との唯一の、出入り口。

こうなると、私はもう成す術もなかった。

「あと、手荷物はすべて預かっておこう。抵抗すれば、魔法を打つ。私は蓮華家の人間だ。魔法技術専門学校のトップである蓮華家の人間だ。この意味をわかっていて抵抗するなら……」

私は本を開いてしか、守護者のメデイの力を借りられない。

対する目前の男は、守護者から全てを継いだ継承者である。しかも、魔道の天才と呼ばれる蓮華家の人間だ。ここで抵抗するよりは、時間を置き、体制が変わることを祈るしかない。相手が情報を開示しようというのだから、ここは甘えておくに越したこともない。

「さて……」

言った瞬間、施錠した扉が開けられた。

「……え？」

さっきまでシリアスな雰囲気だった廉が間の抜けた声をあげる。

これには、私も廉と同様に驚いた。いずれ助けは来てくれるかもしれない、それまで会話を引き伸ばそうと思っていたのに、これだ

け早く結果が出てしまうとは。あまりに早すぎて、詳しいことも何も聞けないじゃないか。

「なにが、“え”ですか、勝手に私用に使用して！ あら、これなかなか面白いですねー。“私用に使用”って、あははー」

乗り込んだできたのは、サラ院長先生である。手にはカギをぶらぶらと遊ばせている。その様子があまりに幼く、やはり私と同一年くらいにしか見えない。

そして、サラ院長に続いて入ってきたのは、私の待ち人　麗奈だった。

私の休日は、私のアルバイト先の喫茶店『n i g h t a s t a r』で麗奈と待ち合わせることから始める。今日はここに来ることになっていたので、一言メールだけしておいたのだ。聡明な麗奈のことだから、先日の事件との絡みを考えて行動に移したのだろう。

「神宮寺さんから聞きましたよー。蓮華センセ、いたいけな女子高生を連れ込んで、カギをかけていたなんてえ、そんな性癖あったんですねえ？　許婚に言いますよ？　あ、もう許婚いますねえ、ここに」

サラ院長先生は相変わらず間延びした声でくすくす笑い、麗奈の後ろに引っ込んだ。

自然と、腕組みした麗奈が姿を表す形になる。

「れ、麗奈……」

「サラ院長先生に事情を話して、マスターキーを持ってきてもらったというわけですね。良恵さんがあまりに遅かったのです。ここに来るということは、あなたと話すはずですよものね？」

色々と話しているが、私は実のところ、ある一点だけしか意識になかった。

「え、てか、え……いいなずけ？　と、年の差かつぶる？」

「照れくさくて言えなかったのです。廉は私のフィアンセですね。将来の。家が決めたっていうこともあるけれど、私と彼は相思相愛ですの」

廉の顔を私はおそるおそる窺う。年上の、素敵なめがね男子。インテリ。できる男。

こんな人と婚約　私は、もう麗奈にすべて敗北したことを悟った。そういえば、蓮華病院のドクターの話になると、麗奈が含まない方が多かったです。……と今更ながらに気づく。

「だから、安心してください、良恵さん。彼は悪人じゃないです。ただ、この島ひいては世の中のシステムをあまり不特定多数に知られたくないだけです」

麗奈は、神宮寺家の女はそう言って、“鬼”のことを話し始めた。

魔法とは、人間の脳のある一部を活性化して用いるという。いわゆる、サイコネシスといった超能力の類に限りなく近いものであるとされている。魔法　魔の法。神の道である神道に対し、魔の道である「魔道」から転じたもの。魔道、人の理から離れた道。

科学的には、あるいは医学的には、そして生物学的にははっきりと解明されていない。要するにわからないことだらけなのだ。起源はわからない。仕組みもわからない。しかし、その魔法と共存する方法は、魔法省が設置以来、模索し続けている。その答えのひとつが、魔法技術専門学校であり、今の世の中での魔法人のあり方なのである。

だから、今回のような事例は珍しくは無いのだ。魔法の力に溺れ、魔の力が身体の組織を蝕んだ事例は、私たちの目に届かないだけで数多存在している。

「麗奈……教えていいのかい？」

廉がおそるおそる言う。さっきまでの怖い雰囲気はなかった。私に対して、警戒を解いてくれたのだろう。

「いいのです。良恵さんのような方に知っておいてもらわなきゃ、私たちもいずれ大人になるうちに、初心を忘れ、今の魔法省の人たちようになってしまうから」

よくわからないことを言う。それよりももっと、気になることが

あるというのに。

「ああいう人たちを……どうするの？」  
たずねた。

昨日の男の人だけではない。もっとたくさん人間が魔法を使えるのだ。そういう人たちの中に、あんな風になってしまう人もまだいるのだ。

「本土に送ります。魔法省の直属の研究施設に。そこで様子を見る  
そうですね」

「様子を見るって……真実を隠して？」

「魔法は……常に危険と紙一重です。その力に飲まれてしまった者を救う術は今の日本にはありません。一時的に保護し、研究対象とするしかないのですわ」

「その人たちはどうなるの？」

「わかりません」

「どういう研究が行われているの？」

「わかりません」

麗奈はただ首を振る。

わからないことだらけ。そんな曖昧でいいのか。

「麗奈はまだきみと同じ年の学生なんだ。わからなくても仕方ない」

「じゃあ、廉さんは？」

廉は絶句し、口を閉ざした。

もういい加減うんざりだった。誰も知らない。何がいいかもわからない。それなのに、人の言いなりになるこの人たちはどこがおかしい。

「誰も、わからないんでしょう？ そんなの変じゃない！ 麗奈は何も知らないのに、役所勤めのお父さんの命令であの男の人を捕まえて引き渡したの？ 神宮寺家って何なの？ そんなにえらいの！？」

「良恵さん……私は」

「言い訳は聞きたくない！」

そんな麗奈の一面、見たくなかった。そんな世間の裏、知りたく

もなかった。あまりに、ひどすぎる。

私は麗奈を押しつけ、後ろにいたサラ院長先生を避けて、廊下を走った。

事務員さんが不思議そうな顔をしていたが、私は無視して走った。誰も知らない。世界の不条理を。汚い手を。だから、私は何かから逃げ続けるように病院を飛び出し、走り続けた。

気づけば、なぜか島の外れの墓地群に向かっていた。誰もいないところに自然と向かっていたのだと思う。去年、槍真の父が潜んでいた古い寺院の跡地が見え、走るのをやめて、その入り口に腰を下ろした。体育座りをして、ひざ小僧におでこをつける。

一年ぶりにこの場所に来たけど、かわらず寂しい場所だった。波の音だけが遠くに聴こえる。

この人気のない場所を目指して、去年、麗奈は走っていて、私はそれを追いかけていた。あれも確か、“鬼”が出たからという理由だった。けれど、結局それは槍真のお父さんで……あれ、違う。槍真のお父さんには私が会ったのだ。そして、そのとき麗奈はそこにいなかった。やはり、あるときも麗奈は別の“鬼”を追いかけていたのだ。あるときも、私には黙ったまま、私のことは蚊帳の外にして。

声をあげて、泣いた。どうせ誰も聞いていないのだから、声を殺す必要なんかもない。

「麗奈のバカ、バカバカバカ！」

叫んだ。

叫びながら、何に怒っているのかよくわからなくなってきた。麗奈に対して？ 世の中に対して？ そのどちらでもないような気がした。魔法という人外のはずれくじを引かされた、自分の理不尽さ。また、それによって、死を選ばざるを得なかった姉さまのことが不条理で、納得いかなくて、私はひたすらに涙を流し続けた。

ガサリ、音が聞こえたような気がした。

耳を澄ませてみる。近くではないけれど、微かではあるけれど、波音に紛れて確かに何かの音が聞こえる。それは自然のものではないような気がした。何者かが、立てている音。

方角的に墓地の中のように感じた。寺院の裏手が覗けるところまで壁伝いに移動する。

大泣きして叫んでいたのを誰かに聞かれた。もしかしたら、見られていた。羞恥心が勝り、私はそこに居る者の正体を知ろうとした。知っている顔でないことを祈りながら、そっと顔を出す。

ガサガサガサ。

墓地に見えたのは檻褸をまとった女だった。ここから距離が少しある。女は墓に向かってしゃがみこんでいた。拜んでいるのだろうか。誰か親しい人の墓なのかもしれない。

……いや。

違っていた。女は墓の土の部分はずっと素手で掘っていたのだ。やがて、何かを見つけ取り出す。それは、骨壺だった。その中身に手を入れて、何やらがさごそしている。ちょうど、私の位置からは背中からしか見えないが、確かにその生々しい音は聞こえた。

ガリガリガリ、と乾いた音がした。齧っているのだ。人骨を。骨壺になっても残っている部位というと、大腿骨のあたりだろう。しかし、火葬された骨はずっと齧り続けていられるほど硬くは無い。すぐに租借し終わると、女は次々と人骨を食し始めた。

狂っている。思わず、後ずさりし、落ちていた木切れを踏んでしまった。

乾いた音が鳴り、女はこちらを振り返った。

同じであった。先日の温泉で見た、男と。女はこちらを見ると、口を耳元まで裂くようにして赤い口腔を覗かせる。笑っているのだ、と思う。同時に私は、腰を抜かしてしまった。立ち上がれない。

女はゆったりとこちらへ歩みを進めてくる。私は尻餅をついたまま、後ずさる。怖い。立ち上がれない。逃げなきゃ。頭の中を、思

考がループする。女が何か、ひどい高音を上げ、走り始めた。みるみる、その姿が大きくなってくる。近づいてくる。あまりに速すぎる。

近づいて気づいたが、女の着ているそれは襪褌ではない。私の着ている制服と同じようなタイプのものであった。

「あ、あ、あああ」

気づいてしまい、声を漏らした。

何年前のものかはわからない。けれど、女の着るそれは私の着ている規定の制服と同じものだった。

かつては、美しかっただろう十代の顔はそこにはない。今あるのは、青白い肌に気味の悪い顔を浮かべた鬼の顔。口は耳まで裂け、その眼は黄土色に濁っている。耳は尖り、おまけに頭頂部には皮膚を貫き、髪を掻き分けて、骨のようなものが飛び出していた。角、と呼ぶにはあまりにも骨に酷似したそれは、元は人体の一部であったことを否が応でも思い知らせた。

女が手を振った。私が着ていた休日用の衣服は、この気候に合わせた薄手のものだった。易々とその生地は裂け、私の肌に赤い血の線を作った。

「ひ……」

声が漏れる。

怯える私を見て女はケタケタ笑い、鋭く尖った爪先を天へと伸ばした。口の中でぶつぶつと呟いている。呟いているわけではなく、これは 詠唱だ。魔法を扱うための媒体。人知を越えた力を使うために、集中力を高めるために用いる手法。一種の、儀式。私たちの慣れ親しんだ、様式。

暗雲が、女の頭上に集まり始める。

「ま、魔法……？」

呟くと同時に、女が目が細める

「うるせえよ、まな板」

声は頭上から聞こえた。正確には私の背中の寺院の屋根から。

女の詠唱が完成し、暗雲から雷が放たれる。それは、目の前に飛び降りた男の手にした木刀に向かって一直線に落ちた。それは確かに、雷ではない。だが、限りなく似たものであることには間違いない。

なのに、私にはその衝撃は伝わらず、目前の男の身体で止まっていた。いや、止まっていたのかもわからない。男は雷に撃たれても微動だにしなかった。何らかの防御魔法を張ったのだろう。

「里見守、参上ってか？ へっ、いいタイミングだったか」  
里見はそう言うと、私を一瞥する。

「無い胸みせてる暇あったら、守護者のひとつでも見せてやれよな」  
言われて、私は肩かけカバンを胸元に寄せる。そして、カバンの中のメデイのことを思い出した。

守護者は、行使する契約者の意思なくしては動けない。私は恐怖のあまり、メデイと本の存在をすっかり忘れてしまっていたのだ。

「いまさら、遅えよ。だが、それでいい。俺が来た。俺が来たということは、もう全てが終わる。なア、そうだろ？ ヒヤハハ」

里見は喜色めいた笑みを浮かべる。

「おイー？ その“怪奇”さんよオ。里見守は、残念ながら里見家や神宮寺ほど優しくはねエぞ？」

里見は木刀を振るう。

「あんま魔法は使いたくないんだけどなア。“怪奇”相手なら、イブンだろ。たまには、いいよな？」

「いいよな、と里見はどこかへ問いかけるように呟いた。その目が一瞬だけ悲しげに、切なげに見えた。眼前の凶悪な爆弾のような男もこういう顔を見せたことに驚いたが、それは一寸で消えた。

「オラッ！」

里見は短く叫ぶと同時に、木刀を地面に突き刺し、それを地表へ走らせた。切っ先が宙へ舞うと同時に、眩い光の剣筋が私の前に居た女にぶつかり、女は甲高い悲鳴を上げて吹き飛んだ。

「雷のお返しだバカヤロ。焦げる側の気持ちもわかったか」



木刀を肩にのせ、女の元へ歩み寄る。

もはや、動く気配すらない。詠唱すら無しであった。里見は何も無しに自然な仕草の中で魔法を交えたのだ。それは相当な技量を意味する。どんな環境にいても、瞬時に集中力を高めることが里見には出来るということになる。

里見は倒れている女に近づき、木刀で殴り始めた。一撃受ける度に女は震えた。鈍い音が響く度に口からどす黒い血を流し、跳ねる。ドス、ビクン。ドス、ビクン。それは規則正しくて、あまりに里見が淡々と行なうので、私は呆然と見入ってしまった。我に返る。

「な、何しているの!? やめてあげて!」

「うるせエ」

里見は木刀を振り上げる手を止めない。

「やめてって!」

「うるせエ! こうなつちまったらもうお終いだろっが!」

里見はドスを利かせた声を張り上げる。

一瞬怖気づいてしまうが、私は里見の右腕にしがみついた。

「やめて、やめてあげてよ……」

里見は戸惑いを瞳に浮かべる。また、さっきの顔だ、と思った。

泣きそうな、切なそうな。

私から目を逸らし、里見は足元の女を睨む。

「もう、数年前にそいつは死んでんだよ。生ける屍に近い状態になって、今まで動いてた。オレはそれを止めただけだ」

「でも、まだ、可能性はあるかもしれないじゃない……」

「あるかもしれないエよ。だがな、小娘。あるとしたら、研究所に送ってサンプルデータを取って、弄くりまわして、万に一つの可能性でしかねエ。はっきり言って、国のやることだ。胡散臭いことこの上ねエだろ。今の魔法省だってな、日本政府の中で動いてんだよ。色々な利害関係の中だな」

里見はしゃがみこみ、私の顎を掴んで顔を近づける。黒い眼の向こうに浮かんでいるのは、何だろっ。悲しみか、怒りか。

「神宮寺の小娘や、蓮華の末っ子ぼつちゃん。あいつらのやっていることが、それだ。それか、オレのようにモルモットになる前に楽にしてやるか。どっちかしかねエんだよ」

二択しかない　そう、これは単純な二択問題だったのだ。

麗奈や廉のやることを私は否定した。否定した先には、里見の言う道しか残らない。それが果たして、善なのだろうか。

「ひとつ言っておくがな、これは里見家のやり方じゃねエ。オレのやり方だ。神宮寺家も、里見家も、蓮華家も。すべて、国の、学園の思うままに動いている。あいつらにしたって、好きでやっているわけじゃない。だけどな、他にどうすりゃいいのか、あいつらもわかんねえんだよ」

そして、付け加えた。消え入りそうな声で。独白めいた科白を。

「オレだつてな、やりたかねエよ……だけどな、こんなになるのを嫌がったヤツだつていんだよ……」

里見の声が風に消え入りそうな瞬間　怒声が聞こえた。

「こ、こここの強姦魔め！」

馴染みのあるクラスメイトの声だった。

「忍法、着地の術！」

とうつ、とまたも頭上から、いや、背後の寺院の屋上から、人影が舞い降りる。

現代の忍　あほの子、槍真だ。

「アアン？　誰が強姦魔？」

「黙れ、レイプマン！　吉田良恵さんに狼藉を働こうとしたこと、見ればわかる！」

「あ？」

里見は私と視線をあわせ、腰をかかめていた。その視線を私の顔から胸元へと下ろす。私は慌てて、またカバンで隠した。

「ああ、これか」

「ああ、それだ。ちょっと無いけど、かなり残念なまな板だけど、女の子には代わりない！　一応な！」

腹の立つ科白を言って、槍真は「ごそごそと巻物を取り出し、魔法を唱えるべく守護者の忍者を出そうとする。

しかし、しゃがんだままの里見に木刀で掃われた。

「あ」

巻物は手の届かないところへ転がり、あたふた焦り出す槍真。

私はカバンから本を取り出しながら、微笑む。カバンでしっかり胸はガードしたまま。

「槍真。里見は、私を助けてくれただけで、これは別にそういうことじゃないよ」

「あ、そうなの？ なら、いいんだけど……」

「それで。誰が、まな板だつて？ 無い乳？ マイナスAカップだつて？ 胸がサハラ砂漠？」

「え、いや、そんなにたくさん言ってない……」

私はメデイを呼び出し、彼女の住処である本の医薬品集から適切な語句を探す。下剤効果……これでいいか。

『マグミット！』

瞬間、槍真は腹部を抑える。里見がメデイを見て、それから槍真を見て、目を細める。

「あ、あれ、急にお腹が痛くなって……うっ」

そのまま槍真は走り始めた。間に合えばいいね。

「おい、忘れもん」

里見が地面に落ちていた巻物を走り去る槍真に向かって放る。

「お、覚えてるよ！」

キャッチすると、悪役の三下のような捨て台詞を里見に投げつけ、走り去った。

「……おまえ、あれは何気にエゲつねエな」

その姿が小さくなるのを確認して、里見は大きいため息をついた。

「ふう、興がそがれたな。お前帰れよ」

「え」

「今の話はひとまず保留だ。どっちにしろ、コレはもう動かないか

ら、もう言い合ってたって仕方が無いだろ」

里見が顎で示した先には、先ほどの女が転がっていた。

「後はこっちで何とかしておく。幸い、里見家は寺院の少数を覗けば、警察方面に多く人を輩出している家柄だ。オレが頭下げたら何とかなるだろ。どっちにせよ、曝し者にはしねエよ。それから……」

「それから？」

どこか納得のいかない私に、「オレは一応、寺の家系だから」と付け加えた。

「オレがここに来たのは神宮寺の小娘から連絡があったからだ。一応荒れ果てるけど、ここ、オレの隠れ家だから。電話と電気、通ってるし」

里見は立ち上がって、荒れ果てた寺院を指さす。

「たまたま近場に居たからすぐ来れたけど、この島には人の入り込めないエリアもまだ半分以上残っている。今回のような件もあるし、あんま人の居ないところには出てくんよ。もう立てるだろ？」

里見が差し出した手に、私は頷き、引っ張ってもらうようにして立ち上がる。

「あの、麗奈は……」

「オレは特に何も聞いてねエよ。言いたいことあんなら言ってくれば？」

そう言うと、羽織っていた黒いマントのようなものを放り投げた。「あ、ありがとう」

胸元を隠すように羽織ると、早く行け、と里見は手を振って促した。

歩き始め、振り返る。里見は背中を向けてしゃがんでいた。女だったモノの屍のあるところだった。里見がそれをどうするのかかわからない。「晒し者にしない」と言っていたから、闇に葬るつもりだろう。それができるだけの力が、里見家にはある。

私は、里見が女に手を合わせているのに気づいた。「オレは寺の家系だから」と言っていた意味もわかった。本当は、里見もそん

なことをしたくないのだ。きつと。

誰だつて、最良の手はわからない。国や家のしがらみの中でもがいている。里見は 里見守は、里見家という枠を外れて好き勝手やっているように見えた。しかし、それも難しいことなのだろう。不良というレッテルを貼られても、己のやり方でこの島を守っているとしていられる。彼の名前の通り、「守」ろうとしているのだ。

麗奈だつてそうだ。家のやり方に、ただ従っているだけじゃない。家に決められた結婚。家に決められた将来。家に決められた規則。それらをただ従順に守っているわけではないと思う。そうでなければ 温泉の一件に、私を巻き込んだりなんてしない。

ゆつくり歩いてきた足は次第に速くなり、私は、喫茶『night  
t a s t a r』へと走った。

\* \* \* \*

喫茶店の状態の『night a s t a r』は相変わらず、お客さんは居なかった。

ほとんどの収益を夜のバーであげているということだが、私は未成年な上に、寮の門限もあるから、昼間しかアルバイトができない。そんな私が居る意味はさほどなかった。

そのため、本来支払ってくれるということである給料を私は辞退し、その分、料理を教えてくれとお願ひしたのだが、経営者である内藤さんも引き下がらず、折衷案である、給料の半額を料理の授業料として納めるという形になっている。

「やあ、良恵ちゃん」

内藤さんは挨拶だけすると、店の裏側へ引つ込んだ。

店内にお客さんは居ない 麗奈ひとりを見ている。私は麗奈の向かいに座った。

「良恵さん……どうしたんですか、その服」

「うん、ちょっと」

心配そうに尋ねる麗奈に、私は墓地であった一件を正直に話しておいた。

女の“怪奇”のこと。里見に助けられたこと。槍真がしゃしゃり出た件は特に関係ないけど、一応言っておいた。

「そう……あの男が」

「うん。あのね、麗奈」

「なんででしょう？」

怒った様子もなく、優しい表情を崩さずに奥ゆかしく首を傾げる麗奈。まるで、聖母のような優しさが滲み出ていた。こんな人に、いや、これだけ大切な友達に私はひどいことを言っただ。

自然と目元に涙が滲んだ。

「あの、麗奈……ごめんね」

いよいよ涙がこぼれた。ごめんね、ごめんね。私は手でそれを拭いながら、謝り続けた。

麗奈はそんな私の頭を胸元に抱き寄せると、優しくぼんぼんと撫でるようにたたいた。なんて、柔らかい優しさなのだろう。私はそのあたたかさに埋もれ、しばし、泣き続けた。

「ん。もう大丈夫」

麗奈から顔を離し、笑ってみせる。

「そう。けれど、無事で良かったですわ。里見守がすぐ駆けつけられる場所だったのも、良かったですわ」

「里見って、結局のところ、何者なの？ あの鬼みたいなののこと、詳しくたみたいだけど……」

麗奈は、長くなるけど、と前置きをして口を開いた。

「里見家は、神宮寺家と対をなす、この島の昔からの家。宗教的意味合いであれば、この島の土着のものになります。神宮寺よりも遙か古い歴史を持つ家柄ですの。昔から、“里を見る”役を担ってきたと言います。本土で伝わる、京都の阿部清明と似ている……と言えはわかりやすいでしょうか？ “怪奇”は昔もあつたと言われて

いますが、それが“現実のもの”となつたのはやはり戦後になつてからと聞きます。もう良恵さんもご存知ですわね。魔法に負けた者の末路、あの鬼のような人々です」

「魔法に、負けた者……」

「神宮寺家は里見家より幾分か後に現れた一族です。キリスト教が日本に伝わった頃ですわ。里見家とは時に対立し、時に手を取り、蓮華家を支えてまいりました。そう、この蓮華家こそが、この島最古の一族です」

島の歴史の細部はわからなかったけれど、この御三家がどれほど凄いのかは理解できた。

「里見家も、神宮寺家も、そして蓮華家も手段は違えど、同じ目的のために動きます。ただ、里見守だけはそのやり方に反発していませんわ。思うところがあるのでしよう」

魔法が発生した後も、それぞれは魔法の有用性を考え、優れたものを親族に取り込み続けたのだという。麗奈の言った、同じ目的のために。

それは今でも続いており、麗奈と廉の婚姻もそのため定められているのだと言つた。

「悪しき因習、と言つべきかもしれませんが、私と廉に限ってはたまたま恋仲だったのです。私は幼い頃から彼を慕っておりまして、彼もまたそうでした。なので、両家の決めた事柄について反抗する必要はありませんでした」

けれど、と麗奈は顔を上げた。

「将来の道については、私たちの決めること……。今の神宮寺家は行政側に収まるのが正しいとされています。今のこの時代の、魔法に関する有力な家柄はそれぞれ、立ち位置が定められているのです。司法に相応しい家柄の出は、自然と本土の有用なエリアに配置されます。行政も然り、警察も然り。すべて、決められた位置に、魔法省の望むままに裏で進められております」

魔法を扱えるキャリア。それはどの部門でもほしがっている人材

である。一般の人が忌避しないように、魔法の危険性を隠すのも、これらを容易くさせるためだった。そう聞かされて、私は例の報道の一件を考えた。

校内新聞のような信憑性の低いとみなされるものは好き勝手に書けるが、世の中に出るようなものについては即規制されるのである。それもきつと、報道側に魔法を扱える人材が居て、決定権を握っているということに他ならない。

「魔法とは、それだけの強制力を持っています。人に余りある力ですから、集まれば脅威になります。今はまだ、これを悪い方向へ用いようというものはおりません。それだけの力を束ねられる存在がないからです。だけど、着々と力は一定の方向へ集まりつつある……」

私の次元を遥かに超えた話だった。

それを目の前の、同じ年の少女は平然と話している。

「私は家の言いなりになりません」

麗奈は、きつぱりと言い切った。

「親は私を高卒で地方公務員にしようとしております。ですが、私は大学へ進学し、魔法省に入ります。そうして、中から改革を進めていきます」

夢あるいは妄想だと思われても仕方が無いほどの、途方も無いエリートへの道である。

「蓮華廉は、今あそこでスキルを磨き、ゆくゆくは魔法省直属の研究機関へ入ると言っています。蓮華家の人間の言うことですから、有言実行でしょう。私たちは、いま二人です。ですが、必ず変えてみせます」

麗奈は断言してみせた。

その目を見ても迷いはなく、決して嘘や冗談を言っている目ではないことはよくわかった。

「ねえ、麗奈……ひとつだけ教えてほしいの」

ダメだ、とか、無理だよ、とか。



言葉にするのは簡単だけど、口を挟むことはできない何かがあるにはあった。そして、麗奈は口にしただけのことをやってのける目をしていた。齢十七の少女にはない、強い眼差しがそこにはあった。「なんで、私に話したの？ 何で、私に“怪奇”の存在を教えるようなシチュエーションを作ったの？」

麗奈はうつむいて、ぼそぼそと言った。

「……私の生き様を、誰かに知っていてほしかったから。そして、私が道を踏み外したときに止めてほしかったから」

そして、続ける。

「もしくは……不安だったから、大切な誰かに、背中を押してほしかったから」

顔をあげる。

「今は、それだけじゃダメでしょうか？ 高校時代の、今の友達こそかけがえのないものだと思うのです。私の進む道は、嘘や欺瞞だらけの世界でしょう。そこで得られる人たちは、仮に仲間と呼ばれるものであっても、きつとどこかに駆け引きが存在しています。何の損得もなく信用できるのは、あなたや服部君のような、“今この瞬間”と一緒に過ごす者だけなんです」

私にとって、と麗奈は微笑んだ。

「神宮寺家だつて、嘘や騙しあいの世界。肉親であつたつて、信じられません。私にとって。家族と呼べるのは、廉や貴方みたいな人だけなんですよ」

家の言いなりにはならない。進むべき道を歩み続ける。

私は麗奈のことを一瞬でも勘違いしてしまった。今すぐに綺麗事を並べるのは簡単だが、私の言つてたこと、なじつていたことはこれっぽちも現実を理解していない者の浅はかな言葉だった。

里見は里見なりに、“怪奇”と化してしまった人たちを弔っている。これは将来に期待できず、今を解決する手段だ。麗奈たちは、今の流れに耐え、未来に希望を託している。その分、不確定だ。

どちらが良いか。どちらに加わるべきか。きつと、そのどちらも

無理だろう。

「良恵さんは、今のままで居てください。魔法が怖くないものだと、人々に教えてあげてください。それから、私たちがこれから歩むことのできない、良恵さんの道を歩んでください。お姉さんの分も、歩んでください。私たちは」

いつまでも、友達であり家族です。

神宮寺麗奈は、私に、ひとつの未来を託した。

今はまだ同じ道を歩み続けているけれど、いずれ道をわかつ友のことを考えて、私は思わず涙した。けれど、不安はない。なぜなら、麗奈の隣には、相思相愛の未来の夫がいるのだから。蓮華家の、人間が。

姉さま。私には、ひとつの道が見えてきました。けれども、それはひとつの壁を越えなければなりません。

姉さま。私は、その壁と向き合うことができるのでしょうか。その道を越えた先に、私の未来はあるような気がします。

蓮華島に来て、あと少しで三年目となる。

長いようで、短い。答えを出す運命の日はそこまで迫っている。

私は　　いよいよ、姉さまの年に追いつくのだ。

### 第三章 『決意』

私はそんな大事なことを、忘れていたんだ。

\* \* \* \*

長い、夢を見た。

それはどこか、別の世界のことのように。それでもそれは、私が描いた将来で。私はそこで、管理栄養士として働いていた。どこかの病院の、栄養科の責任者だった。

不思議なことに、魔法の存在しない世界だった。そこでは魔法が無いことが当たり前で、私もそれを当たり前前に受け入れていて。目が覚めた今も、「ああ、魔法が存在しないこともあるんだな」と寝ぼけた頭で考えていた。

「お目覚めかな？」

私はすぐに現実に返り、アンティークな調度品で統一された店内を見回した。お客さんは今日も居ない。

「内藤さん。すみません……」

「最近テストだっただろう。疲れているんだよ。今日は気晴らしに街に出てみたら？」

「でも……」

「俺も今日はちょっと用事があつてね。今から閉めようと思うんだ」  
そういうことなら、と私はありがたく休みを頂戴することに決める。

店の奥の更衣スペースを借りて、慣れた制服に袖を通す。もうこの制服を着て、三回目の春だった。妙な夢を見たせいとかどこか感慨深くなつて、更衣室の姿見の鏡の前で自分を映してポーズを決めてみる。ちよつとファッション誌を気取つて、ポツケに手を入れたりして。

新入生だった頃、学校へ行く前にこうやってポーズを決めていたことを思い出す。あの頃は人の目が気になって仕方なくて、変なところが無いか逐一チェックしていたっけ。

「あれ」

ポツケの右手が何かざらざらしたものに触れた。

何度か、洗っているためもろもろになっているそれを広げてみる。それは、一年生の頃　　槍真が里見に骨折させられた騒動の際にもらった居残り証明書だった。よく今まで気づかなかったものだと思分の無頓着さに呆れると同時に、よくこの状態で保っていたなと感心した。魔法技術専門学校では、この手の証明書の類は魔法訓練などの兼ね合いもあり、一定の防水効果の期待できる用紙で作成されているからそのせいかもしれない。

けれど、さすがにぼろぼろだった。苦笑しながら、それを開き私は思わず視線を止めた。

#### 居残り証明書。

そこに対象となる生徒の名前が書かれている。それは私の名前ではなく　　姉さまの名前だった。

\*

三度目の春を迎えた。例によって、桜の咲かない亜熱帯の蓮華島の春。

風物詩が無いと、どこかしっくり来ないのはやはり私が本土の間だからだろう。考えながら、放課後の街を歩く。おおよその施設は見慣れた。大体利用する場所は、港から学校までの大通りに集中しているので、何処に何があるのかは三年生ならば皆知っていることだろう。

入学当初と変わらない景色　　に見える。

けれど、最近はこちらとおかしな噂が流れている。鬼が度々、目

撃される。と。槍真のお父さんの一件は除外するにしても、昨年私が“鬼”と遭遇して以来、多くはないが度々目撃されているのだという。私は運が良いのか、あの一件以来は何とも遭遇していないが、麗奈などはまた何らか関わっているのかもしれない。けれど、私はこの一件については麗奈が言わない限りは触れないようにしていた。

世の中ではまだ知られていないことなのだ。廉もそれを必死に隠そうとしていたし、私が変に関わると二人の描いている将来像がぶれてしまうかもしれない。それが怖かった。

「おい、やめろ」

「ンだよ？ 文句あんのかよ？」

繁華街の一角を歩いてきたときだった。

聞き覚えのある声が、何やら揉め事に介入している。

「新入生いびりは恥ずかしいぞ！ お前らみたいなのがいるから、入学早々に入院になるような可哀想なヤツが出て来るんだ！」

その声を聞いて、おそらくは二年生だろうと思われる不良が、「こ、こいつまさか……」と上擦った声をあげる。

「その、まさかだ。服部槍真。蓮華魔法技術専門学校三年二組、大城クラスだ！」

私は慌てて、声のしている方へ走っていく。

ゲームセンターの裏手、人気の無い小さな通りに、不良が三人ばかり見えた。それと対峙するのは背後に下級生の男の子を庇う槍真である。

私は問題があれば、すぐにゲームセンター内の店員さんに助けを呼べるように心構えをしつつ、その動向を見守った。三年になっただけかなり実力をつけた槍真なら、たいてい何も問題なく突破できるだろう。魔法と忍法の融合と、本人は言っているが、どこまでが魔法でどこからか忍法なのかわからないくらいに、槍真は上手くこれらを使い分ける。

「ま、まじかよ……入学早々、里見さんにボコられて入院した服部じゃん……」

不良三人は顔を見合わせ、小声で何やら相談し始めた。私にはその内容がはつきりと聞こえてきた。

ひそひそ。それまじかよ。めっちゃかわいそうじゃん。

てか、里見さんとあいつって……

関わり合いにならない方がよくね？

この間、数十秒。

相談が終わり、不良たちは槍真に向き直る。

「……今日のところは勘弁してやる」

言って、ぞろぞろと去っていく。

それを腕組みして睨みつける槍真。完全にいなくなったのを確認し、ふん、と鼻を鳴らす。

「雑魚め」

陰に隠れていた私には気づかず、不良はずらざらと通り過ぎて行った。一部始終が終わったのを確認して、私は槍真の前に姿を見せた。

「ああ、良恵ちゃん。見てくれていたのは気づいてたよ！ 助け呼ぼうとしてくれてたんだろうけど、それは必要なかったね。あいつら、僕にびびってたからな」

槍真は決して、びびられてはいなかった。むしろ、舐められていた。こいつは同情で助けられたことも気づいていないのだろうか……と、呆れる。

「あ、ありがとう……僕はこれで……」

男の子は、そのまま逃げるように去ろうとする。

「待ってよ」

槍真はその子の肩を掴み、低い声で呼び止めた。

「新人生がひとりで、何でこんなところに居るのかな？ それから、

ポケットの中のものを出したらどうか」

カツアゲかと思った。槍真がポケットに手を突っ込むと、妙な力プセルが出てきた。医薬品、だろっか。

それにしても、新入生の様子がおかしい。怯えたように震えながら、唇をかみ締める。槍真ごときに尋常じゃない反応である。

「名前と学年。すべて、教えるんだ」

槍真の様子が違っていた。普通じゃない感じがした。

その後、槍真に引つ張られる形で向かったのは、大通りをそれたライブハウスのような建物だった。

地下に階段が伸びており、私と槍真、それから新入生の男の子はそこを下っていく。階段をくだるとすぐ、錆びた鉄製の扉があった。槍真はそれを重そうに押し開ける。

「お、槍真か」

里見が軽く手をあげる。周囲に、何人かの男女が座っている。

私が驚いたのは、里見のその軽い反応である。

「やあ、守！」

槍真も軽快に笑っている。

私の中で、二人は仲がひどく悪いものだと思っていたが、下の名前前で呼び合う二人を見て、その考えを改めざるを得なかった。

「その様子だと、ついに見つけたようだな」

里見は立ち上がり、私たちの側に近寄ってくる。

「さて、正直に吐けよ？ 吐かないと、貴様の手指の爪を全部はがしてやる」

眉間に皺を寄せたまま、里見は男の子に顔を近づける。

「ああ、指は十本しかないけどな？ 魔法なんて便利なもんがあるんだよなあ、これが。医療系魔法でもういつぺん、再生させて。その爪また剥いで。また再生させて。痛みをじっくり与え続けてやる。いずれそれに慣れたら別の手段を考えてやるよ？」

その声を聞いて、何名か人影が動いた。知っている顔もいた。同

じ学年の、八卦さん。仁美と同じ本格クラスの医療魔法の使い手である女の子だ。かなりの名門の家柄で、里見のような不良とつるんでいるとは思えない。他クラスながら密かに憧れていたのに、こんな暗い怪しげな地下室で何をやっているのだろう。

「さあ、どうすんだ？ ああん？」

里見の表情は喜色に彩られていた。本当にこの人はたちが悪い。手には何やら金具を持っている。見たことないけれど、爪きりのようにも見えた。もちろん、そんなはずはない。何かした拷問器具の類だろう。あるいは単なる爪切りを間違った使い方をするつもりかもしれない。

「どうすんだつつつてんだろ！ 答えるよオ？」

凶悪な表情で怒鳴る。

「は、ははは話します。話します！」

男の子は恐怖のあまり失禁してしまったようで、ほんわか尿の臭いがした。

「さて、良恵ちゃん。ちょっと上で話そう」

槍真に引つ張られるような形で、私は地上へと出た。

「喉かわいたね」

ちよつと離れたところに自動販売機を見つけ、槍真はどれを買おうかと悩む。私も財布を出そうとすると、「武士の八分でござる！」とかわけのわからないなりに意固地になって奢ってくれようとしたのでお言葉に甘えさせてもらった。

「じゃあ、カフェオレで」

自動販売機から缶が落ちてくる。それを手渡される。槍真はもう一本、今度は自分の分を買う。

手ごころな植え込みを見つけて、二人で並んでプルタブを開く。カフェオレの甘い香りが鼻についた。槍真は無言だが、しかし私には何がかわからないままである。

「どういうことなの？」

「え？」



「いつの間に、里見と仲直りしたの？」

槍真は何から話そうかと悩んでいる様子だったが、とりあえず、ぼつりぼつりと説明してくれた。

「和解したのはここ最近なんだ。たまたま、共通の目的が見つかった。それを探しているうちに、色々とわかって。ほら、去年だったかな。僕の父さんが来たじゃん。あのとき、なんかイイ話みたいに終わってたけど、父さんさ……何か僕をつけまわすうちに色々やらかしちゃったみたいなんだよね。不法侵入とか、船にこっそり乗っていたとか。そのへんの諸々が捜査が進むにつれてわかって……それらに目を瞑るかわりに、捜査に協力すると、警察の人が言ってきたんだよ」

「警察？」

「もう知っているかもしれないけど、里見家の人って、たくさん警察方面にいるそうなんだよね。本土だとエリートコースに進んでいる人もいるとか。で、あんまり地元配属されることも少ないらしいんだけど、魔法を扱える人は特殊な配置が行なわれるじゃん。当然、この島の駐在さんも里見家の人なんだよ。それも、守のお兄さん」

里見家の話は、麗奈から聞いて知っていた。

当然、駐在さんも予想できた通りではあったけれど、それが今のところどう今回の話と結びつくのかわからない。

「そもそも何で僕に動いてもらうことになったかわからないって顔してるな」。だいたいようぶ、僕もわかってない」

けらけら、と槍真は笑ったが、私にはなんとなく予想がついた。

警戒されなさそうな人物なら誰でも良くて、たまたま槍真をこき使う取引材料があったので、それで白羽の矢が立ったのだと思う。

「で、何で、里見と一緒に動いてるの？」

「守も今回の件に関しては動いてたんだよ。それがバツティングする形で今回の流れになったんだけど、最初はそりゃあ、火花も散らしたさ。僕にとっては憎きライバルだ」

勝手にライバルに昇進していた。

「だけど、手を取り合ううちにわかったのさ。こいつは悪いやつじゃない、ってね」

槍真はそう言うと、やたらいい顔をしてみせた。ウインクしつつ、白い歯を見せるといふ外人がやったらかつこいいだらうけど、日本人がやってもあんまりな仕草を。

そうして、自分の飲み干した空き缶をゴミ箱に投げ入れようとしてミスし　　転がった空き缶を黒いポニーテイルの女性が拾った。

「里見さんが呼んでいますよ」

仁美のクラスメイトの八卦さんだ。転入してきたので、私はこの子をすぐに覚えることができた。

しかし、それもあつたけれど、左目の涙ぼくろに三つのホクロが特徴的なので、どちらにしても顔はすぐに覚えただろう。服装は私と同じ、規定のブレザータイプの制服を着ていた。

「吉田さん。改めまして、八卦はちかけ 閻えんです。中井さんから聞いています。同じ系統の魔法ですってね。卒業まで一年もないですけど、またお互い情報とか交換できたらいいですね」

それから、と付け加えた。

「服部さんの言うことを少々訂正します。里見さんが服部さんを二年前に襲ったのは、“エンジェル”の売人だと思ったからだそうです。まあ、その他にもちよつとした感情の齟齬そごというか、そういうつたものもあつたみたいですけど」

そう言つて、意味ありげな視線を送る。

「どちらにせよ、今はお互い和解し、ただひとつの目的のために手を取り合っています。私たちのような学生が集められたのには理由があります。それは中で説明しましょう」

そして、呟く。

「今回の話に、後戻りはできませんよ。神宮寺さんは貴方を巻き込みたくなかつたみたいですけど、もうこれで先に進むしかなくなりました。ただ、悪い話ではありません。これは、貴方のお姉さま

から始まるストーリーです」

ふつと微笑み、踵を返す。ついて来るように、ということなのだろつ。

私はそれを聞いて、確信した。彼女の言うことが、事実であることを。

今回の話には、後戻りはできませんよ。

もう、後に引けないことを知った。これが、姉さまに繋がる一連の流れであるのならば。

\*

“エンジェル”。

学生をターゲットにした、いわば麻薬の一種。定義づけとしては“魔薬”と言われる。世間一般では出回っておらず、ここ蓮華島で三年の間に現れた奇妙なドラッグである。

服用することで、魔法を扱う神経系統に作用し、普段よりも精巧に、強い魔法を扱えるようになる。そう。ただそれだけのもの。即効性はない。しかし、中毒性はある。

服用し続けることで 契約者は、守護者から力を強引に奪い取ることができると言う。それは一般に、よほどの技術がないと不可能とされていることだった。個人レベルで簡単にどここうでできるものではない。

そもそも国はその危険性を認識しているからこそ、魔法発祥以来、続けてきた研究成果をもって魔法技術専門学校を各地に設立したのである。そして、更なる安全性の確保と、魔法の発展を目指して、『M・JAPAN構想』を掲げたのである。

「それだけ聞くといいことだらけのように思うけど……実際は違うんでしょ？」

「当然な」

尋ねると、里見は頷いた。

地下室内の人口密度は一気に減っていた。今は、私と槍真。里見と八卦さんのみである。

後はまた街中へ散らばったという。さっきの男の子は、里見のお兄さんに引き渡されたらしい。魔法が絡んでいるので、おそらくは特殊な施設で更生という流れになるのだと思う。

「……吉田、オマエも見たことあるだろ。最近になってやけに増えやがった。自然の流れじゃねえ」

里見の意味深な言葉を聞いて、私はすぐにそれがあの鬼　里見たちが怪奇と呼ぶ存在のことをさしていると気づいた。

「そう、俺たちが“怪奇”と呼ぶ存在。それが、そのドラッグの被害者だよ。あいつらは元は学生が大半だ。まあ、たまに大人も居るがな。だが、ほとんどは成績の伸び悩んでいる、落ちこぼれの学生だ。不良もいれば、バカもいる。だけど、等しく、元は人間だ。鬼なんかじゃねえ。“エンジェル”の売人は、獲物にも、また警察や学園側からも目をつけられにくいように、一般の害のなさそうな学生をチョイスして選定される。金が、あるいは弱みとか、別の何かを使ってるのか。こいつもまた、落ちこぼれが選ばれる」

私はそこで、二年前になぜ槍真が里見に殴られていたか理解した。あれは、“エンジェル”の売人と勘違いされていたのだ。ということは、あの当時から売買は行なわれていたことになる。

「最初はそんなにえげつないクスリでもなかったんだよ。だから、“怪奇”の類も少なかった。だが、あるときを境に増えた。研究が一気に進んだんだろうな。おそらく、かなりの研究者が来たに違いないんだが、正規の船のルートだったら、それはバれる。密航しやがったんだよ。うちの兄貴は、それを見越してある程度、警戒していた。ところが、へんな邪魔が入ってなア。ややこしい密航者も一匹いたんだな、これが。般若のお面を被った、怪しいヤツがなア？」

槍真はそっぽを向き、変な鼻歌を始めた。よくよく聞くとそれは、忍者ハットリクンの主題歌だった。

一年半前の、槍真の父親の騒動。あれのせいかな。なおさら、槍真が今回の話から手を引けないわけである。思いつき、こいつの家の問題だ。

以後も、色々な話が続いたが、私はふと気づいてしまったのだ。だから、どこか上の空でしか他の話は聞けなかった。私は気づいてしまったのだ。話の流れで。

『これは、貴方のお姉さまから始まるストーリーです』  
確かに、八卦さんはそう言った。それは即ち、姉さまも何らかの形で今回のドラッグ騒動に関わっていたことを意味する。姉さまは自殺した。そこには今回の騒動と何らかの因果関係があるに違いない。

塞ぎ込んだように無言になった私を見て、後日また話し合おうということになり、私たちは解散した。もしかしたらそれは厄介払いのためで、私は今後もうその場に含まれないのかもしれないかもしれない。

翌日、私は普通に授業を受け、いつも通りに学校生活を過ごした。槍真も、麗奈も何も言ってお来なかった。私も何も言わなかった。ただ、いつも通りの会話をしても、お互いにどこかよそよそしかった。アルバイトは、心配してくれた内藤さんが長期の休みをくれた。

私はただぼうつと過ごした。いつも片隅にあるのは、姉さまのことだった。

それが一日経って、二日経っていくにつれて、ようやく決心がついた。逃げてばかりはいられない。これは、私の戦いである。姉さまを追って、ただ姉さまの想いに近づきたくて、私はこの学校へ進学した。それならば進むべきはひとつじゃないか。

日曜日と日にちを決め、私はアポを取った。確認するつもりだった。そして、真実を知るのだ。私自身の手で。

待ち合わせ場所に指定されたのは、学校の屋上だった。

ここならば、人気も少ない。目当ての人を探す。ややあって、重い鉄の扉が開いた。

「大城先生」

私は、担任の名前を呼んだ。

「どうしたのかな。日曜日だというのに」

その明るい笑顔を見ると、どうも調子が狂いそうになる。

「あの」

「ん？」

「先生は、私の姉さま……吉田義美を知っていますか？」

少し考える間を置いて、先生は首を横に振った。

「……これ」

意を決して口を開き、ポケットの中のものを差し出す。

ぼろぼろの紙くずを見て、大城先生は不思議そうに首をかしげた。

「これ、二年前、服部君が大怪我した事件の折に、先生が私に書いてくださった居残り証明書です。証明対象である生徒の名前……なぜ、吉田義美となっているのですか？ 先生は姉さまと私を、すっかり間違ったのですか？」

大城先生は、しばらく目線をその崩れた証明書に落としていた。

「姉さまは、自殺しました。遺書も無く。その死には、あるモノが絡んでいます。ご存知ですよね？」

駆け引きだった。慎重にひとつ、ひとつ言葉を重ねていく。

「私は例の件を知っていますよ。何なら、学校側に公表するつもりです」

大城先生は顔をあげた。

「それ以上、言うんじゃない」

「……知りたいんです。姉さまの死に関して、私は何も知らないんです。先生なら、姉さまの自殺の本当のところを知っているでしょう？ そのことを知ることができれば、私は何も公表しません」

「言うな！」

「“エンジェル”のことも、何も公表しません！ だから、本当の

ことを教えてくだ

あ！」

瞬間、私は身体の自由を奪われていた。

大城先生が、魔法を使ったのだ。どういう系統の魔法かはわからない。私は、大城先生の表情を覗いた。先生はいつもの優しい表情を完全に消していた。あまりに冷たい、見下すような目線を私に投げかける。

声を発そうとしても、出ない。先生も無言だった。先生は私に近づき、私の腹部に向けて握りこぶしをぶつけた。そして、世界が暗転した。

\*

目が覚めると、真暗闇だった。電気はない。おそらく、屋外ではないと思う。たとえ夜だとしても、月や星の輝き暗い見えそうなものだ。

おなかが痛い。大城先生に殴られたところがずきずき痛む。癒しの魔法を唱えないといけないと、考えて、両手両足が縛られていることに気づいた。息をするのも苦しい。猿ぐつわも噛まされているらしかった。

メデイはどこだろう、と途方に暮れた。

暗闇に眼が慣れるまで、おとなしくしていようと思って、気絶している間、夢を見ていたことを思い出した。

幼い頃に、姉さまと遊んだ夢。両親は、私が姉さまと遊んでいると引き離れた。バカがつつる、そう言った。優秀な姉と、愚鈍な妹。吉田家の、頂と底。その差はあまりにも大きかったけれど、それを感じさせないくらい。姉さまは優しくかった。

夢の中で姉さまと私は鉄棒をしていた。姉さまは逆上がりができずに、何度も何度も練習していた。また、あるときは、絵が下手だと指摘され、何度も何度も幼稚園で描き直していた。そうだ。姉さ

まは天才なんかじゃない。人一倍、努力家だった。そうか。姉さまは 私と、一緒だったんだ。だけど、だらだらしている私と違って、努力して努力して頑張ってる。学力ナンバーワンを維持し続けてきた。小学生の頃に、神童と噂された。両親が嬉しそうにする度、姉さまは頑張っていた。

私は そんな大事なことを、忘れていたんだ。

涙が溢れ出した。頬を伝わり、猿ぐつわに染み込む。鼻水だって出て来る。声をあげて泣きたいのに、出てくるのはくぐもった声だけ。それでも私は泣き続けた。

「お目覚めのようだね」

暗闇を割いて、光が差し込む。扉が開かれたらしい。

聞き覚えのない、しゃがれた老人の声が室内に響く。

「まったく、これだから軍隊あがりは。こんな可哀想なことを平気でするのだからもう」

くくく、と低く笑う。

「おっと、何も考えなくていい。私は悪者だ。今から、悪事をべらべらしゃべる。何せ、発表するのが好きな性分だなあ。好きにしゃべらせてくれたまえよ」

眼が徐々に慣れてきて、室内に入ってきたのが車椅子に乗った老人であると気づいた。カラカラカラ、と車輪を回しながら老人は私の元へ近づき、口の猿ぐつわをずらした。

「さて、何から話そうかなあ。時間はたっぷりあるのだからなあ」

私は、老人の顔を睨みつける。

「助けを求めても無駄だよ。何人か、私の傀儡がある。そう文字通りの傀儡がなあ。もう、魔法とは便利だなあ。くく、それも強力な魔法ともなればなあ」

「あなたは……誰？」

老人は目を細め、微笑んだ。

「位など持たない、ただの平よ。関東軍防疫給水部本部のな」



「関東軍防疫給水部本部？」

「秘匿名称を、満州第七三一部隊。通称を、731部隊という。第二次世界大戦期の大日本帝国陸軍に存在した細菌戦に使用する生物兵器の研究開発機関だ」

老人は皺の刻まれた顔をさらに深くして、嘲笑う。

「私の名前は、蓮華れんげ典つかさ。日本で初めて魔法を用いた者である」

目の前にいる男が、第二次世界大戦に参加していたという。

とてもそのような年齢に見えなかったが、何か魔法を駆使しているのかもしれない。

「くく、世間一般では死んだことになっているがね……今この島に  
いる蓮華家の者でも私が生きていることを知るものは少ない。現在の  
学校長にして私の孫の蓮華典久でさえも……。蓮華家の有力者  
を始め、要となる人物には始祖たる私の魔法で洗脳を施しておる。

それも、普段は通常通りの行動をしているので、誰にも気づかれん

……」

「じゃあ、大城先生も……？」

「あの男は少し厄介だった。経歴にもCIAとあった。魔法も使えたため、部分的にしか洗脳できなかった。あるキーワードを聞くと、私のプログラムした命令どおりの行動を行う……。それもまあ、数日で解けてしまうがね。また、本人もおかしいという自覚はあったよ  
うで、いくつかの試行錯誤を繰り返し、そのキーワードを何らかの  
手段で割り出したようだ。誰がその魔法をかけたかまではわからな  
かったようだね。その記憶は改竄してある」

蓮華典は、島の影の支配者だった。警察にも行政にも、至る所に  
通じていた。

「さて、キミになぜここまで話したかわかるかね？ キミも明日に  
は今日のことを忘れているからだよ。そして、“エンジェル”の売  
人となってもらおう」

「……“エンジェル”って何なの？」

「さっき言った洗脳を伝播させるものだよ。今はまだ、副作用も多

く実現は難しい上に、魔法の力の弱い人間にしか効力を発揮できない」

記憶の改竄、洗脳を伝播させる“エンジェル”……ふと、蓮華病院で廉が私の記憶を消すと言っていたことを思い出す。廉が研究していたのは“怪奇”だ。そして、“怪奇”を発生させているのは、目の前の老人の言う“エンジェル”である。

魔法と脳は密接に絡み合っていると聞く。この老人の言うことは、嘘や狂気の類ではないと確信した。

「今はまだ、“エンジェル”は実験の段階だ。だが、それも直に終る。一年半前に、魔法省に忍び込ませていた有能な研究者が帰ってきたからなあ。くくく。この一年半で、研究は格段に進歩したよ。魔法を使えるのは国内の、しかも、選ばれた人間だ。その魔法人がすべて同じ意志のもとに動けば……大日本帝国の再建さえ可能だ。この国が世界一の大国となり、地球全土を統べることもできよう。“エンジェル”はその一端なのだよ！」

狂ったように、蓮華典は嘲笑した。文字通り、狂気だと思った。車椅子をかたかた揺らし、肩を震わせて、笑い続けた。

ガコン、と鈍い音が響いた。

音のなった方に視線を送る。扉が、地面についている。いや、扉が蹴破られたのだ。

「たのしいか、くそジジイ。電気もつけねエだよ」

「誰だ」

「正義の味方だよ。悪役がべらべらしゃべったら、その間に沸いてくるんだよ」

明かりをバツクに、ホスト紛いの黒服男は声をあげる。

「なあにが、“エンジェル”だ。チョコボールでも集めてるつての。つづりは、普通のエンジェルとは違うんだろ？ ENGINE R。並べ替えたら、RENGE。お前どこまで自分好きなんだよつて話」

里見はげらげら笑い転げると、「天使のような悪魔の笑顔、この

街に溢れているよ」と一時期流行した曲を口ずさんだ。

「何故ここに来れた？ 操った連中を何人も配置していたはずだ。とりわけ、大城という教師はなかなかの腕前のはず……」

「ああ、あれな？ 全部、洗脳解いてまわったぜ。魔法技術は、テメエの頭の中みてえに六十年以上前で止まっているわけじゃねえんだよ。こつちには医療の天才が二人いてなあ、こいつらが全部解決しちゃった。皮肉なことに、今回の件をジャマした一人はお前の曾孫だぜ？ ギャハハ」

廉のことで間違いない。彼ならそれが可能なように思う。あとひとりはおそらく助手をしている、医療魔法の本格派の八卦さんだ。さて、と里見は目を細める。

「吉田義美も、その“エンジェル”の被害者か？」

「やっぱり姉さまも……今回のドラッグと関連があるの!？」

蓮華典ではなく、声を発したのは私だった。里見は頷く。

「……被害者だ。初期のな」

「でも、あれは自殺だった……」

「それは結果だろう。何もなきゃ自殺もしねエ。オレとあいつはクラスメイトだったんだ。助けるチャンスはいくらでもあったはずなのに。やってることといえば、今更になって犯人探した。バカバカしくて反吐が出るぜ……だがな、ようやっと見つけた。あいつを死に追いやったクスリを作ったオマエをオレは許さねエ」

里見は物凄い形相を見せた。怒り、悲しみ。それは他者に向けてのものだけではない気がした。きつと、それは自分に向けてのものでもある。これほどまでに、姉さまのことを思ってくれている人が居たなんて。

あ……そうなのか、だからか。槍真があれだけ殴られたのも、姉さまに似た私が現れて、死んだ姉さまのことが嫌でも思い出されて、平常で居られなくなつて。それで、あんなことを。

私は、里見のことを掴みどころの無い人だと思っていた。最初はあんなに怖かつたのに、時々ふいにやさしくしてくれる。どつちが

本当の彼かわからなかった。だけど、今ようやくわかった。粗暴だけど、心根は優しい。それが、里見守という男なのだ。

「まあ、そういうことだったんだよ。だったら、僕も……協力しなきゃって思っただよ。友達である、良恵に關係することだもんね」  
言つて、室内へと入ってきたのは槍真だった。軽く、笑う。それは決して軽薄な笑みではない。重たいものを、軽くしようと。この場の濁りをどこかへ追い出そうとする、槍真の優しさだった。

「私は違いますけど」

次いで、医療の天才 八卦さんが姿を現した。

「今はここに居ない協力者の人もそれぞれ別々の心情で動いていますよ。利害で動いている人もいるでしょう。けれど、みんな……」  
そこで、微笑む。目元の黒い三つボクロが下がる。

「おおむね同じような気持ちです。人が困っていたら助けたくなくなる。私なんて、医療の道に進む者ですから、その典型例です。それに……私は今、蓮華病院の廉先生の診療助手をやっているので、先生からの頼みでもあります」

蓮華 廉 私の目の前の車椅子の老人の曾孫である。

「なんだと……政界にも入れぬ、権力も手に出来ぬ、蓮華家のあのオチコボレが私のジヤマをするだと……？」

「ここに居ないので代わって申し上げますけれど、廉さんはオチコボレなんかじゃありませんわ。蓮華家とは違う道を選んだだけで、とても優れた研究者です その点はあなたに似たのかしらね」

ポチ、と電気をつける。

「麗奈……」

麗奈はポニーテールをかきあげる仕草をし、そして私に向けて微笑んだ。

「街一番、情報屋の集まるバーのマスターの内藤さんが、廉のところへ持ち込んでくれた情報と、廉の持つ蓮華家の内情を照らし合わせ、整合性が取れました。まさか、こんな近場に潜んでいるとは思っていませんでしたわ。学園の敷地内とはね」

「

麗奈は蓮華典と私のもとへ歩み寄り、車椅子の老人に廻し蹴りを叩き込んだ。容赦のない、一撃。

愛するフィアンセの曾祖父が苦悶に呻いているのには目もくれず、床に倒れている私を起こし、手足を縛っていたロープを外し、中途半端に残っていた猿ぐつわを取り除いてくれた。

「お姉さまのこと、お辛いでしょように。知ることも忍びないのではと思ってあえて全て黙っております。……けれど、今この場に貴方がいること。成り行きもありましょうが、良恵さんの意思と捉えてもよろしいのでしょうか？」

麗奈は静かに問いかけながら、どこから回収したカバンを肩にかけてくれる。私の、愛用のカバンだ。ずっしり書物の重みもある。

「私は……」

言葉に詰まる。みんな固唾を飲んで見守っている。

胸の中でいくつも問いを重ねて来た。昔は、姉さまに関すること聞くのも知るのも辛かった。怖かった。腰に提げた愛用のカバンに手を添える。メイが微かにカバンの中で反応した。応援、してくれているのだろう。

「私はすべてを知る覚悟でここに居ます」

言った。言ってしまった。

しかし、後悔はない。もう逃げない。

「蓮華典さん。あなたをどうこうするつもりはありません。ただ、真実が知りたいのです。吉田義美という少女を知っていますか？

享年十八歳。今の私と同じ年になります」

私は部屋の隅に転がる車椅子を起こし、蓮華典をそこに座らせる。痛みも引いていたようで、ただ静かに私を見つめている。

「知らぬなあ。でもまあ、おおかた、その他大勢の生徒と同じだろう。自殺したことだけは違っただろうかなあ」

「どういうこと？」

「魔法の力を操りやすくなるという効能が、当初の“エンジェル”に備わっていた大きなものだった。これは、“魔法を使えるように

なる”という強い暗示が働くためだ。洗脳の第一歩だな。おおかた、オチコボレの生徒だったのだろう、キミの姉は」

里見が静かに歩み寄り、車椅子の蓮華典の胸倉を掴んで立たせる。「……知った口、叩くんじゃねエよ。あいつは、“エンジェル”の中毒性に勝つただろうが。普通なら、自殺なんて選べないくらいドツプリ浸かつちまうところを、あいつは戦って、あんな形でも勝つたんじゃないか。それをけなすんじゃないやねエよ。どれほど優秀なんだよ、テムエは？」

「間違っていないだろう。“エンジェル”に手を出し、副作用で身体に異常をきたし始めたのが怖くなって、オチコボレが死へと逃げた……それだけのこと」

耳をつんざく轟音が響きわたった。

瓦礫が飛ぶ。粉々に砕けた壁の石材がいくつも飛んできた。私は瞬時に対応しきれず、顔を庇うように両手で覆った。

しかし、いつまで経っても衝撃はなかった。恐る恐る手を下ろすと、里見が目前に立っていた。黒スーツの肩や背中、至るところが粉塵で白くなっている。

「ぼさつとしてんなよ、吉田」

振り返った額に、血が滲んでいる。

唾然としている私に向かって、里見はカバンを指差した。

「自分の身くらい、その中のもんで守りやがれ」

そして、半壊した建物の外を睨みつける。

外は夕暮れが近いのか、幾分暗くなっていた。私は果たしてどの程度ここで眠っていたのだろうか。いや、今はそんなことはどうでもいい。

「おお、ようやく来たか。しかし、手荒すぎる。私まで巻き込むところだったぞ。とはいえ、こうしてケガがないのだから、お前の計算どおりではあるう」

外の人影に向けて、蓮華典は手を差し伸ばした。

「さあ、我が分身よ。ここへ」

ゆっくりと、それは歩いてくる。白衣を着て、まるで研究者のような出で立ちであった。

「廉……？」

入り口に程近い麗奈が思わず、その名前を口にする。それくらい、廉と“彼”は酷似していた。

「こいつは私の細胞から作り出したクローンだ。そこに、記憶の書き換えを魔法で施した後　私の魔法を継承した」

魔法を継承　そんなことができるのか？

「……理論的には可能ですよ。ただ、全ての能力とはいきません。魔法の源は生命のそれと似通っています。もし、すべてを引き継いでしまうと、死にますね。確実に」

八卦さんは渋い表情を作った。

それほどまでに危険な業なのだろう。それをこの車椅子の老人の身でやってのけたのだ。

「ご覧のとおり、私はいつ死んでもおかしくないからなあ。部分的な能力を残して、すべてはこやつに託したのだよ」

隣に立った青年の状態の自分自身を見て、蓮華典はぼろぼろの歯を見せて笑った。

「ああ、わかつたぜ。なんで、優秀な研究者とやらが正規のルートでここに来なかったか。お前の若い頃にそっくりだったのと、蓮華家のモノが見れば、明らかにおかしいって気づくからだろ。なるほどなあ、自分自身のクローンを作ってやがったのな……」

里見に対して、青年は無言だった。

「さて」と老人は言う。「最後の継承をしよう。もう逃げ場はないし、今の状態じゃこの人数には勝ち目はないだろう。私の全てをお前にくれてやる」

さあ、と老人の蓮華典が言う。

「私を殺せ。ひやはは、時期は早くなつたが、これからはお前が“蓮華典”と成り代わるのだ！　ひやは、ひやははは！」

青年の蓮華典は、無言で頷く。その眼はあまりに冷たかった。これが、本来の若かりし蓮華典の姿なのだろう。

蓮華典は白衣を翻し、腰の辺りに隠していたナイフを取り出し、一瞬にして老人の蓮華典の首元を掻き切った。老人のけたたましく笑い声は、ごぼごぼという異音に変わった。とっさに、私はカバンの中から医薬品集を出そうとしたが、八卦さんの方が早かった。手早く駆け寄り、しかし、瞬時に動きを止めた。

「……手遅れです。魔法を使えば、現在の医学では解決できない問題でもクリアできることは確かにありますが、これはもう……手遅れです」

二度、「手遅れです」と八卦さんは繰り返した。

この状態を見れば、誰がどう見ても手遅れに見える。けれど、それでも一応、医療人として彼女は動いたのだ。私はそれより遅れた。この差が、私と医療の距離を如実に示しているように見えた。

ふと、この事態を引き起こした張本人があまりにも静かなことに気づき、私は新たに“蓮華典”となった白衣の男を見た。“蓮華典”はただ静かにそこに立っていた。無言で血濡れのナイフを持って、ずっと佇んでいる。様子がおかしかった。時々、不気味な唸り声をあげている。

「これは……“怪奇”に取り憑かれたモノの気配……」

麗奈が口元を覆う。ちよつとでも自分の婚約者に似ている男が、変貌する様を目にしたのだ。

“蓮華典”は突然白衣を脱ぎ捨て、着ていた洋服を破き始めた。白い肌が見える。そこを走る血管　いや、筋肉の筋か　あるいはその双方。ありとあらゆるところが、人にあらざるものへと変貌していく。毛細血管が肥大する。筋肉が異常に発達し、あらぬ頻度に膨張する。肘からは骨だろうか　白いものが鋭利にとがって露出していた。

「こんな、こんなので、鬼、じゃないか……」

鬼　いや、“怪奇”を見たことの無い槍真が驚きの声を漏らす。



犬歯を発達させ、衣類はみな破れて、青白く変色した硬化した肌が露出していた。体軀も一回りどころか二回りは肥大化している。手足の爪は鋭く尖り、硬度を増していてまるで鋭利な刃物のようであった。

その黄色く濁った瞳を、そいつは外へと向けた。そして、そちらに右手をかざす　放たれるは光の一撃。

「危ない！」

槍真は、巻物から“守護者”の忍者を呼び出し　瞬時に詠唱を発する。

『　科学忍法、火の鳥！』

それは、彼の父親の言っていたのと同じフレーズであった。

槍真の右手から発せられた赤い炎が不死鳥のような形となり、蓮華典だったモノが放った光の刃とぶつかって小さな爆発を生じさせる。

槍真に邪魔をされたことで、“そいつ”は激昂した。吼える。

地を蹴り、その巨軀に似合わない速さで槍真に飛び掛る。槍真は新たな魔法を詠唱する間もなく、巨大な両手に鷲掴みにされ壁に投げつけられた。ゴキ、と骨の折れる鈍い音が響き、槍真は地面に倒れた。私は慌ててそこへ走ろうとして、里見に止められる。

「バカヤロウ、あんな鬼みてエな野郎に向かって突っ走るんじゃねエ。あいつはもはやタダの“怪奇”じゃねエんだ。ありやあ、正真正銘の……」

正真正銘の“鬼”だ。

里見はすっかりそう言い切った。そして、すばやく周囲を観察する。私もその目の動きを追った。

私と里見がいるところと、槍真のいる位置との間に“鬼”が居る。槍真たちに近いのは麗奈と八卦さんだった。私たちの視線に気づき、八卦さんは力強く頷いた。麗奈もいつでも詠唱を唱えられるように

聖書を片手に持っている。そこからは守護者の天使も顔を出している。

「おい、吉田」

小声で里見が囁く。

「今からオレがあいつをひきつけるからな、お前はもし可能なら、オレに回復の魔法を何かくれ。何なら、ロキソニンでも何でもいい。痛み止めが一時的に効いたら構わねえ」

里見は私の顔を覗き見る。

「吉田姉妹なら、それができるんだろ」

力強く、言い聞かせる。それは巨大な敵に立ち向かう自分を奮い立たせているかのごとく。

そして、里見は木刀を肩に当てながら立ち上がった。

「よオ、でくの坊。こっち見ろよ」

槍真を睨んでいた“鬼”が里見に意識を向ける。

振り返ると同時に、背後まで近づいていた里見が、その変貌した顔面に木刀を叩き込んだ。当然、ただの一撃ではない。魔法の力を纏わせたものである。

そして、すぐに間合いを取るべく後方へ跳ぶ。

「にしてもよオ……槍真は入学当初ぶっ飛ばされて、今回もまたこんなんで。まったく変わってねエのな」

吹き飛ばされた状態の槍真を一瞥する。

「だが、科学忍法　かつこよかつたぜエ」

里見は口元を緩める。

「オレもやってみつかないア！」

言うつと、“鬼”に向けて木刀を振るう。空を切る音が響き、木刀の切っ先から炎の鳥が飛び出す。半壊して空が見えている室内を旋回し、上空へと飛び立った。その姿を“鬼”は目で追っている。どうやら、魔法や身体能力は強化されても、その分の知力が低下する様だった。

注意がそがれている。

「今だ、八卦ツ！ お前の魔法と、廉の医術に任せた！」

八卦さんが槍真の元へ走り出す。そして、その小柄な肩に槍真の腕をかけさせ、ぐったりした彼を外へと運ぼうとするが、女の子ひとりの力では心もとない。麗奈はふたりと、私を交互に見やる。

「神宮寺家のツ、お前も一緒に行つてやれツ！」

“鬼”が気づいた。私と麗奈の視線が絡み合う。私は大丈夫だよ。目で伝える。麗奈は頷き、八卦さんに肩を貸し、二人で外へ向かった。

その二人を追いかけようとする“鬼”に里見は火の鳥を降下させ、頭頂部からぶつけた。絶叫をあげ、巨躯が跳ねた。頭髪を失い、頭皮焦がしながら“鬼”は恨めしげな彷徨をあげ、里見に突進する。丸太のような腕が里見の腹部に振るわれる。まるで人形のように里見は吹き飛んだ。

内臓を損傷したのか、口元からどす黒い血を吐き、里見は地面に臥した。

「さ、里見！？」

慌ててそこへ駆け寄ろうとするが、“鬼”に行く手を阻まれてしまった。低い唸り声をあげて、“鬼”が歩み寄ってくる。里見はびくりとも動かない。生きているのだろうか。あれほどの魔法の使い手でも、物理的ダメージには逆らえない。

私は里見が言っていたことを思い出す。私の役割を。いつでも取り出せるようにしていた本と、メイを呼び出し、瞬時に詠唱する。簡単な、有名な医薬品くらいならばすぐに唱えられるくらいに私は成長した。里見に向けて、痛み止めの魔法と、私の技量ではそれが限界である回復魔法を送った。距離が離れていても、三年生になった私であればそれができた。

けれど、その隙が仇となり、私は“鬼”の両手に鷲掴みにされた。腹部が圧迫される。あえて、“鬼”はすぐに私を潰そうとしない。私の苦しむ様子を見て、狂気的笑みを湛えていた。医薬品集が足元に落ちる。魔法はもう唱えられない。もうだめか。結局、私はここ

までなんだ。何にも勝てない。何とも戦えない。ああ、ああ。意識が薄れていく。暗転する。終わり。世界の終わり。いや、これは私の世界の終わりだ。

「吉田！ 大丈夫か！」

大城先生の声がする。

【……良恵。しっかりして】

うつすらと、姉さまが目前に見える気がした。お迎えに来てくれたの、姉さま

【あなたは大丈夫、今のあなたなら本がなくても魔法を使えるでしょう。あなたはそれほどまでに成長したわ】

姉さま。

【エピネフリン入りキシロカインは、指、趾、陰茎の麻酔には用いてはならない。血管が収縮しすぎて、壊死する危険があるの。何をすべきか、わかるわね？】

瞬間、朦朧としていた意識が舞い戻った。

私は脳内に浮かんだ、ひとつの魔法を短く詠唱する。

『エピネフリン、キシロカイン！』

麻酔に使用されるそれを、私は複合魔法として唱えた。それを、“鬼”の指に向かって放つ。

即効で、事象としてそれは発現した。私を握り締めていた“鬼”の指先が緩み、私は地面に落ちていく。その瞬間を、大城先生は見逃さなかった、短く叫ぶと、右手をかざしただけで“鬼”の半身が吹き飛んだ。その衝撃で空気が揺らぎ、風となる。私の身体は吹き飛ばされ たが、それを里見がキャッチした。

「よオ、吉田。お前の魔法、効いたぜ。ばっちり全快だ。マジ死んだと思ったのに、ありえねエ」

里見はそのまま私を抱えて走る。

「大城センセエよオ！ 久々だな！ あとのクソ始末は任せませ！」  
叫びながら、しかも私を抱えながら走るほどに、里見は回復していた。私の魔法よりも、彼の回復力に驚きを隠せない。

「里見君、きみは相変わらず口が悪いね！　だが、後は任せなさい。生徒を守るのが　教師の役目だからッ！」

そこからしばし走り、安全圏と思われる屋外で里見は私を下ろした。

遠目に大城先生と“鬼”の闘いを眺める。すでに半身を失っていても、“鬼”は這いずって、魔法を足元に放った反動で跳ね、大城先生に飛び掛る。それを素早い身のこなしでかわし、大城先生は魔法を放つ。氷結の魔法なのだろう。落ちた先の地面と、氷で一体化してしまい、身動きが取れなくなった“鬼”に廻し蹴りを叩き込む。氷と化した身体が煌きながら霧散する。

ありえない。人間の動きに見えないほど、大城先生は凄かった。そういえば、老人の方の蓮華典が言っていた。軍隊あがり、と。確か、CIAだった。ただでさえ鍛錬されている身体に、強力な魔法の使い手ときた。もはやこの時点においては一方的にすら見える状況で、闘いは幕を閉じた。

「……センス、あいかわらず強エね」

大城先生に全て持っていかれた形で、里見は嘆息する。

きつと、大城先生は油断していたのだろう。洗脳を受けたときは、やむをえない事情があったのだろう。常人ならば、そこから洗脳されている自分に気づくことはまずない。しかし、大城先生はそれに早くに気づき、トリガーとなるキーワードを絞り込み、そこに生徒である私が介入できないよう、姉さまのことを知らないフリしたのだ。そこからきつと、“エンジェル”の話題になることを案じたのだ。

「姉さまも、里見も……大城先生のクラスだったんだね」

里見はそっぽを向いて、ばつが悪そうに頷いた。

「だから、私のことを知っていたんだね」

それなら。

「それなら、そうとやってくれたらよかったのに」

言えない事情があったことも理解している。今なら、すべてわか

る。だけど、やっぱり、心が追いつかないのだ。

「みんな、ずるいよ」

私は里見の胸に顔をうずめ、涙を隠した。

里見はそんな私の背中に手を回し、ぶっきらぼうに、「悪かったな」と呟いた。

「う、う……」

押し殺していた声が漏れる。ああ、だめだ。私はこの島に来てから泣いてばかりだ。それでも、やっぱり涙は止まらなかった。どこからか、姉さまがそれを見て笑っているような錯覚を起こした。

あのとき、“鬼”に握りつぶされそうになった私を救った声は、姉さまのものであったと思う。確かにそう感じた。あの暖かさは、姉さまのものだ。

姉さま。ありがとう。

私は姉さまのおかげで、こうして生きています。

姉さまを自殺に追い込んだドラッグは、こうして、蓮華魔法技術専門学校奥の旧校舎と共に吹き飛んだ。

残ったドラッグは適切に処分され、売人にされた生徒も今は蓮華病院で適切なケアを受けている。今回の一件について、学園側は多方面に根回しを行なった。真実の隠蔽である。本件は、ただの快楽性のある魔薬をめぐる事件として片付けられた。主犯格は、魔法事故で亡くなったと報道された。それは、老人の蓮華典ではない。彼は数十年前に死亡したことになっており、明るみに出ると蓮華家にとって不都合だからである。なので、魔法省を退職した元職員男性が矢面に立った。名前は印象に残らないものだったが、まさしく、蓮華典のクローンの架空の戸籍のことである。ただし、一般報道された写真は別人のものになっていた。

得てして、真実とは歪められるものなのかもしれない。それは時に憎むべきものかもしれないが、本件に関しては私はこれでよかつ

たと思っっている。魔薬を知らず知らずのうちに売買させられていた罪もない生徒たち。また、魔薬の犠牲になって亡くなった生徒たち。後者に関してはすでに、事故による行方不明とされていて、今更明るみに出したところで、報われない。前者にいたっては未来ある若者たちだ。ここで、身に覚えの無い魔薬の売買をさせられていたことが知られると、彼らは冷たい扱いを受けるだろう。魔法に絡む犯罪は、通常の犯罪よりも重く罰せられる。そのあたりのこと全て考慮すると、やはり本件は世に公開されない方が良いのだ。

蓮華典は 戦争の遺物は、こうして、闇の中へと消えていった。蓮華島に、蓮華魔法技術専門学校はしばらくは混乱していたが、また元の日常に戻っていく。魔法のある、日常に。私ももう進路について決めなければならぬ時期に差し迫っていた。胸のうちではすでに決まっている。後はそれをどう行動に移すかだ。

残りの学園生活の中で、私はそれを見つけないといけない。それはとても困難なように思えたが、それでも私にはたくさんの味方がいる。学校の中にも、学校の外にも。

少なくとも、私はひとりではない。こんなにもたくさんの人たちに見守られているのだから、私はやれる。やってやる。心に灯った勇気の炎をいずれ来たるべきときまで、私は燃やし続ける覚悟を決めた。

## 終章 『卒業』

姉さま。私は今、とても幸せです。

\* \* \* \*

吉田良恵、十八歳。

桜の舞わない卒業式を経て、私はついに卒業試験に臨むことになった。すなわち、「守護者」との決別である。私たち学生「契約者」は、この儀式を経て、「守護者」よりすべての魔法の源を譲り受けて「継承者」となる。力を継げるだけの技量はおおよそ身につけている。稀に卒業の適わぬ者もいるが、だいたいは魔法省の開發した三年間のカリキュラムの中で条件をクリアできるようになっている。

大人 魔法人への新たな一歩であり、心躍らせる反面、守護者との一生の別れとなる。

槍真や麗奈は、これをクリアした。ほぼ全ての生徒が卒業式前にこれを終わらせている。けれど、私は決心がつかず、卒業式の後に卒業試験という名の魔法儀式を持ち越したのだ。それもいつまでも延ばしているわけにはいかず、大城先生の説得もあって、私は今日の夕方にそれを受けることになっている。

だから。その最後の日を、私は守護者のメデイと共に街を廻って歩くことにした。

まずは島の商店街、本屋、ドラッグストア、港……外観からゆっくりと歩いて周った。私たちはその間、一切会話はしなかった。あえて、言葉は要らない。私たちが過ごしてきた時間の密度はそれほどまでに濃い。

道をそれて、喫茶『night a star』へと向かう。姉



さまがアルバイトをして、そして、私がアルバイトをしたお店だ。  
私が 学校生活の間ずっと、お世話になったお店。

「寂しくなるね。でもまあ、また遊びにおいでよ」

マスターの内藤さんはあいかかわらず、クールな反応だった。前の“エンジェル”の魔薬の一件で、麗奈や廉へ、内藤さんが情報提供したときに、情報屋としての側面も持つてしていると知ってからは、そのクールさはわざと演出しているのではないかと思っっている。けれど、あいかかわらず、大人の男性という感じがした。魔法を扱えないでも、内藤さんはちゃんと自分の人生を歩み続けている。私は内藤さんからたくさん料理や知識を学んだ。ここでの経験は、これから生きていく上で絶対に役立つ、かけがえの無い私の宝物だ。

「内藤さん。今まで、本当にお世話になりました」

「ううん、お役に立てたかどうか。病院食って、栄養価の関係で調味料とかにも結構制限がかかるからね。それでもまあ、火の通し加減とか、そのあたりは共通するか。後は他の調理師さんがそれを覚えてくれるかだけど……それはまだ先の話だからゆっくり考えていけばいい」

「はい」

実を言うと、私は今まだ管理栄養士としてのルールを走っていない。私はまだ、親の敷いたレールの上にいる。そのことを内藤さんは知っているので、そういう言い方になった。

ひとしきり会話して、今までのお礼を述べてその場を後にした

また、いつか絶対に遊びに来よう。「絶対」なんて言葉、絶対にならないのだけど、それでも私は強くそう思った。

次に、蓮華病院へ向かった。サラ院長先生と、麗奈のフィアンセの廉。ふたりに挨拶した。廉は将来、魔法省の研究機関に入ることが目標としていたが、先日の“蓮華典”の一件で、典のクローンが魔法省の研究機関に居たことが発覚しており、容姿のよく似た彼が入るのは色々なしがらみが出て来ると麗奈から聞いている。それで

も最後は、蓮華家の根回しが行なわれるのではないかと私は思っている。あまり、そういうコネクションみたいなものは好きじゃないけれど、それでも、彼には達成したい目的があるのだから、それはそれでひとつの手段として見ればいいんじゃないかとも思う。

「吉田さんは、ここを出たらひとまずは東京の学校に行くんだろう？」

「はい。まずは一年ほど、一応は医療の世界に触れてみて、それから編入という形を取ろうと考えています」

「もったいないなあ」

廉は少し残念そうな表情を作っ て見せたけど、またすぐにもとの笑顔に戻る。

「けど、まあそれが自分の決めた道なら、歩み続けるしかないよ。学校はどっちにしても東京になるんだろ？ 麗奈も東京の学校だから、ときどき遊んであげてくれよな」

廉は今しばらくこの病院で研究を続けていくそうだと。三年ほどで今の研究の目処がつからしいから、そうなると都心に出て来るといふ。それまで、麗奈と廉は遠距離恋愛だ。一応、蓮華島も東京都の特別区なのだが、いかんせん距離が開きすぎている。

「何にしても、吉田さんは卒業試験だね。麗奈も守護者と別れるのは結構悩んでいたけれど、それも仕方ない。いつかはそのときが来るんだ」

麗奈はすっかり継承者となり、本土の大学にも合格して、入学が決まっている。名前を聞けば驚くくらいの、東京の有名だ。海外の有名どころも狙えたようだが、あえて東京を選んだのは廉と色々な将来図を考えているからなのだろう。いずれにせよ、麗奈は、家に猛反対されたがそれを巻き返し、自分の意思を貫き通した。

「……そういえば、八卦さんは？」

ちよつと、話をそらしてみる。

「今は、学校じゃないか？ なんか、クラスメイトとお別れパーティーとか。そっか……そうだよな、八卦さんも居なくなるんだよな。」

知った顔が一気にいなくなるのは寂しいもんだ」

八卦さんは医療魔法の名門の家柄で、私の想像を遙かに絶するほどの知識の持ち主だ。その八卦さんが蓮華病院に出入りしていたのは、自分の専門外の分野も知っている廉が居たからで、そのため、助手を買って出ていたという。

彼女は、途中から蓮華魔法技術専門学校に編入してきたので、槍真が入院したときなど当初はここで顔をあわせることも無かった。もし、例の一件がなければ私と彼女の接点はないままに終わっていたかもしれない。そう考えると、縁とは不思議なものだ。

八卦さんは、医療の道を歩み続けるという。いや、それ以上ずっとずっと先の道を見据えている。彼女は今は大学に進学するらしいが、それは経歴を作るためだけに通うとのことで、同時平行で自身の研究も行なっていくそうだった。いずれまた、廉と歩む道の交わる日が来るかもしれない。

「蓮華島は、出会いと別れを繰り返す島なんですよおー。寂しいけれど、また新しい子たちがやってくるのです。廉先生もまた、ここを旅立つでしょうから、サラが蓮華島を守っていきますよ」

サラ院長先生は、かわいらしくガッツポーズしてみせた。

蓮華病院を後にし 私は、街外れの古びた寺院を目指した。

一見すると廃寺かと思紛うが、実は電気ガス水道も通っていて、中にひとり住んでいることを私は知っている。古びた扉を開け、中に呼びかけた。ノックしなかったのは、それをしてしまうと建物が壊れてしまいそうな気がしたからであった。

「おう、吉田か……」

里見は眠そうに欠伸をしながら玄関へと姿を見せた。いつもとは違う、ティーシャツというラフな格好だ。

「里見さん」

「あん？ こちらら寝不足なんだよ」

そっと部屋の中を見ると、参考書や問題集などの本が積んである。

「公務員試験、受けるんですか？」

「ああ。まあな」

「警察官ですか」

里見の一家は警察官を多く輩出している家柄である。魔法を扱える里見なら、きっと立派に職務をこなせることだろう。

「里見さんは、家のやり方には従わないものだと思ってました」

「別に警察官になりたいくなかったわけじゃねえよ。兄貴は立派に人々の平和を守ってるし、あいつはオレの憧れだった。オレが警察官にならなかつたのは、まあ……色々あつたからな」

色々、と言葉を濁して里見は言った。

「それに……べつに警察官になつても、オレはオレのやり方でやってく。里見家の言いなりにはならねえよ」

それにさ、と私の顔を見る。

「一応、胸の中の突っかかりは取れたしな」

姉さまのことだ　そう思い、まじまじと里見の顔を見つめてしまふ。

里見は恥ずかしそうにそっぽを向いた。そして、私の愛用の肩掛けカバンに視線を移す。

「お前はどうなんだよ」

私は、と言おうとして、ふと、聞いておこうと思った。

「里見さんは……姉さまのことが好きでしたか？」

「言えるかよ、バカ」

代わりに、別のことを口にした。私にとって、最大の試練となるべき事柄を。

「お前の姉貴の最後の敵討ちは、お前しかできねえよ。姉貴の想いを継げるのもお前だけだ。だからよ、吉田良恵。お前は」

お前は思うままに生きる。

そうか、私にしかできないのだ。姉さまの生きてきた証。結果的に死を選ばざるを得なかつたけれど、姉さまは必死にもがいていた

のだ。その未練を、その遺志を引き継げるのは、吉田義美の妹である私でしかありえない。

里見に礼を述べると、その場を後にした。

潮風がつんと鼻をつく。けれど、今はその匂いさえ心地良かった。

\* \* \* \*

「やあ、吉田さん。決心はついたかい？」

大城先生は、心配そうに尋ねる。

「キミは蓮華典の一件で、本なしで魔法を行使したよね。あれは本来、違法でとても危険な行為だけど、それでもキミはそれをやってのけた。もう、この試験　いや、儀式を通過できるだけの技量は持っているはずだ」

もう、揺るがない。力強く頷いた私を見て、大城先生は少し安心したように微笑むと、儀式用の部屋へ案内した。

扉を開き、私の目を見つめる。

「　ここなんだけど、見たとおり、何も無い。愛用の本を持って一人で入ってもらい、守護者と対話してもらおう。それだけなんだ。実力が伴っていれば、守護者は応じてくれる。力を譲った後に、その姿を消すだろう。それが、魔法発祥からずっと行われてきた世代交代の儀式だ」

大城先生は、悲しそうに目を伏せる。きつと、自分の守護者のことを思い出したのだろう。

「そして、魔法を受け継いだ者が天寿を全うしたとき、次の世代へと引き継ぐ。次の世代というのが、自分の子なのか、何代も後の子孫なのか、こればかりはわからない。相性と素質と、その他様々な要素が絡み合うから。僕やキミもきつと、この尊い力を次の時代へとバトンタッチするときが来る。それまで、この力をさらに高め、守り続けるのが、魔法人に課せられた使命だ。正直、僕は、“M - JAPAN構想”だとか、そういうのはどうでもいいと思っている。

大事なのは、さっき言ったことだよ」  
さあ、と扉の中を示す。

私は一歩、歩みを進める。

部屋は電気がついておらず、暗い。完全に部屋の中に入ると同時に、静かに扉が閉められた。

一面の暗闇　けれど、恐怖は感じなかった。

深く息を吸う。空気が澄んでいた。屋内とは思えない。

息を思い切り吐き出し　幾度か深呼吸をした。そして、私は腰のあたりを手探りし、カバンから本を取り出した。そして、その名前を呼ぶ。

「メイ」

名前が呼び子となって、愛用の医薬品集から飛び出す。

暗闇の中でも彼女は輝いていた。白い体毛がうっすらと全身を覆っており、そこがほのかに明かりを放っている。背中の翼を操り、小さな妖精はぱたぱたと私の目の前に浮く。

そっと私に近づき、小さな顔に笑みを浮かべる。慈しみと、労りと　それはひどく懐かしくて。

「ねえ、本当はさ……言わないでおこうと思ったんだ」

彼女は首を傾げる。暗闇の中、彼女しか見えない。その姿すら、ぼやけてくる。涙だった。

「言つと、心が揺らぎそうだったから。きつと、きつと、この儀式を終えられないような気がしたから」

彼女はそつと、小さな手を優しく伸ばした。私の鼻筋にそわせ、大丈夫だよ、という風にぼんぼんと撫でる。

「最初は気づかなかつた。ずっと、気づいていなかった。最初、この学校に来たとき、『night a star』で本を読んでいたことは教えてくれたけど、そこで働いていたことは教えてくれなかつたよね。今だったらわかる。あれは自分のことを知っている人と会われると、もしかしたら気づかれるかもしれないって思ったか

らでしよう？」

彼女はただ静かに聞いていた。

「三年生になつて、薄々気づき始めて。この前の蓮華典の一件で確信したよ。姉さま、私のことを助けてくれたでしょう。そのほかにも色んな場面にヒントはあった。里見は貴方のこと、気づいてたよ。気づいていて、あえて何も言わなかった。言つと、また居なくなつたときにもっと寂しい想いするから。だから、私にこの役を与えたんだよ。私だつて、寂しいの嫌なのにずるいよね」

彼女の小さな瞳を見つめる。その奥に浮かぶ感情の起伏を読み取つて、私は言つ。

「でもね、私も気づいたんだ。寂しいのも、哀しいのも。それは私だけじゃないつて……それは、それは貴方も一緒だよね？」

ねえ、と涙を拭い去り、私は“彼女”に向き合つた。

「姉さま」

慣れ親しんだ呼び方だつた。十二年間ずっと続けてきた、その呼び名。

涙を拭つても駄目だつた。次から次へと、流れてくる。この量だけは、どうやら魔法で減らせるものでもないようだつた。

吉田義美 享年十八歳。

彼女は、魔薬“エンジェル”の副作用を知らずに摂取してしまつた。ちよつと脳を活性化させる薬だと騙されたのだ。後になつて真相を知り、“怪奇”となつてしまうことを怖れ、魔薬を絶とうとしたが……あまりの中毒性故にそれは出来なかつた。また、絶つたとしても結果が遅くなるだけで、徐々に魔法の力に蝕まれて変化していく身体を疎み、脳が快楽を司る物質ドーパミンを出し続けるために、生きていくだけで得られる快楽という鎖を断ち切り、自らの手で死を選んだ。

死の直前、姉さまは“エンジェル”の魔法促進の主要効果で、魔法をすでに継承していたのだという。先代メデイもそのときから姿

を消したという。そして 自身の死の後に「守護者」として、先代メデイの身体を借りてこの世に具現化した。

そんな風なことを姉さまはおおまかに語った。

「ずっと……側にいてくれたんだね。見守ってくれていたんだね」

メデイ いや、姉さまは頷いた。

亡くなって、自分には未来も無い。そんな中で、未来のある妹の成長を見守り続け、そして、最期には自身は魔法を継承させて消えてしまう。これほどまでに酷い仕打ちってないと思う。神様はなんて残酷なのだろう。

しばしの、無言。

【良恵……ひとつだけ、付け加えさせて。貴方がさつき、私が自分の所縁あるところに貴方を案内しないようにしていたのは、メデイが吉田義美だと気づかれないようにしたからって言うていたよね……なぜだか、わかる？】

私は首を振った。

【私が遺書をのこさなかった理由と一緒に、私が遺書をのこさなかったのは、魔薬のこととか、オチコボレだったこととかを知られたいなかったとか、そんな理由じゃないの。私は……】

言おうとして、尻すばみに言葉は消えていった。姉さまもまた、自分の内側の感情と向き合い、必死に戦っている。

ややあって、姉さまは続けた。

【……父さま、母さまの言いつけもあつただろうけれども、あなたは私のことを思って、私に近づきたくて、ここに来た。そうよね？】  
姉さまは、東京の実家に居るときから、私に寄り添い続けていた。だから、私のそんな魂胆はお見通しだった。

【私はね。私の死をきっかけだとか、そんなことで、進路を決めてほしくなかったの。だから、私に繋がるものは見せたくなかった……】

私はじつと姉さまを見ていた。徐々にその姿が生前の姉さまのものへと変わっていく。



【私は両親の言うままに生きてきたし、その期待にだけ沿おうとした。だから、魔法の腕もろくに上がらず、卒業も危ういと言われて…… あんなものに手を出してしまったの。ドーピングみたいなものだからそんなに危険は無いと騙されたけれど、それでも私の意志の弱さが招いた結果だった】

姉さまは、泣き続ける私の目元にそつと指筋を這わせる。涙を拭く。

【なんだか、昔を思い出すね。貴方はいつも泣いていて、私もそれを慰めて。貴方は私を強いと思っていただけで、私は弱い人間だった。ずつとずつと、長女として、親の期待に応えなければならぬと思つて、自分の本当にやりたいことも見つけられず、結果こんなになつちやつた】

私はそれをただ震えながら聞くことしかできない。

言葉が、出なかつた。何を言えればいいのか、何も言うべきでないのか。本当に、本当に口が開けなかつた。かわりに涙はいくらでも出るというのに。

【でもね。貴方の守護者になれて、貴方にこの力を託せて、良かった】

「姉さま……」

姉さまが消えていく。

【駄目！ 決意を揺らがせないで！】

いよいよ最期の時が来ていた。私の迷いで、決意がぶれないように姉さまは叫ぶ。

そつだ。私がここで迷うと、姉さまの決意もぶれてしまう。これほど辛い決断はないのに。私がこんなことで立ち止まってちゃいけない。

涙が止まつた。姉さまはその様子を見ると、私と距離を取り、静かに宙に浮いた。

【これは、私からのお願い。私の分も生きて、私のできなかったこと、いつぱいっばい経験して大人になって。私は自分の道を見つけ

られなかった。けれど、貴方はちゃんと、貴方の道を見つけた。だから、これは姉としての最期のお願い。両親や家の言いなりにならないで。貴方のやりたいようにやって。どんなに困難な壁があっても立ち向かって、貴方の道を貫いて。ずっと歩いて、歩いて、歩き続けて、そして 』

そして、私の分も幸せになってください。

この言葉を最期に、姉さまは消えていった。私に、未来という名前の魔法を託して。

\* \* \* \* \*

卒業の儀式を終え、継承者となった私を出迎えたのは、麗奈だった。

「辛かったですよ」

麗奈も気づいていたようだった。けれど、それ以上は言わなかった。

「うん、大丈夫」

私は泣かない。もう、ぶれない。

そんな様子を見て、麗奈は目を細めた。

「強く、なりましたわね」

「それでもないよ」

姉さまの力は、姉さまの想いは私の中にある。これからも、私の代を越えたその先も、おそらくずっと。

私は思うのだ。魔法とは、先人の遺志。次の世代へ、より良いものを伝えたいと想う心が生み出した、力。不慮の事故で亡くなった、戦争で死んでしまったりした人が、自らの幸せを、次の時代へと託す。その連鎖の、想い。それは世代を越えるたびに強くなり、次の世代をより幸せへと導く。

無くならない想い。永久の願い。それが、魔法なのだ。魔法の

発祥は科学的には解明されていない。だから、私は思うことにした。人が、次の時代の人にできること。それが　魔法なのだ。

「さ、良恵さん。お別れパーティですよ」

麗奈はそう言うと、手を引っ張った。

案内されたところは、私たちの教室だったが、すでに卒業式も終わっているため、生徒は私の見知った顔のみだった。

「大城先生が、試験を延期した良恵ちゃんのために段取りつけてくれたんだよ」

槍真がそう説明してくれる。

「そして、私がプロデュースする期待の新人によるコントがあるんですよ！　ドツカンドツカン笑ってや！」

そう言ったのは、仁美だ。隣に、八卦さんも居る。

「仁美、八卦さん……」

「私だけ最後まで苗字でしたね。下の名前でえん呼んでくれたらいいのに」

八卦さんは笑った。

「え、いや、だって医療魔法の天才で、私と同じ道だからつい恐縮しちゃって……」

「でもこれからは違うのでしょうか？　最初は同じ学部ですけど、貴方は途中で自分の進む道に編入するって聞いたけど」

「どうしてそれを？」

そのことは八卦さんには話していなかった。

「私が話してもたんよ……私のこと話す時に、ついつい一緒にな。私もあんたもな、ちょっと似てるところあるねんよ」

仁美はそう言って、ばらしたと堪忍やで、と手を合わせる。

「いいよ、気にしないで。それより似てるところって？」

「私もな、最初は魔法の道を目指してたんやけど、『死者の掟ネクロの象徴ノミコン』を使えんかった一件からちよっと考え始めてな……家業手伝おうと想ってるねん」

「家業って？」

「簡単に言ったら古本屋さん。それも、魔道書を扱ってる。卒業後は、魔法を利用して、次の時代の魔法を勉強する子らにぴったりの本を探したるねん。守護者の宿る本は何でもいいとは言うけど、やっぱり、その人にあつたものがあるわけやし、そういうのを選ぶのが私の役目っていうかな、そんな感じ」

照れくさそうに笑う。みんな、ちゃんと考えているんだ。

ほほえましくて、ついつい笑みがこぼれる。仁美は照れ隠しだろ  
う、急に手をパンパン、と叩いて叫んだ。

「こらー、いつまでお客待たせる気いや！」

合図と同時に、仁美のクラスメイトらしき二人組が入ってくる。

「我統がしゅう 左右衛門さうゑもんでーす」

「米沢よねざわ 孝たかしでーす」

そして、声を合わせる。

「ふたりそろって、ヨネザえもん！」

そして、我統と名乗った男が、「なんでお前の名前が先やねん」と突っ込みを入れる。

「え、なんか響きがええかなって思って……」

「だいたい、それやと、秘密道具出すネコ型ロボットみたいな名前やないか！」

突っ込む方も突っ込まれる方も、なぜかカンペキなイントネーションの関西弁だった。

仁美に叩き込まれたようだ。満足げに頷き、「よう成長した。これで、デビューも夢やないで」と感無量に涙さえ浮かべている。ただ、私にはその二人のコントのどこが面白いのかわからなかった。よくわからないコントは続き、その間に、廉や内藤さんが入ってくる。大城先生が連れてきたようだ。遅れて、里見もやって来た。いつもの趣味の悪いホストっぽい服を着て。

教室の中、一列になって、一緒にコントを見る。とりたてて、コントはおもしろくなかったけど、それでも自然と笑顔が溢れてきておかしくて。涙さえ浮かべて、私たちは大笑いした。

窓の外には青空が広がっている。春でも蒸し暑い、蓮華島の気候は、卒業の代名詞である桜を奪っていた。

「ただ、今日ばかりはいいだろう。」

「ね、麗奈」

麗奈は首を傾げた。

「ペン、あるかな？」

麗奈は胸ポケットからボールペンを差し出した。

私はカバンから愛用の医薬品集を取り出し、さ行のページに「しあわせ」と、ありえない薬品名を書き足した。本当はそんな行為や、この本にはもう意味はないのだけど、それでも私はこの本を使って魔法を唱えたかった。それも、継承者なければできないような、難しい魔法を。

コントをしている二人の間に割って入り、私は叫ぶ。

「にばん、吉田良恵！ 一発芸やります！」

高々と、私の愛用だった医薬品集を胸元に寄せる。姉さまの、愛用でもあった医薬品集を。

そうしてそれをびりびりに破り、私は魔法を叫ぶ。幸せの、魔法を。

「吉田良恵の魔法 みんなが、幸せになりますように！」

私の両手から舞った紙のページは桜の花びらへと変化し、教室中に、たくさん降り注いだ。

桜の咲かない、桜の花びらの舞わない蓮華島の春に、ピンク色の吹雪が生じる。花びらは見渡す限り一面に、ひろくひろく、舞った。嬉しそうにそれを掴もうとする槍真や、麗奈。ほほえましそうに見ている廉や大城先生。呆気にとられていたコントの二人や仁美、八卦さん いや、閻も、みんなみんな笑っていた。あのクールな内藤さんも、ぶっきらぼうで斜に構えている里見でさえも、笑みを浮かべている。

ここに居ない姉さまに、私は胸の中で話しかける。

今までありがとう。ここからは、私の足で歩きます。

吉田良恵は、こんなにもあたたかいものを手に入れられたのです。

姉さま。私は今、とても幸せです。

私は立った。自分の道に。それは、これからもずっと続いていく。この手にした力には、姉さまの想いがこもっている。この暖かい力は、吉田良恵だけの魔法。親や家の命令で使うものではなく、自分の意思で使うもの。

かつて、世界にはなかったそれを、人は魔法と名づけたと言う。けれど、私はそれに自分で名前をつけたい。この素敵な力につける名前。それは、これから生きていく中で見つけるもの。

目の前に舞い落ちてきた桜の花びらを、私は掴んだ。そのまま握りこぶしを作る。

私はこれから、戦わなければならない。今まで避けるだけだった、両親や家と向き合わなければいけない。そして、勉強ももっともつと続けて。色々な困難もあるだろう。消えたくなくなるくらい辛いこともあるだろう。

けれど、私はひとりじゃないのだ。同じ空の下どこかに、今日この場にいる皆がいる。そして、心の中には、姉さまがいる。桜吹雪のなかで、私は姉さまの笑顔を見たような気がした。

## 終章『卒業』（後書き）

最後までご愛読いただき、誠にありがとうございました。本作品は、魔法学園企画『The Magical Book』（<http://nighstastar.web.fc2.com/book/>）の参加作品です。こちらは、魔法のある日本という同一の世界観を、複数の書き手で作り上げようというシェアワールド企画でした。

私たちの住んでいる世界とは平行世界ということ、それなら、自分の他作品の登場人物で話進めちゃったら面白いんじゃないかと勝手に自分で自分の作品の二次創作をしていました。元となる作品はわからなくても読めるようには気をつけています。

それぞれ、同名ないしは似た名前が登場させており、「とある管理栄養士の日誌」より、吉田良恵。「南月島の人魚」より、大城慶太。「ファルネース」より、服部槍真と里見守、サラ。「鬼が島の神隠し」より、神宮寺麗奈。私のサイト「nighstastar」の昔のイメージキャラクターより、内藤義康。

また、本シェアワールド企画で別作品を走らせている、ぶれさんの「我統と魔法」より、中井仁美と八卦閻。我統左右衛門と米沢孝。我ながら、ここまで引つ張ってくる自分にどん引いています。特にキャラクターをお貸しくださったぶれさんに改めて感謝の言葉を申し上げるとともに、当シェアワールドに関わった全ての方、そして、この作品を最後まで読んでくださった方に、改めて厚くお礼申し上げます。

もし、本と魔法のこの世界観に興味を持たれた方はご一報ください。世界観を利用していただいて構いません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2841bj/>

---

吉田良恵の魔法

2012年9月28日21時51分発行